

ハ酒類稅則ノ限ニアラス其種類ニ依リ製藥又ハ賣藥ノ免許ヲ可爲受儀ト可相心得此旨相達候事

但酒造營業人及酒類受賣營業人於テ酒精或ハ再溜酒精ヲ蒸餾シ又ハ販賣スル者ハ酒類稅則中燒酎ノ明文ニ據リ課稅スヘシ

明治十三年十一月十一日 常省乙第三拾九號ヲ以テ酒造稅則取扱心得書相達候處爾後該稅則改正追加相成候ニ付右取扱心得書別冊之通改正候條本年十月一日ヨリ之ニ照準シ取扱

ハシ
（別冊）
酒造稅則取扱心得書

目次

第一款 營業免許	自第一項至第十一項
第二款 諸器械調査	自第十二項至第十四項
第三款 器械封緘	自第十五項至第十七項
第四款 造石檢査	自第十八項至第二十項
第五款 課稅區別	自第二十一項至第二十三項
第六款 申陳期限	自第二十四項至第二十六項

第七款 自家用料酒類 自第四十七項至第五十二項

酒造稅則取扱心得書

第一款 營業免許

第一項 免許鑑札ハ豫メ授與スヘキ員數ヲ見積リ主稅局ヘ申出之ヲ受取置クヘシ

第二項 免許鑑札記載方ハ第一號雜形ノ如シ

第三項 酒造場ハ倉庫ノ棟數ト製酒ノ種類トヲ問ハス都テ其一區域ヲ以テ一ヶ所トシ免許鑑札ヲ授與スヘシ

但一區域外ノ倉庫建物ト雖檢査濟ノ酒類又ハ酒造用諸器械ヲ藏置スルニ止ルモノハ酒造場ノ附屬トスルコトヲ得ヘシ

第四項 免許鑑札ハ其年一期有効ノモノトス故ニ引續キ免許ヲ請フモノアルトキハ最初授與シタル鑑札ヲ差出サセ其鑑札ノ裏面ヘ該期ノ免許證印ヲ捺シ再ヒ之ヲ授與スヘシ

但裏面餘白盡キタルトキハ更ニ新鑑札ヲ授與スヘシ

第五項 免許證印ハ左ノ雜形ノ如ク各府縣廳ニ於テ調製スヘシ

（雜形畧之）

第六項 引續營業ヲ爲サントスル者ハ毎年十月一日マテニ出願セシムヘシ之ヲ過クレハ都テ新規ト心得ヘシ

第七項 二人以上資力ヲ合シ組合營業ヲ爲サントスルモノハ其組合印ノ連名ヲ以テ

願出シメ會社ヲ設ケ營業ヲ爲スモノハ願取ノ名ヲ以テ願出シムヘシ
但免許鑑札面ニハ誰外何人ト記シ又ハ願取ノ名ヲ記載スヘシ

第八項 十五年第六十一號公布以前ヨリ引續營業スルモノハ甲種トシ該公布以後營業スルモノハ乙種ト爲シ取扱フヘシ

但乙種ニ授與スル免許鑑札ニハ人名ノ肩ニ乙種ノ二字ヲ記入シ又酢元用酒類ヲ製造スル者ハ酢元用ノ三字ヲ冠スヘシ

第九項 稅則第五條代人ハ其營業熟知ノモノヲ以テ定メ實印ヲ捺シタル委任狀ヲ附與セシメ其人名ヲ届出テシムヘシ

但幼少其他事故アリテ後見人ヲ置クハ委任狀ヲ附與スルノ限ニアラスト雖後見人事故アリテ代人ヲ置クハ本項ニ據リ後見人ヨリ委任狀ヲ附與セシムヘシ

第十項 稅則第六條免許鑑札賣買讓與ノ節其書換方若シ甲乙兩管廳ニ交渉スルトキハ雙方連署ノ書面ニ免許鑑札ヲ添ヘ甲管廳賣渡人ニ出願セシメ甲管廳ニ於テハ乙管廳買受人ヘノ添翰該期免許納済且免許鑑札ヲ作り之ヲ下渡シ乙管廳ニ於テ甲管廳ノ添翰ニ據リ書換鑑札ノ下渡方ヲ爲スヘシ

但酒造場轉換ノ爲メ鑑札書換方兩管廳ニ交渉スルモノモ本項ノ手續ニ據ルヘシ

第十一項 廢業ノ者ハ其届出ノ節免許鑑札ヲ返納セシムヘシ

第十二項 廢業并書換等ノ返納鑑札ハ各府縣廳ニ於テ取纏メ十年當省乙第七號達ニ據リ不取締無之様消却スヘシ

第十三項 稅則第十八條造石稅免除ノ酒類ハ其造石ニ制限ナシト雖一期製造見込ノ種目石數等總テ稅則第廿六條ニ依リ届出シムルハ勿論一期製造ノ分ハ其石數翌期十月中ニ届出シムヘシ

第十四項 稅則第廿六條造酒見込ノ種目トアルハ清酒濁酒燒酎酒精再溜酒精白酒味淋酒ト其種目毎ニ掲記セシメ同條但書見込石數ノ増減ハ勿論其造り方法ノ變換トモ届出テシムヘシ

但釀酒ハ直シ酒保命酒桑酒養老酒菊酒紫蘇酒わらじ酒南蠻酒等各其酒名ヲ分記セシムヘシ

第十五項 稅則第二十七條酒造ニ屬スル倉庫納屋等ノ諸建物ハ其構造詳細繪圖面ヲ製シ且諸器械ノ員數トモ取調免許ノ節之ヲ差出サシムヘシ

但増減及變換等アルトキハ其時々更ニ之ヲ差出サシムヘシ

第十六項 稅則第廿八條戶外ニ掲出スヘキ標札ハ左ノ雜形ニ倣ヒ調製セシムヘシ
但石數ハ最初届出ノ見込高ヲ掲記シ増減アルトキハ其時々紙札ヲ貼付シ之ヲ更訂セシムヘシ

(雜形畧ス)

第十七項 營業者ノ屬籍住所ト酒造場ト甲乙兩管廳ニ交渉スルモノハ都テ酒造場所
在ノ管廳ニ於テ免許鑑札ヲ授與シ酒造檢査及徵稅方等取扱フヘシ

第二款 諸器械調査

第十八項 稅則第廿條第一項酒造用諸器械中桶類ノ新製修繕ヲ届出ルトキハ其時々主任官員出張シテ左ニ掲クル所ノ丈量法及算則ニ據リ詳密ニ調査ヲ遂ケ桶ノ側面ヘ左ノ件々ヲ掲載シ管廳ノ烙印ヲ爲スヘシ
但文字ハ磨滅消除セサルモノヲ以テ之ヲ書記スヘシ

番號

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

何程

調査ノ年號月日

調査人官姓名

酒造桶類丈量法

口徑 口頭ヨリ一寸胴徑ノ中央底徑ノ底面ハ孰レモ内測リニテ縱横(+)圖ノ如ク度リ此縱横徑ヲ和シ之ヲ二ニテ除シ以テ定ム深サハ其酒桶ノ前後左右中心等孰レモ底面ヨリ口徑マテノ間ヲ丈量シ之ヲ和シ五ニテ除シ以テ定ムヘシ
但尺度ハ孰レモ曲尺ヲ用ヒ分位ニ止メ厘以下切捨ツヘシ

算則

口徑ト胴徑ノ和ヲ自乘シ甲トス

胴徑ト底徑ノ和ヲ自乘シ乙トス

口徑ト底徑ノ和ヘ胴徑ヲ乘シ丙トス

甲乙ノ和ヨリ丙ヲ減シ殘數ニ深サ及ヒ〇、〇四〇三八四四乘率ノ一位ヲ石位トシ尺位ヲ一ヲ乘シ之ヲ二ニテ除シ其容量ヲ得ル

但石數ハ合位ニ止メ以下切捨ツヘシ

第十九項 甕類及胴張桶其他異様ノ桶類ニシテ前項丈量法及算則ニ據リ實量ヲ得難

シト認ムルモノハ便宜適當ノ方法ヲ以テ之ヲ査定スヘシ

但甕類番號石數等ハ木札ニ書載シ之ヲ正面ニ附シ置カシムヘシ(二十一年大藏省訓令第二十號ヲ以テ本條但書トモ改正)

第二十項 桶甕類ノ番號ハ倉庫ノ數ト酒類ノ種別トニ拘ハラズ總テ酒造場一ヶ所毎

ニ起號シ桶甕類ノ總數ニ應シテ其順次ヲ定ムヘシ

但桶甕ノ外諸器械ハ番號ヲ附スルニ及ハスト雖管廳ノ烙印ヲ捺シ得ルモノハ之

ニ烙印ヲ爲スヘシ

第二十一項 粕桶水桶等ノ類ニシテ全ク酒類ヲ容レサル分ハ丈量ニ及ハスト雖番號

ヲ記載シ之レニ烙印ヲ爲スヘシ

第二十二項 調査濟ノ桶甕類賣買讓與貸借又ハ返却スルトキハ其旨雙方連署ノ書面

シノ部

第三十二項 稅則第十六條非常ノ損害ニ罹リタル酒類ハ水火震災并腐敗等人爲ヲ以テ防禦スヘカラサルモノニ限ルモノトス此場合ニ於テハ其實況ヲ詳記シタル書面ヲ以テ届出シメ時日ヲ遷サス主任官員出張シ實際詳密ニ檢査ヲ遂ケ事實相違ナシト視認ルトキハ造石稅免除ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十三項 前項檢査セシ酒類ヲ變製セント欲スルモノハ更ニ變製酒ノ種目并石數トモ届出サセ製成ノ上尙之ヲ檢査スヘシ

第三十四項 檢査済ノ酒類并古酒買入酒等ヲ粕漉ニスルトキハ其時々届出サセ檢査ヲ爲シ尙製成ノ上之ヲ檢査スヘシ

但製成ノ上増石スルモノハ其石數ニ課稅スヘシ

第三十五項 濁酒白酒ハ都テ釀ノ儘ニテ檢査シ造石稅ヲ査定スヘシ

第三十六項 稅則第十八條造石稅免除ノ酒類ハ造石檢査ニ及ハスト雖取締ノ爲メ主任官員出張便宜之ヲ點檢スヘシ

第三十七項 十六年第四十二號公布第三項ニ據リ管廳ヘ届出ヘキ製酢ハ取締ノ爲メ主任官員出張便宜之ヲ點檢スヘシ

第五款 課稅區別

第三十八項 造石稅納期以前免許證札ヲ買賣讓與シ又ハ廢業スル者ノ檢査済酒類ニ係ル造石稅ハ其節之ヲ完納セシムヘシ

第三十九項 營業中都合ニ依リ未製成ノ酒類ヲ販賣スルモノハ其旨届出サセ檢査ノ

上其石數ニ應シ稅則第二條ノ類別ニ據リ課稅スヘシ

但未製成ノ酒類ヲ同業者ニ賣渡ストキハ雙方連署ノ書面ヲ以テ届出シムヘシ尤甲乙兩管廳ニ交渉スルモノハ製成ノ酒類ヲ檢査シ及其石數ニ係ル造石稅徵收方等ハ買受人所在ノ管廳於テ之ヲ爲スヘシ

第四十項 稅則第十八條造石稅免除ノ酒類ハ西洋模製ニ係ル葡萄酒ノ類麥酒ノ類トス其疑似ニ涉ルモノハ製造方法ヲ詳記シ當省ヘ稟議スヘシ

第六款 申請期限

第四十一項 造酒見込石高及酒造場員數并檢査済石高犯則人員等ハ第二號第三號第四號雛形ニ倣ヒ一ヶ月毎ニ報告表ヲ調製シ翌月十五日限リ差立主稅局ヘ送付スヘシ

第四十二項 造酒見込石高并ニ其原質品目ハ第五號雛形ニ倣ヒ報告表ヲ調製シ左ノ期限ノ通差立主稅局ヘ送付スヘシ

第一回 十月ヨリ十二月マテノ分 一月十五日限リ

第二回 十月ヨリ四月マテノ分 五月十五日限リ

第三回 十月ヨリ八月マテノ分 九月十五日限リ

第四十三項 免許證札受拂ハ每一期分第六號雛形ニ倣ヒ計算表ヲ調製シ翌期十一月十五日限リ差立主稅局ヘ送付スヘシ

第四十四項 免許稅造石稅ハ每一期分第七號第八號雛形ニ倣ヒ稅表ヲ調製シ翌期十

一月十五日限り差立主税局へ送付スヘシ

第四十五項 税則第十八條造石税免除ノ酒類種目石數ハ每一期分第九號雛形ニ倣ヒ報告表ヲ調製シ翌期十一月十五日限り差立主税局へ送付スヘシ

第四十六項 各酒類造石區分及現在石高并清酒垂分合ハ第十號第十一號第十二號雛形ニ倣ヒ各表ヲ調製シ翌期十一月十五日限り差立主税局へ送付スヘシ

第七款 自家用料酒類
第四十七項 自家用料酒類免許鑑札ハ酒類製造營業免許鑑札ノ雛形ニ依リ府縣廳ニ於テ調製ノ上酒造營業者ニ準シ之ヲ下渡スヘシ

但鑑札面酒類製造免許鑑札トアルヲ自家用料酒類製造免許鑑札ト記載スヘシ
第四十八項 自家用料酒類製造ノモノハ其種目及造石高ヲ管廳へ届出サシムヘシ

但造り高ノ増減及其種目ノ變換等ハ其都度届出サシムヘシ
第四十九項 自家用料酒類ハ時宜ニヨリ實地檢査ヲ爲シ其他不取締之レナキ様取計フヘシ

第五十項 自家用料酒類製造免許鑑札料ノ徵收及造石檢査ノ場合ニ於テハ酒造營業者ニ準シ之ヲ取扱フヘシ

第五十一項 自家用料酒類製造免許人員ハ第十三號雛形ニ倣ヒ一ヶ月毎ニ報告表ヲ調製シ翌月十五日限り差立主税局へ送付スヘシ

第五十二項 自家用料酒類製造免許鑑札料及造石高ハ第十四號雛形ニ倣ヒ每一期分

ヲ調製シ翌期十一月十五日限り差立主税局へ送付スヘシ
(雛形畧ス)

四二〇 太政官第四十三號布告 明治十六年十二月
酒造税則營業稅則賣藥印紙稅則煙草稅則ニ關シ租稅官吏ニ於テ犯則アリト認知シ若クハ思料スルトキハ其場所ニ立入り犯則ノ證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但其官吏ハ主任タルノ證票ヲ携帶スヘシ

四二一 大藏省第七十七號達 明治十六年十二月
本年第四十三號布告ニ依リ人民ノ家宅内ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スハ日出後日没前ニ於テシ其地戶長若クハ用掛隣佑ノ内ヲシテ立會ハシメ候様取計フヘシ此旨相達候事

四二二 大藏省令第二十七號 明治十九年八月
勅令第六十號ニ基キ自家用料酒類製造者心得左ノ通之ヲ定ム

第一項 酒造税則附則第一條ノ届書ニハ該期造酒ノ種目及ヒ製造見込石高ヲ記シテ差出ヘシ

第二項 前項届出ノ後造酒種目ノ變換及ヒ製造高ヲ増減スルトキハ其時々管廳へ届

四一九
四一七
以下
四二
三ノ二
五項
四三
六項

シノ部

出ハシ

第三項 免許鑑札ヲ受ケタル者ハ自家用料酒製造ノ標札ヲ戶外ニ掲出スヘシ

第四項 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ改名代替轉居セシトキハ其旨管廳ニ届出再
波又ハ書換ヲ請フヘシ

第五項 第一項免許届書式第三項標札書式ハ府縣知事ノ定ムル所ニ據ル

第六項 第二項第三項第四項ヲ犯シタル者ハ壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

○ 四二二 勅令第五十四號 明治二十一年 七月十一日

朕輸出酒類戻稅規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

輸出酒類戻稅規則

第一條 内國ニ於テ造石稅ヲ賦課シタル酒類ヲ外國ニ輸出スルトキハ輸出港稅關ノ
檢査ヲ受ケ置輸入港稅關ヲ通過シタル證憑ヲ得テ之ヲ輸出港稅關ニ差出シ造石稅
ノ下戻ヲ請フコトヲ得但其證憑ヲ得タル後滿三箇年以内ニ差出サハル者ハ其効力
ヲ失フヘシ

第二條 造石稅ノ下戻ヲ受ケタル酒類ヲ本邦ニ輸入シタルトキハ輸入港稅關ノ檢査
ヲ受ケ陸揚ノ際其戻稅ハ之ヲ還納スヘシ

第三條 本則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四條 本則ハ明治二十一年九月一日ヨリ施行ス

○ 四二四 大藏省令第八號 明治二十一年 八月三日

本年勅令第五十四號輸出酒類戻稅規則施行細則左ノ通相定ム

輸出酒類戻稅規則施行細則

第一條 酒類ヲ外國へ輸出セントスルモノハ其酒類ノ種目石數及容器ノ箇數輸入地
名積入船名等ヲ記載シタル書面ヲ輸出港稅關ニ差出シ現品ノ檢査ヲ請ヒ檢査濟ノ
證明書ヲ受クヘシ

第二條 酒類ヲ外國ニ輸入シタルトキハ該港ノ陸揚免狀及輸出港稅關ノ證明書ニ必
ズ在留本邦領事ノ捺印ヲ受ケ當初輸出ノ稅關ニ申出テ造石稅金ノ下戻ヲ請フヘシ

第三條 外國ニ輸出シ造石稅下戻ヲ受ケタル酒類ヲ更ニ輸入スル時ハ其酒類ノ種目
石數及容器ノ箇數ト當初稅金ノ下戻ヲ受ケタル年月日出港名ヲ記載シタル書面ヲ
輸入港稅關ニ差出シ現品ノ檢査ヲ受ケ造石稅金ヲ還納スヘシ

第四條 造石稅金下戻及還納ノ際石數ノ合位稅金ノ厘位ニ滿タサル端數ハ之ヲ切捨
ヘシ

○ 同指令

四二五 滋賀縣令 明治十六年 九月五日

酒造營業鑑札ヲ還納セスシテ居タルモノ翌期中ニ引續キ營業出願スルトキハ新規ト見做スノ限ニ非サヤ右相伺
候也

シノ部

大藏省指令 明治十六年
十月一日迄ニ出願スルモノニ非サレハ引續キ營業ト爲スノ限ニ非スニ日以後ニ出願スルモノハ新規營業ト心得
ヘシ

四二六 愛媛縣伺 明治十六年
十月十二日

第一條 甲者自家用料酒製造免許ヲ受ケ自制限以内ヲ製造シ尚若干ノ餘有アルヲ以テ乙丙ノ乞フニ任セ自家
ニ於テ製造爲致タルモノアリ甲乙丙ノ製造石高ヲ合算シ丙ハ免許ヲ受ケスシテ製造シタルモノニ付酒造稅則
附則第一條違犯者トシ同則第八條ニ照シ處分スヘキハ勿論ニ候得共甲ハ免許證札ヲ得自家ニ於テ製造シタル
モノナルヲ以テ同則中之ヲ處罰スヘキ正條ナシ刑法第百九條ニ據ントスルモ甲者ニ於テ器具ヲ給與シ又誘導
指示シタルモノニアラス右處分方如何相心得可然哉

但甲者ニ於テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シタルトハ下條ニ仍リ處分スヘキ哉
第二條 甲乙丙第ニ組合ヲ爲シ甲ノ名面ヲ以テ自家用料酒製造ノ免許ヲ受ケ甲家ニ於テ制限以内ノ酒類ヲ製造
シタルトハ甲ヨリ器具ヲ給與又ハ誘導指示シタルト否トヲ不問甲ハ刑法第百九條ニ乙丙ハ附則第一條ニ照シ
處分スヘキモノト相心得可然哉
右至急御指揮ヲ仰キ候也

司法省指令 明治十六年
十一月十三日

伺之趣第一條第二條共甲乙丙ト共ニ酒造稅則附則第八條ニ依リ處分セサルヘカラス但第一條ハ甲ニ於テ製造
ニ關係セズ單ニ自家ニテ製造セシメシノミニ止マレハ刑法第百九條ニ依リ乙丙ノ從犯トシテ處分スヘキ者トス

四二七 山形縣伺 明治十六年
十二月廿八日

自家用料酒類非淋(風水火燬)ノ災害或ハ腐敗ニ罹リタル石數其期中代料トシテ再ヒ製造スルヲ得ヘキヤ將少過

誤ニ出ル流矢兼報ニ屬スル分ハ前文ニ據ラサルヤ右ハ目下調査上疑似ニ涉リ候條至急御指揮相成度候也
大藏省指令 明治十七年
一月九日
申出ノ通
但非常災害ノ實況及ヒ腐敗酒トモ検査ヲ受ケシムヘシ

四二八 福岡縣伺 明治十七年
四月二日

家督相続及ヒ月主タル者家族ニ酒類免許證札讓渡ストキハ稅則取扱心得書第四十一項(造石稅納期以前免許證
札ヲ覽取願申シ又ハ廢業スル者)検査済ニ係ル造石稅ハ其節之ヲ完納セシムヘシノ限外ナルヤ
大藏省指令 明治十七年
四月九日

代換リニ依リ酒造免許證札ヲ書換タルトキハ稅則取扱心得書第四十一項ニ據ルニ及ハスト雖モ代換リニアラス
シテ家族(隣札讓渡)ストキハ四十一項ニ據ルヘキ儘ト心得ヘシ

四二九 大藏省ヨリ兵庫縣ヘノ達

兵庫縣ヨリ大藏省ヘ酒造稅則第十三條及第二十三條第二項ノ儀ニ付十六年一月十三日付伺第五條但書ニ對シ同
年四月十一日付ヲ以テ指令及ヒ置キシ處右ハ混和ノ所爲過誤ト故違トヲ問ハス各本條ニ據リ處分スト更正スル
旨ヲ本月五日同省ヨリ更ニ該縣ヘ達シタリ
右參照

兵庫縣ヨリ大藏省ヘ酒造稅則第十三條第二十三條第二項ノ所爲處分方ノ儀ニ付伺(節錄)
第五條 稅則第十三條(検査未済ノ酒類)検査既済ノ酒類又ハ古酒買入酒樽ヲ混和スル者モ其造石稅ハ應石數
ヲ以テ之ヲ納ムヘシ第二十三條第二項(検査已済ノ酒類)検査未済ノ酒類ヲ混和スルヲ許サスハ事實相似

タル所爲ニシテ甲ハ總石收ノ納税ニ止リシハ罰金ニ處シ仍ホ其酒類ヲ沒收セラルハ以テ假令第二十三條ノ所爲アルモ第三條ノ所爲ニ申供スルハ必然ナリ且檢査酒類ノ桐標等既ニ入換證據セシ上ハ檢査上他ニ證左ノ區別スヘキモノナレ此場合ニ於テハ一二酒造人ノ申供ニ任セ處分スヘキヤ
但本分申セ其犯愾故意ト過誤トノ別ナク各本條ニ據リ處分スヘキヤ
明治十六年一月十三日

○
檢査ノ上其實證ナキモノハ申出ノ通
但隱蔽ヲ謀ルノ故意ヲ以テ檢査既済未済ノ酒類ヲ混和シタルモノハ稅則第三十二條ノ酒類ヲ隱蔽シタルモノハ其酒類ヲ沒收シ其酒類ノ石收ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ科スヘシニ據リ其他ハ申出ノ通
明治十六年四月十一日

○
四三〇 新潟縣伺 明治十八年三月四日
爰ニ酒造營業人アソ稅金納期日前酒類造石稅一時即納(例)ハ一期中二三期ヲモ併セ納ムルノ類致度旨出願スルルハ即期納テ二期へ領收シ不苦哉
大藏省指令 明治十八年三月十三日
伺之罪申出ノ通取計不苦候事
但收納ニ係ル諸證書切符等ニハ都テ第何期ハ一時上納ト加書スヘシ

○
四三一 山形縣伺 明治十九年八月十三日
勅令第六十號改正酒造稅則附則中雜稅ノ廢止ニ相伺フ
一規則第四條ニ飲食店トアルハ料理屋雜稅廢止馬肉魚介別賣屋天麩雜屋其他水菜屋等ノ如キ來客ノ陪メ
ニ應シ酒賣ヲ出スモノハ名稱ノ如何ニ拘ラス酒テ合當シタル儀ナルヤ
一同條雜稅廢止アルハ下宿屋雜稅等モ合當シタル儀ナルヤ
大藏省指令 明治十九年八月廿四日
兩條共伺ノ通
但第二條下宿屋雜稅等ニシテ單ニ其客室ヲ貸シ又ハ乘船ノ取扱ノミヲ業トスルモノハ此限ニアラス

○
四三二 京都府伺 明治十七年四月十一日
明治十六年十二月第四十三號布告酒造稅則暫行營業稅則暫行煙草稅則等ニ關シ租稅官吏ニ於テ犯則アリト認知シ若クハ思料スルトキハ其場所ニ立入り犯則ノ証憑取調ノ處分ヲナスコトヲ得但其官吏ハ主任タルノ証票ヲ携帶スヘシトアリ右郡區役所租稅取扱主任ノ書記ニ於テモ同様處分スルヲ得ヘキ儀ニ候哉果シテ然ラハ証票ハ其郡區役所ニテ適宜調製致サセ該費用ハ國稅徵收費ノ内ヨリ支出致シ然ルヘキヤ
大藏省指令 明治十七年四月十九日
伺之縣郡區書記ヲシテ國稅檢査ニ係ル事務爲取扱儀ハ不相成儀ト可心得事

○判決例
四三三 明治二十年乙第二百八號
酒造稅則附則改正第六條ニ(自家用料ノ酒類ハ云々又ハ他ノ委託ヲ受ケ之ヲ製造スルヲ得ス)トアル其意ニ於ケル自家用料酒製造ノ免許ヲ得タル者ハ自家ノ飲料ニ供スル爲メニ非サルヨリハ製造スルト能ハサルモノナルヲ以テ他人ヨリ委託ヲ受ケ製造スルト得スト云フニ在テ免許ヲ受ケタル者ニマデ他人ノ委託ニ應シ製造スルヲ得スト據シタルノ精神ニハ非サルナリ故ニ原裁判官ニ於テ被告人ハ自家用料酒類製造人應當務ケ治ノ委託ニ應シ賦

愛媛縣平民 林 音 衛
七百七十二

ヲ代造シタルコトアルモ被告ハ自家用酒製造人ニ非サルノ事實ヲ認テ以テ其所爲ヲ罰スヘキ法律ニ明文ナシトシ無罪ヲ宣渡シタルハ相當ノ擬律ニシテ錯誤ナリト云フヲ得ヌ况ヤ本案被告人ノ所爲ノ如キハ自家用酒製造免許本人カ同附則第六條ニ違ヒ其住居セル一家外ニ於テ製造スルモノニ加功シタル從犯者ニ過キスシテ其從犯者ヲ罰スルノ明文ナキ以上ハ附則ニ於テ之カ從犯者ヲ罰スヘキ者ニ非サルニ於テオヤ又其第六條ニ依リ罰スルヲ得サル者トスルモ其第一條ノ從犯者ナルカ如ク論議スト雖モ其第一條ニハ(自家用酒ノ酒類ヲ製造セント欲スル者ハ其旨管廳ニ届出免許證ヲ受ケ云々)トアツテ他人ノ委託ヲ受ケ製造スルニ其旨届出免許證ヲ受ケヘシト云フニ非サルヤ明ナルヲ以テ被告人ノ所爲右第一條ニ違背シタルトモ云フヲ得サルナリ因テ上告ノ論旨ハ總シテ相立タサルモノトス

明治二十年二月廿八日

四三四 明治廿年乙第二百五十一號

靜岡縣平民 渡邊國三郎

凡酒造酒類ノ腐敗等ニ罹リタル時ハ酒造稅則第十六條ノ規定ニ從ヒ直ニ管廳ヘ申出檢査ヲ受ケヘキハ勿論ナルニ其類ナク之ヲ他ニ隱蔽スルニ於テハ其隱蔽ノ費メハ免カレ得ヘカラサルモノトス何トナレハ縱令之レカ腐敗ニ罹ルモ正當ノ手續即チ檢査ヲ受ケ初テ廢棄ニ屬スルヤ否ヲ決スルモノニシテ之ヲ私擅ニ廢棄免稅ト爲シ得ヘキモノニアラサレハナリ故ニ原裁判官カ全稅則第三十二條ヲ適用處斷シタルハ相當ナルヲ以テ被告第一論旨ハ相立タス而シテ原裁判官カ認メタル被告カ明治十八年中買取メタル酒造用五尺樽壹個ヲ無届ノ儘ニテ所持シ居タルハ即チ全稅則第三十二條第一項末段ノ從犯者ナルニ第二項ニ違背シタルモノトシ處罰シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリ然レモ被告カ擬律ヲ新調シテ何日内ニ届出ツヘシトノ規定ナキ上ハ之ヲ所持スルモ無罪ナリト云フノ論旨ハ不當ナルヲ以テ相立タサルモノト裁定ス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ則リ第二ノ所爲ニ對シ言渡シタル一部ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判

言渡ヲ爲ス左ノ如シ

渡邊國三郎

原裁判官カ認メタル事實ニ因レハ被告カ第二ノ所爲ハ酒造稅則第二十條第一項酒造用儲蓄瓶ハ云々其賣買廢與貨借ハ其時々管廳ヘ届出ツヘシトアルニ違背シタルヲ以テ全稅則第三十五條第二項ニ依リ二圓以上二十圓以下ノ範圍内ニ於テ四圓ノ罰金ニ處スル者也

明治二十年三月十七日

四三五 明治二十年乙第二百八十八號

鳥取縣平民 生田藤一郎

原判文ヲ閱スルニ(被告人生田藤一郎ハ酒造廢棄者ニシテ明治十九年五月廿四日已降檢査未済ノ酒三升酒淨壹斗三升四合アリタル内同日已來數度ニ檢査未済ノ酒淨三升ヲ近隣ノ者或ハ被告ト懸念ナル者へ無代價ニテ譲與シ又ハ同日已來檢査未済酒淨壹斗壹合九勺ヲ追々自用ニ消費シタルモ該酒淨ハ酒類ト名稱ヲ下ス可キ者ニアラサルヲ以テ該所爲ハ治罪法第三百三十五條ニ依リ無罪ナリト判定ス云々)トアルヲ見レハ檢査未済ノ酒淨ハ酒類ニアラスト爲シタルモノナルモ酒淨製造ハ酒淨ニ捲リ揚ケ直チニ其石收ノ檢査ヲ受ケ納稅額ヲ定ムヘキモノニシテ檢査前ニ酒淨ヲ扣除シ免稅スヘキ者ニアラサルヲ以テ總テ石收ニ包含シ檢査ヲ受ケ納稅スヘキモノナリ故ニ檢査前ニ之ヲ消費セシモノハ被告ヨリ稅則ノ從犯者タルコトハ得テ免カル可ラサル者ナルニ原裁判官ニ出テテ前掲ノ如ク酒類ニ非ストシテ無罪ヲ言渡シタルハ檢査官上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス因テ治罪法第四百三十一條ニ則リ原裁判官渡ノ一部ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

生田藤一郎

原裁判官カ認メタル事實ニ依レハ被告カ檢査未済ノ酒淨三升ヲ無代價ニテ譲與シタルハ酒造稅則第三十一條ニ該酒淨檢査未済ノ酒淨壹斗壹合九勺ヲ專用ニ消費シタルハ全稅則第三十三條ニ該ルヲ以テ被告人ヲ第一ノ所爲ニ付違石

シノ部

税三倍ノ料料金三十六錢ニ第二ノ所爲ニ付造石税ノ三倍料料金壹圓二十二錢三厘ニ處スル者也
明治二十年三月廿四日

四三六 明治二十年乙第二九十九號

凡テ自家用料酒ヲ醸造セントスル者ハ酒造規則第一條ニ從ヒ管轄廳ニ届出テ免許證札ヲ受ケヘキ者トス若シ
免許證札ヲ受ケス醸造セシ者ハ其酒ノ何酒タルヲ問ハス總テ該條ノ違犯者タルヲ以テ今則第十條ノ制裁ヲ受ケヘ
キ者トス本件原判文ヲ鑑査スルニ原裁判官ニ於テ被告ガ酒ヲ密造セシヲ附則第一條ニ清酒ヲ密造セシヲ今則第
三條ニ違背セシモノトシ今則第十條ニ照シ各別ニ處罰シタルモ附則第三條ハ免許ヲ受ケタルモノガ該條ニ違ヒ清
酒ヲ製造セントスルニ制裁ヲ爲スニ在リテ其初メヨリ免許ヲ得ズ製造セシモノハ如キハ何酒ヲ製造スルモ總テ第一條
ノ違犯ニ止マルヲ以テ其免許ヲ得ズ製造セシハ清濁兩種ノ酒タルト清濁兩種ノ内一種ノミタルトニ關セス今則第
十條ニアル第一條云々ヲ犯シタル者云々トアルニ該當スルニ因リ本按ハ唯タ無免許製造ノ一罪トシテ罰ス可キモ
ノナリトス然ルニ原裁判官ニ出テテ前掲ノ如ク二罪トシ罰シタルハ擬律錯誤ニ係ル失當ノ裁判ニシテ即チ非常上
告諭旨ノ如ク相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ科シタルモノニ付破毀ノ原由アルモノトス因テ治罪法第四百三十五條三則リ
原裁判官破毀ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

扶野 嘉藏

原裁判官カ認メタル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照スニ被告ガ免許證札ヲ受ケス自家用料酒ノ清濁兩種ノ酒ヲ密造セシ所
爲ハ其ニ酒造規則第一條ニ違背スルヲ以テ今則第十條ニ依リ罰金三圓以上三十圓以下ノ範圍内ニ於テ被告ヲ
罰金四圓ニ處シ仍ホ現在スル其製造酒類及ヒ補總利ハ之ヲ沒收スル者也
明治二十年三月廿四日

四三七 明治二十年乙第三百二十三號

本案ノ事實タルヤ原判官ノ認メタル所ニ依レハ其第六號釀造酒ノ後管轄廳へ届出テス水壹斗九升ヲ加入シ搾
リ立テ清酒トシテ其壹斗九升中ケテ釀造ヲ受ケス賣捌キタルモノナレハ即チ其差水ヲ爲シタルハ該酒販賣セ
シ手段中ニ包含スルモノナルニ因リ之ヲ以テ石數増加シタルモノト爲シ各別ニ其罪ヲ論スヘキモノニアラス然ル
ニ原裁判官ニ出テテ前掲ノ如ク二罪トシテ處罰シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ル失當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アル
モノトス因テ治罪法第四百三十一條ニ則リ第一ノ所爲トシテ罰シタル一部ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左
ノ如シ

高山松太郎

原裁判官カ認メタル事實ニ據レハ前説明スル理由ナルヲ以テ釀ニ差水ヲ爲シタルヲ届出テサリシ所爲ニ對シ罰金
二圓ニ處シタル部分ノ裁判ハ之ヲ取消ス者也
明治二十年三月三十一日

四三八 明治十九年乙第千八百八十六號

原判官ノ認メタル所ニ據レハ被告孫平ハ清酒八斗ノ檢査ヲ受ケス内四斗ハ壹升代價九錢ニテ同四斗ハ檢査既済ノ清
酒ニ混和シ前同代價ニテ悉皆之ヲ販賣セシモノナレハ其所爲共ニ稅則第三十一條ニ依リ未檢査清酒四斗并同四斗
ヲ以テ檢査既済ノ酒類ニ混和セシ清酒ノ總石數ニ相當スル造石稅三倍ノ罰金ニ處シ賣代金ハ之ヲ追徵スヘキモノ
ナリ何トナレハ該則第三十六條ハ第三十三條末項ノ違犯者ヲ制裁スル法律ニシテ被告ガ所爲ノ如キ檢査未済ノ酒
ヲ已濟酒ニ混和スルノミニ止マラス之ヲ販賣セシニ於テハ即チ第二十三條初項ノ違犯者タルハ其制裁モ從テ異ニ
スルヲ以テナリ然ルニ原裁判官ニ出テテサリシ擬律ノ錯誤ヲ免カレテ故ニ上告諭旨中ノ第一所爲云々ノ點ニ於テ

岡山縣平民 牧野孫平

シノ部

其輪音ハ異ナルモ擬律錯誤ナリトノ論點ハ其理由アルモノトス因テ治罪法第四百二十九條ニ則リ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決スルコト左ノ如シ

牧野孫平

右被告カ所爲ノ事實ハ原判官ノ認ムル所ニ據リ酒造稅則第二十三條初項及ヒ同則改正第三十一條第三十八條ニ依照シ賣捌代金拾六圓貳拾錢ヲ追徵シ酒類賣石八斗ニ該ル遺石稅ノ三倍ノ罰金貳拾壹圓六拾錢ニ處スルモノナリ
明治二十年一月廿二日

四三九 明治十九年乙第四百八十九號

熊本縣士族 高城龍次郎

酒造稅則第三十一條ヲ檢スルニ酒粕賣代金ヲ沒收スルノ法支ナキノミナラス稅則中酒粕賣捌ヲ制裁スルノ正條アルコト又假令其酒類ノ犯則ニ係ルモ精粕ニ至ル迄沒收或ハ追徵スルノ謂ハレナク酒類諸器械等ノ沒收追徵ノ處分法ハ各其本條ニ規定シアルヲ以テ刑法ノ總則ヲ引用スヘキモノニモ非ス然ルニ右第三十一條ヲ適用シナカラ本件酒粕賣捌代金追徵ノ處分ニ及ヒタル此一部ハ擬律ヲ錯誤シタル裁判ナリト裁定ス因テ原裁判擬律錯誤ノ一部ハ治罪法第四百三十一條ニ據リ之ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判會渡ヲ爲スコト左ノ如シ

高城龍次郎

右ニ辨明スルカ如クナルヲ以テ原裁判被告カ賣捌タル粕代金拾三圓五錢ヲ追徵スト會渡タル此一部ハ之ヲ取消スモノ也

明治二十年一月二十二日

四四〇 明治二十年乙第四百八十三號

豐後縣平民 宮内治三郎

酒造稅則第二十六條ハ其明文ノ如ク一期酒見込ノ種目石數並其造リ方法又ハ種目見込石數ノ増減等ヲ届出ヘキコト規定シタル法章ニシテ酒造ノ混同等ヲ届出ヘキノ規定ニ非ケルナリ爰ニ被告事件ノ事實如何ヲ觀ルニ原判文ニ被告ハ明治十九年十二月十四日第七號補酒ノ内ニ己ニ檢査ヲ經タル第四號補酒ノ淨五升ヲ加入シタル事實明瞭ナリト雖モ右八單ニ酒淨ヲ醗ニ混入シタルノミニシテ酒造ノ方法ヲ變更シタルモノニアラサルヲ以テ云々トアリ此事實ニ於ケル種目ヲ變更シ又ハ見込石數ニ増減等アルコトヲ檢査未済ノ醗ヘ檢査済ノ酒類ヲ混和シタルノ所爲ニ過キサレハ稅則第十三條ニ依リ總石稅ヲ納ルニ止ルモノニシテ之ヲ稅則第六條ハ勿論其他ノ法條ニ觸レタル者トハ爲ヌヲ得ス故ニ原裁判官ノ此事實ヲ認メ無罪ヲ會渡シタルハ至當ナレハ之ヲ擬律錯誤ナリトノ上被告應ハ到底採用スルニ由ナキ者トス因テ治罪法第四百廿七條ニ從ヒ本案上告ハ棄却スルモノ也
明治二十年二月廿四日

四四一 明治二十年乙第四百二號

靜岡縣平民 野澤孫九郎

酒造稅則第五條ニ酒造營業人不在又ハ事故アル時ハ代人ヲ置キ此規則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシトアルハ畢竟檢査等ニ際シ其不在又ハ事故ノ爲メ不都合ナカラシメンカ爲ノ精神ニ過キスシテ其檢査ノ定期ナルト臨時トヲ區別スヘキ者ニアラス又不在ノ一日以上ニ及フト其所在ノ遠近ナル如キハ事實ノ論點ニ屬スルヲ以テ上告ノ原由トナスヲ得ヘカラル者トス因テ治罪法第四百廿七條ニ則リ本案上告ヲ棄却スル者也
明治二十年三月廿四日

四四二 明治廿年乙第三百廿八號

高知縣平民 福島爲之助

酒造稅則第九條ハ其第三條ニ掲グル酒類遺石稅徵收ノ便宜ヲ斟酌シ只タ其納期ヲ規定セシ迄ニテ一年ヲ兩期ト

ナレ營業ヲ開始スル前後ノ區別ニ因リ納税ヲ異ニスルカ如キ他ノ法律ト同一律意ヲサレハ即チ同稅則第三十二條末項ニ造石稅三倍ノ金額ヲ科スヘシトアルハ納期ノ第一乃至第三期限ノ如何ニ拘ハラズ現ニ犯則ニ係ル酒類種目ノ石數ニ相當スル税金三倍ノ金額ヲ科スヘキモノタルヤ勿論ナレハ被告カ喋々辯難スルモ此論旨ハ之ヲ採用スルニ足ラス然レモ原告官カ認メタル被告カ所爲ノ事實ニ於ケル檢査未濟ニ係ル第十八號清酒五石二斗三升二合ヲ第四十二號補ニ隱蔽シ而シテ掩ハンカ爲メニ他仕込桶ノ酒既覺斗許宛ヲ汲取リ之ヲ集合セシ仕込ノ部分ヲ更ニ届出サルモノナレハ單ニ隱蔽ノ一所爲トナシ論斷スヘキモノトス何トナレハ別ニ酒類種目ヲ變換セシニアラサルノミナラス畢竟彼レニ減シ是ニ増加シタルカ如キハ固ヨリ酒類隱蔽ノ手段ニ過キスシテ他ニ一罪ヲ組成シタルモノニアラサレハナリ然ルニ原裁判所於テ該事實ヲ認メテ之ヲ二所爲トナシ科罰シタルハ其旨趣異ナルモ上告未段斷旨ノ如ク到底擬律ノ錯誤ヲ免レサル不法ノ裁判ナリトス因テ治罪法第四百三十一條二則ノ第二所爲トシテ科罰シタル部分ノ裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス左ノ如シ

福島爲之助

右被告カ所爲ノ事實ハ原判官ノ認ムル所ニ據リ前ニ説明スル理由ナルヲ以テ釀造仕込既ヲ増加セシトノ點即チ第二所爲トシテ罰金八圓ニ處スト旨遊シタル部分ノ裁判ハ之ヲ取消スモノナリ

明治廿年三月三十一日

四四三 明治十八年第二千四百三十三號

千葉縣平民 小總藤兵衛 外九名

抑モ他人ノ免許證ヲ借受ケ酒類ヲ釀造スルハ酒造稅則第三十條同第三十九條ノ制裁スル所ナリト雖モ合併營業ノ如キハ法律ノ條ニ非サレハ無免許者免許者ト合併ノ營業ヲ爲シタルモ免許證ヲ借借シタル者トシ論スヘキノ限ニアラス然レハ原裁判所ノ終審裁判官滙審中ハ事實ヲ按ズルニ被告カ人カ明治十三年十四年及十六年

網谷常吉ノ酒造營業免許證ヲ以テ同人ノ酒造場ニ於テ各釀酒シタルハ云々ニ參照シ其事實自ラ明ラカニシテ被告カ人ハ已レ免許ヲ受ケス常吉ノ免許證及ヒ其酒造場ニ於テ各自ノ酒造ヲ爲シ賣買シタル者トアルニ據レハ被告十名ハ無罪ナリト雖モ其後段ニ酒造稅則ニ違犯シタルノ既經充分ナリトス右說明ノ如クナルヲ以テ云々統テ原裁判ヲ認可ストアリ依テ之ヲ始審ノ判文ニ徵スルニ其第四項ノ判文ニ依レハ被告藤兵衛カ明治十三年及十四年ノ所爲ハ全ク合併營業ノ事實ニシテ其第八項ノ判文ニ據レハ同人カ明治十六年十一月上旬網谷常吉ノ酒造場一切ヲ譲リ受ケナカラ其前ノ免許證ヲ書換テ願ハサル云々ハ即チ酒造稅則第六條ニ背キ同則第三十五條ノ制裁ヲ受ヘキ者又同人等八名カ同年十二月以來ノ所爲ハ則チ合併營業ニシテ免許證ニ非サレハ其罪ナク又其第七項ノ判文ニ據レハ被告菅代松及ヒ半平ノ所爲ハ明治十六年十月以來小總藤兵衛等ニ依頼シテ清酒ヲ代造セシメタル事實ナレハ同則第二十九條ノ支配ヲ免レサルモノナリ如此始審ノ判文ニ掲ケル事實ハ數個ノ所爲ナルニ原裁判所ノ終審判文ニ記スル所ハ前ニ云フ如ク茫漠トシテ而モ其認ムル所ハ確切實情ノ事實ナルヤ將合併營業ナルヤ得テ知ル可ラサルノミナラス假ニ之ヲ以テ始審裁判ノ事實ヲ變更正シタルモノトセンカ即チ其造酒ノ種類及ヒ造石高ノ明記ナキカ故ニ仍ホ法律ノ適用ヲ爲スニ由ナク到底事實理由ノ不備タルヲ免レサル違法ノ裁判ナリトス已ニ此點ヲ以テ原裁判全部ノ破毀ヲ認ル以上ハ各上告論點ニ對シ一々辯明ヲ與フルヲ要セス

明治二十年一月三十一日

四四四 明治二十年乙第百五十八號

愛媛縣平民 田村吉郎衛

酒造稅則第二條酒類ヲ分テ左ノ三類トシ云々一類釀造清酒清酒其他釀造シタルモノヲ云フトアリテ釀造シタルモノニシテ即チ一類ノ釀造酒タルヲ論テ誤ラス故ニ釀造酒類ニ非ストノ被告上告論旨ハ相立タス然レモ酒造稅則中特ニ沒收ノ例ヲ掲載シアルヲ以テ刑法ノ沒收例ヲ適用スヘキ者ニ非ス而テ稅則第三十二條ニ容許ヲ沒收スヘキノ明文ナキヲ以テ隱蔽用ニ供シタル酒類ハ沒收スヘキ者ニ非ス然ルモ原裁判所於テ刑法第四十三條ヲ適用

シノ部

ヲ欠キタルヲ以テ被告入等ノ所爲處罰ハ屢吉ヲ代理人トシタルニ過キタル歟又ハ賤札ノ借借ナルカ若クハ組合商
業ト云フヘキモノナルカノ事實ヲ知ルニ由ナク從テ擬律ノ當否如何ヲ隱匿スルヲ得ス乃チ原裁判ハ治罪法第三百
四條ノ規定ニ違フモノニシテ附帶上告旨趣ノ第一ハ治罪法第四百十條第九項ニ適スルモノトス此點ニ依リ原裁判
ヲ破毀スヘキモノナルヲ以テ上告及ヒ第二ノ附帶上告點ニ對シ辨明ヲ爲サズ治罪法第四百二十八條ニ照シ原裁判
ノ全部ヲ破毀シ福井縣裁判所ニ移シ更ニ審判セシムル者也
明治二十年四月三十日

四四八 明治二十年乙第四百五十號

三重縣平民 多田ソヂ

凡ソ自家用料ノ爲メ酒類ヲ製造スル者ニ於テ之ヲ販賣スルハ其所爲酒造稅則附則第七條ニ違反スルヲ以テ同第
十條ノ制裁ヲ受ケサルヘカラサルヤ勿論ナリト雖此ハ是其自家用料酒製造ノ官許ヲ經而シテ此ノ所爲アルモノ
ヲ罰スルノ法條ニシテ本按多田ソヂ「方酒造稅則附則違犯ノ所爲ノ如キハ無免許ヲ以テ自家用料酒ヲ製造販賣シ
タルモノナレハ其無免許製造ノ所爲ヲ處罰シタル以上ハ其之ヲ販賣シタルノ處爲ハ之ヲ罰スルヲ要セザルナリ何
ントナレハ元來稅則ニ違反シ無免許ニ自家用料酒ヲ製造スルモノニ在テハ固ヨリ犯則ノ所爲ナルヲ以テ其所爲中
ニ於テ免許者力遵守スヘキ規則ニ及スルモノ々々之ヲ處罰スヘキノ限ニアラサレハナリ以上ノ如クナルヲ以テ原裁
判所カ被告ニ對シ無免許ノ所爲ヲ罰シ其販賣代金ヲ追徴シ殘酒ヲ沒收スルノ旨渡ヲ爲シ其販賣ニ對スルノ罰ヲ科
セサリシハ相當ノ裁判ニシテ擬律ノ錯誤ニ之アラサルモノトス
明治二十年五月九日

四四九 明治二十年乙第四百二十六號

長崎縣平民 小島銀太郎

酒造稅則第二十二條ヲ按スルニ他ノ依託ヲ受ケテ酒類ヲ代造シ又ハ酒造營業人ニ非ル者ニ酢及ヒ酒類ヲ製造スル
爲メ酒造場ヲ貸スル許サストアリテ該條ハ酒造營業者ヲ制裁スルノ法章ニシテ常人ニ及ボス可キ者ニ非サルナリ
而シテ原裁判旨渡書ヲ覽スルニ被告等名面ノ肩書ニハ農業者ト記シ其文中被告宮本治一郎ハ無職ト記シテ云々被告銀
太郎ノ家宅ヲ借受ケ云々又被告近藤平助カ掛持チ小屋ヲ借受ケ云々被告小島銀太郎近藤平助ハ被告宮本治一郎ハ
其密造ノ場所ヲ貸與シタルモノナリトノ事實ヲ認メ而シテ酒造稅則第二十二條ノ違犯者トナシ今第三十六條ニ照シ
處罰シタルハ法律ノ適用ヲ誤リタルモノナリ何トナレハ被告兩名ハ酒造營業者ニ非スシテ他人ノ依託ヲ受ケ已レ
カ家宅又ハ小屋等ヲ貸與シタルモノナレハ前第二十二條ノ支配ニ屬ス可キモノニ非サレハナリ因テ本院檢事長非
常上告諭旨ノ如ク法律ニ於テ罰セザル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタルモノナルニ依リ治罪法第四百三十五條ノ規則ニ
從ヒ原裁判旨渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判スルヲ左ノ如シ

小島銀太郎

外一名

原裁判所カ認メタル事實ニ依ルニ被告カ所爲ハ法律上罪トナラサルヲ以テ治罪法第三百五十八條同第二百二十四
條ニ依リ無罪ヲ言渡ス者ナリ

明治二十年五月五日

四五〇 明治二十年乙第四百九十九號

鳥取縣平民 中道源藏

被告上告諭旨ハ酒造ニシテ酢ニアラス度シトスルモ酒造稅則ノ制裁ヲ受クヘキモノニ非サルヲ罰シタル
ハ不法ナリト云フニ外ナラス然レモ酒造稅則ニ於テ酒類ト稱スルハ今則第二條ニ清酒濁酒其他釀造シタルモノヲ
云フトアリテ酒類ハ固有ノ性質ノモノニ非スシテ釀成シテ始メテ既トナルモノナレハ釀造酒類中ノ一種ナルヲ以

シノ部

テ酒造税則ノ制裁ヲ受クヘキモノナルトハ言フ候タスシテ明カナリトス其他該酒ノ酒既ナルト否トノ點ハ至ク事實
實上ノ一ニシテ其事實ノ判定ヲ爲スハ原則官カ治罪法第四百十六條ノ規定ニ依リ特有スル職權ナルヲ以テ原則官
カ之ヲ酒既ナリト認メタル事實ハ他ヨリ非難シ左右シ得ヘキ限リニ非ラサレハ之ヲ然ラヌトスルノ斷言ハ上告ノ
理由トスルニ足ラサルモノトス因テ被告上告旨趣ハ相立タス

明治二十年五月二十六日

四五二 明治二十年乙第五百七十七號

福岡縣平民 大石勘八

被告上告論旨ハ酒造税則第一條第二條ハ釀ヲ以テ蒸溜シタルモノヲ云ヒ上告人ノ如ク肥ニスヘキ酒搾糖ヨリ蒸溜
シタル自家ノ飲料ニ供シタル燒酎ニ對シ施行スヘキモノニアラス段シ稅則違犯トスルモ附則第五條第八條ニ據テ
處分スヘキモノナリト云ニ外ナラス然レモ原告交ヲ查スルニ(被告)人ハ免許證札ヲ受ケスシテ自宅ニ於テ明治十
九年四月中ニハ燒酎三斗四升六合五勺ヲ蒸溜シ代價六圓九十三錢ヲ以テ賣却シ尙又明治二十年四月中ニハ燒酎壹
斗六升六合ヲ蒸溜シ其内三升ヲ代價五十四錢ヲ以テ賣却シ酒造税則第一條ニ違犯シタルモノト認定ス(トアリテ
之レニ稅則第二十九條ヲ適用シ處分シタルニアリ而シテ全則第二條ニ蒸溜酒燒酎酒精再溜酒ノ釀酒ヨリ蒸溜シタル
ト酒搾ヨリ蒸溜シタルトヲ問ハス苟モ蒸溜シテ一ノ酒類ト爲シタルモノハ酒テ包容スルヤ言フ俟サルノミナラ
ズ原則官ニ於テ被告ノ所爲ハ自家用料ニ非ラズシテ糖ヨリ販賣ノ意ヲ以テ蒸溜シ賣却キタルモノト認メタルニア
レハ即チ酒造税則第一條ノ違犯ナリトシタルモノニシテ彼ノ自家用料ノ爲メ製造シタル酒類ヲ販賣セシモノニ非
ラサレハ從テ酒造税則附則ノ問ヘキモノニ非サルヲ以テ被告ヲ本則第二十九條全條第三條ニ照シ處罰シタルハ相當
ノ裁判ニシテ破毀スヘキ理由之レナキモノトス

明治二十年六月二十日

四五二 明治二十年乙第七百六十五號

熊本縣士族 荒木繁胤

外一名

酒造免許證札ヲ願受ケタル者ト之ヲ願受ケサル者ト合併シテ營業スル者ハ酒造税則第三十條同第二十九條ノ支配
スル處ニアラスト雖其酒造免許證札ヲ願受ケタル者モ酒造營業上ノ損益ニ關スルコトナク他ノ者其證札ニ依リ酒
造營業ヲ爲シタル時ハ其第三十條第二十九條ノ制裁ヲ免カレサルヤ勿論ナレハ合併營業ナルヤ又ハ證札ノ貸借ナ
ルヤヲ判定センニハ免許證札ヲ受ケタル者ニ於テ其營業上ノ損害利益ニ關係アルヤ否ヲ明示セサル可ラス是レ治
罪法第三百四條ニ規定アル事實理由ノ明示ナリトス本案原告交ヲ閱スルニ酒造免許證札ヲ云々重雄ヲシテ之ヲ買
取シ以テ管轄廳ニ出願シ其管轄廳ハシメタル上云々酒造ニ要スル所ノ諸入費及ヒ原料等總テ管轄廳ヨリ提出シ重
雄ヲシテ其管轄廳ヲ以テ酒造營業ニ從事セシメタルアルノミニシテ重雄ハ管轄廳ト損益ヲ共ニスル者ナルヤ否ノ事
實ヲ記セス又原告交後段ニ重雄ハ單ニ勢力ヲ出シ組合營業ヲ營ミタルニ過キストアルモ其單ニ勢力ヲ出シタルト
云フ文字ノミヲ以テ組合營業ト云フヲ得サレハ要スルニ原告判ハ事實理由ノ不備ニシテ據律ノ當否ヲ察査スルニ
由ナキモノナリ

明治二十年十月十三日

四五三 明治二十年乙第六百九十號

東京府平民 小山新七

酒造税則第二十六條ヲ按スルニ其本文ニハ免許ヲ受タル者ハ其管轄廳(該一期酒見込)ノ種目石數並其造リ方法
共届出可シ其但書ニハ種目種數並見込石數ノ増減等ハ其時々届出可シトアリ蓋シ該條ノ注意ハ酒造檢査上必要ナ
リト認メタル條項ヲ掲ケ之ヲ管轄廳ニ届出可キヲ規定シタルニアルヤ明カナリ故ニ本文ニ於テ届出タル事項ニ變
更アレハ其時々届出ヲ爲サ、ル可カラサルハ但書ノ精神タルヘシ然レハ該但書ノ文中造リ方法變換届出ノ明文ナ

シノ部

キモ其種目變換並見込石數ノ増減等トアル等ノ字ニ包含シアルトハ勿論ナリトス然ルニ原裁判所ハ其造リ方法ヲ
變換シタルノ事實ヲ明認シナカラ法律上罰スヘキ正條ナシトシテ無罪ノ旨擬テ爲シタルハ原檢察官上告論旨ノ如
ク擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナリトス右ノ理由ナルニ依リ治罪法第四百二十九條ノ規定ニ依リ原裁判ヲ破毀シ本
院ニ於テ直ニ裁判スルヲ左ノ如シ

小山新七

原裁判所カ認メタル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照スニ被告カ所爲ハ明治十三年第四十號公布酒造稅則第二十六條但書
ニ違反セル者ナルヲ以テ同則第三十五條ニ依リ罰圓已上貳拾圓已下ノ罰金範圍内ニ於テ被告小山新七ヲ罰金貳圓
ニ處スル者ナリ

明治二十年八月四日

四五四 明治二十年乙第六百九十六號

愛知縣平民 山田徳三郎

本案上告ノ訴旨ハ被告カ父又左衛門ハ別籍ノ一戸主ナレハ同人ノ所爲ニ依リ被告於テ酒造稅則第三十八條ノ制裁
ヲ受ク可キモノニ非ラズト嘆々スルニアレモ同條ノ精神ハ酒造營業上ニ關スル犯則ノ所爲ハ本人自カラ犯ス
ニ非サルモ其利害ノ及フ處營業者其人ニ在ルヲ以テ家族又ハ雇人ノ所爲ニ係ルモ其責ヲ營業者ニ歸セシメタルニ
在ルヤ明カナリ故ニ戸籍上家族雇人ノ稱ナキモ現ニ其家ニ同居シ現ニ其業務ヲ擔任シ其實家族若クハ雇人ト同視
ス可キ者ニ於テ其營業上ニ關シ犯則ノ所爲アルトハ該條ノ制裁ニ依リ營業者其責ニ任ス可キ當然ナリトス而シテ
被告ノ父又左衛門ハ現ニ被告ノ家ニ同居シ現ニ酒造營業ノ一ヲモ負擔シ居リタリトハ原裁判所認ムル處ナレハ此
判定ニ對シテハ他ヨリ容喙シ得可カラサルモノトス因テ原裁判官カ其認メタルニ依リ酒造稅則第三十八條ヲ適用
シ其實被告ニ在リト判定シタルハ相當ニシテ被告カ上告論旨ハ却テ其當ヲ得サルヲ以テ不相立モノトス右ノ理由
ナルニ依リ本案上告ハ治罪法第四百二十七條ニ照シ之ヲ棄却スル者ナリ

明治二十年八月六日

四五五 明治二十年乙第七百二號

長野縣平民 野知里文助

酒造稅則附則ニ照シ過量酒ヲ沒收スルノ場合ニ於テハ若其釀造數次ニ非リ最終ノ釀造ノミ定限石ニ超過シタル時
ノ如キハ其酒類ヲ沒收スルニ止リ定限石數ニ沒收ヲ及ボサルハ上告論旨ノ如シト雖モ今原判文ヲ閱スルニ本案
ノ如キ其釀造數次ニ非リタルノ跡ヲ視ルナク臨時檢査ノ際一石七升八合ノ釀造酒ヲ發見シタルノ事實ナリトス素
ヨリ酒類ノ如キハ一種ノ流動物ニシテ已ニ混交シタル上ハ又分離スヘカラサル性質ノ者タレハ其酒類中何レヲ犯
則酒何レヲ正當ノ免許酒類ノ石數ナルヲ判別ス可カラサルハ犯則酒ヲ混交シタル酒類ハ總テ犯則酒トシ沒收ス
ヘキ者トス故ニ原裁判所於テ釀造酒ノ惣石數ヲ沒收シタルハ適法ノ裁判ニシテ上告其理由ナキ者トス因テ治罪法
第四百二十七條ニ則リ本案上告ハ之ヲ棄却スル者ナリ

明治二十年八月八日

四五六 明治二十年乙第八百二十三號

千葉縣平民 松川徳太郎

釀造ノ取捨事實ノ認定ハ法律上原裁判官ノ特有スル職權ナルヲ以テ其職權内ノ處分ニ容喙スル如キハ以テ上告ノ原
由ト爲スヲ得ズ本案被告カ上告第二論旨ハ原裁判官カ燒酎ナリト認定ニ對シ洗水ニ過キサルモノナリト其認定ノ
事實ニ不服ヲ訴フルニ過キサルハ此論旨ハ上告適法ノ原由アルモノトシ採用スルヲ得ズ而シテ其第一論旨タル酒造
用器械云々ハ凡ソ酒造稅則第二十條第一項ニ據レハ該器械ハ檢査ヲ受ケルニ非ルヨリハ使用スルヲ許サハ勿論
ナレハ既ニ檢査済ノ器械ナリトモ其受ケタル檢査ノ効力ヲ消滅セシメタル場合ニ在テハ檢査未済ノ器械ト異ナラ
サルヲ以テ使用以前更ニ檢査ヲ受ケサルヘカラス然リト雖モ該第二十條第一項ハ單ニ檢査ヲ受ケ使用スヘシト命

シノ部

シタルニ止リ其検査ノ効力存減ニ關セズ修繕毎ニ申出検査ヲ受クヘシト命示シタルニアラサレハ管ニ修繕ヲ加ヘ之ヲ届出サリシト云フノミヲ以テ該條項ニ違フモノナリト云フヲ得ス必ラスヤ其輪替ノ爲メ検査ノ効力ヲ消滅セシムルノ事實即チ容置ニ付置ヲ來シタルヤ否ヤ若クハ検査ノ肥號等ヲ消除シタルヤ否ヤ之ヲ審理シ判文ニ明示セサルヘカラス然ルニ原判文ハ此必要ナル明示ヲ欠キタルヲ以テ從テ擬律ノ當否ヲ審査スル能ハス所謂事實理由ノ不備ナル失當ノ裁判ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ本案上告第二論旨ハ治罪法第四百二十七條ニ照シ之ヲ棄却シ而シテ其第一論旨ハ治罪法第四百十條第九ノ原由アルモノトシ治罪法第四百二十八條ニ照シ此點ニ關スル原裁判ノ全部ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ受ケシムル爲メ東京控訴裁判所ニ移スモノナリ

明治二十年十一月二十六日

四五七 明治二十年乙第百二十七號

廣島縣平民 中野善太郎

凡ソ酒類ヲ製造センニハ管轄廳ヘ願出免許證ヲ受ケタル後ニ爲サレハカラサルハ該稅則ノ規定スル處タリ而シテ本案被告カ所爲ハ假令七月二日ヲ以テ該稅則ヲ受ケタルニモセヨ其酒類ヲ製造シタルハ六月廿一日ニシテ該稅則下附以前ニアレハ無該稅則ノ酒造ナルヲ以テ稅則ノ制裁ヲ免ルヘ能ハサルヤ勿論ナリトス故ニ原判官於テ其所爲ヲ認メ稅則附則第一條ニ違犯シタルモノトシ同則第十條ニ照シ處斷シタルハ最モ相當ノ裁判ニシテ敢テ擬律ノ錯誤ト云フヲ得ス以上ノ理由ナルニ依リ被告カ上告ノ趣旨ハ治罪法第四百十條各項ニ規定シタル上告ノ原由アラサルモノト判定シ治罪法第四百二十七條ニ照シ之ヲ棄却スルモノナリ

明治二十年十一月十七日

四五八 明治廿一年乙第百六十一號

酒造營業者ノ雇人等ニシテ酒造稅則ノ規定ニ違背シ其雇人等カ所爲ノ責ヲ其營業主ニ於テ負フヘキ所以ノモノハ營業主ノ營業上ニ關シ違背シタル場合ニ限ルモノトス何トナルニ酒造稅則第三十八條ニ其營業ニ係リトアルノミナラス假令其雇人等ノ所爲ニ係ルモノニモセヨ營業主ノ營業上ニ關係ナク雇人等己レノ利得トナスヘキカ爲メニナレタルモノニシテ營業主ノ利得トナラサルマテ其責ヲ負フヘキノ道理アラサルヤ勿論ナレハナリ今原裁判官渡邊ニ就キ其認メタル事實ニ依レハ前掲ノ如ク被告カ雇人石田爲次郎野村小一郎等ニ於テナシタル所爲ハ全ク同人等一己特立ノモノニ係リ嗜モ營業主ノ利得トナルヘキモノニアラス全ク同人等ノ利得トナサン爲メ被告ノ營業外ニナシタル所爲ナルヤ明瞭ナリトス果テ然ラハ其認メタル事實ニ對シ右第三十八條ニ從ヒ被告ニ於テ其責ヲ負フヘキモノニアラストナシ無罪ヲ言渡シタルハ相當ノ擬律ニシテ錯誤ナリト云フヲ得サルモノトス

明治二十一年三月廿六日決

四五九 明治二十一年乙第百六十九號

島根縣平民 金山善次郎

酒造稅則第一條ニ所謂酒造場トハ倉庫等ノ棟敷ニ依テ區別ヲナスヘキモノニアラス都テ其一區域ヲ以テ一ヶ所トナスモノナルヤ明治十七年大藏省第六十四號達ニ依リ明瞭ナリ故ニ其一區域内ナル以上ハ假令其場所タルヤ平素酒類等ヲ入レ置ク處ニアラサルニモセヨ酒造場外ナリト云フヲ得サルニ付酒造營業人ニシテ酒造場外ニ於テ酒類ヲ醸造シタルノ事實アリト認定スルニハ宜ク其醸造シタル場所タルヤ曾テ届ケアル一區域内ニアラサルヤ否ナキ事實ノ理由ハ必ズ明示ナサレハカラズ今原裁判官渡邊ヲ問スルニ(前)酒造場外即チ免許ヲ受ケサル居宅天井ニ於テ云々酒類ヲ醸造シ云々トアレハ其居宅トハ被告カ於テ酒造稅則第二十七條ニ基キ曾テ届ケアル一區域即チ酒造倉庫等ノ建築シアル土地外ニ在ルモノナルヲ以テ酒造場外ナリト認メタルニ在ルカ若シ其居宅ハ届ケアラサルモ届ケアル一區域内ナル以上ハ酒造場外ナリト云フヲ得ス今試ニ原裁判官カ採資シタル證據ヲ査閱スルニ被

シノ部

告方酒類ヲ製造シタル居室天井ハ曾テ届ケアル一區域内ナルヲ以テ無免許製造ヲ以テ論スヘキモノニアラスシテ
隠蔽ノ所爲ニ止ルモノ、如シト雖モ以上ノ如ク本案犯罪組成上最要件ナル事實ノ理由明示シテラサルヲ以テ擬律
ノ當否ヲ確查スルニ由ナク即チ上告諭旨ノ如ク被毀ノ原由アルモノトス
明治二十一年三月廿九日決

四六〇 明治二十一年乙第百三十三號

兵庫縣平民 山本源兵衛

本案上告諭旨ノ當否ハ本案ノ罪タル被告源兵衛ノ負フヘキモノナル際將タ其後見人タル山本源治ノ負フヘキモノ
ナル際之ヲ判別スルヲ際要トス酒造稅則第三十八條ニ規定スルカ如ク其酒造營業上ニ付キ犯罪アルノ場合ニ在テ
ハ假令其犯罪タル營業者ノ家族又ハ雇人ノ所爲ニシテ營業者自ラナシタルニアラス又其家族雇人ノ所爲ニシテ營
業者其犯罪ノ情ヲ知ラサルニモセヨ營業者其責任ニ任スヘキヲ以テ原則トナスト雖モ其營業者幼年ナルカ爲メニ後
見人等ヲ設ケアル場合ニ在テハ假令幼年者營業主タルノ名義ニモセヨ之ヲ聞スルコトヲ得サルモノトス其所以ハ幼
年者營業主タルノ名義ニモセヨ營業者トハ即チ名ノミニシテ其實際ハ後見人カ本人ニ代リ營業上其他百般ノ事ヲ
本人ト同ク管理スルモノナレハ營業上ノ犯罪タル即チ後見人ノ其責任ヲ負フヘキモノナルヲ以テ後見人其責任ニ任
スヘキ固ヨリ當然ナレハナリ故ニ原裁判官ハ被告源兵衛ニ於テ幼年者ナルカ故ニ山本源治ヲ後見人トナシ酒造營業
上ノコトヲ取扱ハシメ居タルノ事實ヲ認テ以テ被告人ハ後見人源治ノ責任ヲ得フヘキノ理由ナシトシ無罪ト言渡シ
タルハ相當ニシテ決テ不法ト云フヲ得サルモノトス
明治二十一年三月十七日決

四六一 明治二十一年乙第百八十二號

岐阜縣平民 岩砂善平治

酒造稅則附則第六條ヲ按スルニ自家用酒類ハ其住居セル一家ノ外ニ於テ云々トアリテ本則第一條ノ如ク酒造
場一ヶ所毎ニ免許ヲ受ケサルヘカラサルノ規定ニアラスシテ其住居外ニ於テ製造スルヲ禁シタルノ律章ナリ今原
裁判官於テ該般ノ證據徵憑ニ心証ヲ資リ本案被告ハ兼テ自家用酒類ヲ受ケルニ際シ羽栗郡下印食村八番
地ニテ釀造ヲ受ケ明治二十年十二月同村九番地即チ現住所ニ於テ濁酒二斗五升ヲ製造シタルモノト認メアリ此
事實ニ於テハ該附則第六條ノ違反者ナリト云フヲ得ス故ニ原裁判官ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ適當ニシテ之
ヲ不當ト云フヲ得サレハ上告旨趣ハ適當ノ原由之レナキモノト判定ス
明治二十一年二月廿七日決

四六二 明治二十一年乙第百五十號

茨城縣平民 小谷野三左衛門

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ式ヲ履行シタルニ立會檢事川目亨一カ意見且附帶上告セル要旨ハ原檢察官
諭旨ノ如ク第三號仕込樽ノ幾分ハ第四號樽ト共ニ消酒ニ控リ上ケ檢査ヲ經テ稅額ヲ算定スヘキモノナレハ隱蔽セ
ントスルモ能ハサルナリ然レモ稅則ニ所謂檢査トハ必スシモ消酒ニ控上ケ稅額ヲ算定スル爲メノ檢査ノミヲ指シ
タルニアラス隱蔽檢査ノ如キモ亦包含シタルモノト爲サレハカラス況ヤ稅則第二十三條第二項檢査ノ文字ニ其區
別ヲ設ケサルコトヤ故ニ被告ノ所爲ハ同條ノ犯罪ニシテ原檢察官論スル如ク同則第二十六條ノ違反ニ止ルモノニ
アラスト思料スト云フニ在リ因テ審按スルニ酒造稅則中酒類ヲ隱蔽スルニニ手段アリテ單ニ酒造酒類ヲ人目ノ觸
レサル場所ニ隱蔽シ則稅官吏ノ檢査ヲ免レシ之ヲ販賣消藏セント欲スルモノト又其酒造酒類ノ檢査既濟トナ
リタル部分ニ未濟ノ酒類ヲ混和シ即チ混和ニ依リ隱蔽トナリタル酒類ヲ販賣消藏セント欲スルモノ是レナリ而テ
此等ノ手段ハ共ニ違稅ヲ圖リ利益ヲ獲得スルノ目的ニ外ナラスト雖モ其手段ニ各多少ノ差異アルヲ以テ稅則上其
制裁ヲ異ニスルモノナルノミナラス明治十七年大藏省第六十四號達酒造稅則心得書第二十八項ニ徵スルニ檢査官
ハ酒造中何酒類ヲ問ハス檢査スルヲ得ルモノナルハ勿論稅則中醇ノ檢査ハ假リノ處分ニシテ所謂檢査ノ文字ニ隱

ノ檢査ハ含蓋セズトノ區別ナキ限リハ本署被告カ第三號桶へ膠仕込ノ際水ヲ過分ニ汲込置キ該膠ノ内四斗ヲ檢査
 既濟酒ノ桶中ニ混和隠蔽セシ所爲ハ稅則第二十三條第二項ノ違犯トナシ同第三十六條ニ依リ處斷スヘキモノニテ
 同第三十二條ヲ適用スヘキニアラス故ニ此場合ニ在テ造酒届石數ニ過分ノ増水ヲ爲シ置クカ如キハ畢竟スルニ酒
 類ヲ隠蔽セル手段中ニ包含スヘキ所爲トナシ論斷スヘクシテ稅則第二十六條ノ如キ不正ノ行爲ナキ營業者カ單ニ
 該條届出ヲ怠リタルニ過キサル場合ニ適用スルヲ得ス然ラハ被告カ事實ノ所爲ニ對シテハ稅則第二十三條第二項
 第三十六條ニ依リ一罪トナシ處斷スヘクシテ同第二十六條第三十二條ヲ適用シ二罪トナシ科罰スヘカラサルハ勿
 論ナリ然リト雖モ原判文上第三號桶へ膠仕込ノ際水ヲ過分ニ汲込置キ其膠ノ内四斗ヲ檢査濟ナル第四號桶ノ膠ニ
 混和云々トノミアリテ檢査未濟ノ酒類ヲ既濟ノ酒類ニ混和シタル時ハ其總石數ヲ沒收スヘキモノナルニ其混和ニ
 係ル酒類石數ノ幾干ナルカヲ明示アラサルヲ以テ直ニ擬律ノ錯誤ヲ更正スルニ由ナキモノトス要スルニ本院檢
 事附帶上告末項論旨ハ其理由アルモ前說明ノ如ク原裁判ハ事實理由ノ不備ニ係リ即チ治罪法第三百四條ニ違背シ
 未タ擬律ノ當否ヲ確查スルニ由ナキモノトス

明治二十一年三月三十一日決

四六三 明治二十一年乙第六十八號

長野縣平民 川野鶴太郎
 酒造稅則改正附則第十條ヲ案スルニ同條後段ニ仍ホ其製造酒類及ヒ容器ヲ沒收ストアルノ精神ハ犯則酒類ハ勿論
 現ニ該酒類ノ容シアル器具ヲ沒收スト云フニアリテ製造器械又ハ轉輸容器トナシタル者マテ云フニ非サルナリ
 今ヤ原判文ヲ閱スルニ被告ハ明治十九年度免許證ヲ受ケ製造セシ自家用料ノ酒類ヲ檢査ヲ受ケタル後ニ於テ私
 カニ酒類ニ製シタルトノ事實ヲ認メ酒造稅則改正附則第三條同第十條ヲ適用罰金ニ處シ現在セル酒類及ヒ其製造
 又ハ容器ニ用ヒタル桶樽ハ共ニ沒收ストアリテ原裁判官ハ製造ニ使用セシ桶及ヒ膠見ノ際現ニ酒類ノ容シアリク
 ル樽ノ二個ニ對シ沒收ヲ言渡シタル者ニシテ上告論旨ニ所謂釜瓶ノ二個ハ前第十條末項ニ所謂容器ト認メタルニ

非サルヤ明カナリ然リ而テ前說明ノ如ク一旦原署ト爲シタル器具ト雖モ現ニ酒類ノ容シタル者ハ沒收スヘキノ
 限リニ非ラス又該物件ハ押收シタル者ニモ非サレハ之ニ對シ判決ヲ與フルノ必要ナキニ依リ其之ヲ爲サ、ルハ
 相當ニシテ斷テ受ケタル事件ニ對シ判決ヲナサ、ルモノト云フヲ得ス因テ原檢察官上告論旨ハ不相立モノト判定
 ス然リト雖モ原裁判官カ其製造ニ用ヒタル桶一個ヲ沒收シタルハ擬律ノ錯誤タルヲ免レサルヲ以テ治
 罪法第四百三十一條ニ依リ原裁判中製造用ノ桶一個ヲ沒收シタル一部分ヲ破毀シ治罪法第三百八條ニ依リ該桶一
 個ハ被告人ニ還付スル者也

明治二十一年二月廿五日

四六四 明治二十一年乙第二百十七號

山口縣平民 阿川作平
 酒造稅則第三十八條同附則改正第十二條ノ法意タルヤ一ノ免許營業者又ハ自家用料酒免許製造者ノ家族雇人ニシ
 テ其免許ヲ得タル營業上又ハ免許ヲ得タル自家用料酒製造上ニ付テ犯則ノ所爲アル場合ニ於テハ其營業者又ハ自
 家用料酒免許製造者ニ於テ假令其事實ヲ知ラサルニモセヨ其本主タル免許者ヲ罰スルトノ精神ニアルコト該第三十
 八條ニ云々營業者即チ免許者ヲ處罰ストアツテ明白ナリ故ニ此理ヨリ推及スルハ假令免許ヲ得サルモノ、家族
 雇人ノ所爲ニ於ケルモ其製造タルヤ一家ノ爲メニ爲シタルニ於テハ家主其利害ヲ受クヘキ當然ナレハ之ヲ命スル
 ト否トニ拘ハラス其實恰モ免許者ト同ク家主ノ免ル能ハサルヲ以テ之ヲ製造シタル家族等ハ其實ヲ負フヘキモノ
 ニアラストス上告ニ依リ原裁判官カ認メタル事實及ヒ試ミニ一件書類ヲ閱スルニ被告人ノ母某カ被告ノ不在中無
 免許ニテ自家用料ノ酒類三升五合ヲ製造シタルモノニシテ其製造タル被告ノ不知セサルニモセヨ一家ノ爲メナル
 一判然タリ然レハ則チ其責被告ノ負ハサルヲ得サルヤ前辨明ノ如クナルニ原裁判茲ニ出テス無罪ヲ言渡シタルハ
 上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス

明治二十一年四月廿一日

四六五 明治二十年乙第百二十四號

島根縣平民 藤間藤三郎

酒造稅則第二十條第一項ノ違犯者ニ同則第三十五條ヲ適用處罰スルハ酒造營業者ニシテ原第二十二條第一項ニ違犯シタル時ノミニ限ルモノトス故ニ本條ノ如キ隱蔽ノ用ニ供スル爲メ第二十條第一項ノ手續ヲ盡サス器械ヲ使用シタル者ハ其所爲隱蔽罪ニ包含シ別ニ第三十五條ノ罪ヲ成立セサルモノトス然ルヲ原裁判所於テ被告第二ノ所爲ニ對シ第三十五條ヲ適用處罰シタルハ附帶上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十項ニ定ムル上告ノ理由アルモノトス

明治二十年三月十二日

四六六 明治十八年第二千四百五十五號

廣島縣平民 高沖基平

酒造稅則附則第一條ニ曰ク自家用料ノ酒類中ヲ製造スル者ハ管廳へ届出製造免許證札ヲ受ケ釀札料金八十錢ヲ納ムヘシ今上告ニ因リ原判文ヲ查閱スルニ原裁判官ハ免許證札ヲ受ケサル事實ヲ認メナカラ其中段ニ至リ(其届出ヲ爲シ釀札料ヲモ納メ置タル上ノ釀造ニ係ルハ免許證札ノ下付ハ官廳ノ便宜ニシテ營業製造者ト違ヒ本製造者カ釀札ノ費ニ任スヘキノ限ニアラス)トノ理由ヲ付シ無罪ヲ言渡シタルハ上告論旨ノ如ク破毀ノ理由アルモノトス何トナレハ凡ソ酒類ヲ製造スル者ハ營業者ト否トヲ問ハス皆ナ免許證札ヲ受ケルニ非サレハ釀造スルコトヲ得サルハ勿論ニシテ本案製造者ノ如キモ前掲第一條ノ注文ニ從ヒ免許證札ヲ受ケサル内ハ縱令届出ヲ爲シ及ヒ釀札料ヲモ納付セントテ之ヲ以テ酒造免許ヲ得タル者ト云フヲ得サレハナリ因テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判官渡ヲ破毀シ本院ニ於テ重ニ裁判ヲ爲ス左ノ如シ

高沖基平

原裁判所カ認ムル事實ニ據リ之ヲ法律ニ照スニ被告カ所爲ハ酒造稅則附則第一條ニ違背スル者ナルヲ以テ同則第八條ニ依リ三圓以上三十圓以下ノ範圍ニ於テ罰金三圓ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル酒酒二斗二升外五品ヲ沒收シ上納證免許證札下付願ハ治罪法第三百八條ニ依リ被告高沖基平ニ還付スルコトヲ言渡ス者也

明治十九年五月廿九日

四六七 明治十八年第一千百十六號

靜岡縣平民 土井彌源治

刑法第五條ニ此ノ刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此ノ刑法ノ總則ニ從フトアリ茲ヲ以テ本案酒造稅則ノ如キハ總則ヲ掲ケアルヤ否之ヲ審問シ果シテ總則ヲ掲ケサル場合ニアラサレハ刑法ノ總則ヲ適用スルヲ得サルヤ勿論ナリトス則チ酒造稅則ニ依ルニ其第三十八條ニ酒造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰スト刑法ノ總則ニアラサル特例ヲ掲ケリ是レ則酒造稅則ハ別ニ總則アルノ明徴ナリ而シテ其第三十八條ノ明文ニ徴シ之ヲ推セハ酒造ノ犯則者ニ器具ヲ供給等々ハ貸與スルモ稅ヲ免ガレントスル其人即チ營業者ヲ處罰スルニ止リ其ノ器具ヲ給與スル者ヲモ處罰スル主旨ナル規則ニアラサルヲ知リ得ヘキモノナルニ原裁判官茲ニ出テ被告ヲ從犯トシテ處罰シタルハ擬律ヲ誤リタルモノナルコト本院檢事附帶上告ノ如クニシテ該附帶上告ハ治罪法第四百十條第十項ニ適當スル論旨ナリトス故ニ上告ノ旨趣ニハ辨明ヲ與フルヲ要セス治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判中被告土井彌源治ニ對スル擬律ヲ破毀シ重ニ判決スルコトヲ左ノ如シ

土井彌源治

右ノ理由ナルヲ以テ原裁判所カ認定シタル被告彌源治ノ所爲ハ規則上罪トナラサルモノトス因テ治罪法第三百五十八條ニ照シ無罪ヲ言渡ス者也

明治十九年六月廿五日

シノ部

タルハ即ち此特許法ヲ犯スノ結果ナレハ之ヲ警務營業規則ノ酒造稅則附則トニ背キタルノ二罪ナリトシ罰スヘキ
モノニ非ス殊ニ自家用料酒ヲ製造スルノ權札ヲ受ケサルモノトシ賣買スルカ如キハ其權札ヲ受ケ得ルノ資格ヲ有
シナカラ受ケスシテ製造シタル故ヲ以テ問フヘキ者ナルモ本案被告ノ身分ヲ有シ右第十二
條ノ法律アツテ其營業場内ニテ製造スルヲ得ザレハ爲メニ酒造稅則附則第四條アツテ他ニ造ルヘキノ路ナキヲ
以テ從テ自家用料酒ヲ製造スルノ權札ヲ得ントスルモ到底得ル能ハサル身分ナレハ其身分上ヨリ推究スルモ賣買
シ得ヘカラサルニ於テキヤ然ルニ原裁判官ハ之ヲ二罪ト爲シ處斷シタルハ擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ
破毀ノ原由アルモノト裁定ス因テ上告論旨ニ對シテハ別ニ說明ヲ要セス

鈴木巳三郎

原裁判官カ認定シタル事實ニ依レハ免許權札ヲ受ケス自家用料酒ヲ警務營業場内ニテ製造シタルノ所爲アルヤ明
ナルヲ以テ之ヲ法律ニ照スニ

警務營業規則第十二條ニ警務營業場ノ中ニ於テハ云々酒類ヲ製造スルヲ許サス

同第十三條ニ第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓已上五十圓已下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス云
々トアルニ該ル

因テ被告巳三郎ヲ罰金七圓ニ處シ尙ホ現在ノ酒造石四斗六升貳合及ヒ遺桶貳個ヲ沒收シ被告ノ所有ニ非サル
壹個ハ治罪法第三百八條ニ依リ還付スルモノ也

明治十九年八月十四日

四七〇 明治十九年第一千二百九十四號

鹿兒島縣平民 黒木長左衛門

原裁判官渡邊ニ就キ被告カ第三ノ所爲ニ對シ言渡シタル事實ニ依レハ被告カ免許權札ヲ受ケス販賣ノ目的ヲ以テ

自ラ製造シタル燒酎六升五合ト他ヨリ買入レタル五升ノ燒酎トヲ混和シ合セテ賣升五合ノ内四升五合ヲ賣升
ノ代價拾四錢ノ割ヲ以テ需用者ニ賣渡シタルニ在ルヤ現在セル七升ヲ右合計ノ賣升五合ヨリ控除シテ剩餘ク
リ然ルニ原裁判官ハ其事實ヲ認メナカラ法律適用ニ至リ六升五合ノ造石稅三倍ノ料金ニ處シタルハ上告論旨前
段ノ如ク擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナリトス然リト雖モ被告ハ其後段ニ於テ販賣シタル酒類ノ内ニ買入酒モアツ
テ個ハ犯罪ニ係ラサルモノナレハ其部分ヲ控除スヘキモノナルカ如ク論疏スルモ其販賣シタル燒酎中何レノ部分
カ他ヨリ買入レタルモノニシテ何レノ部分カ犯罪ニ係リタルヤ之ヲ知リ得ヘカラサレハ分拆スヘキモノニ非ス如
何トナレハ計算上之ヲ分拆シ得ルニモセヨ其物質上其犯罪ニ係ルト買入レタル燒酎トヲ分拆シ得ヘカラサレハナ
リ故ニ原裁判官カ之ヲ分拆セザリシハ相當ニシテ不當ナリト云フヲ得サレハ此論旨相立タサルモノト裁定ス
以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ依リ原裁判中被告カ第三ノ所爲ニ對シ言渡シタル部分ヲ破毀シ
本院於テ直ニ裁判スルノ如シ

黒木長左衛門

原裁判官カ認定シタル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照スニ

被告カ販賣ノ目的ヲ以テ燒酎六升五合ヲ製造シ之ヲ買入レタル燒酎五升ニ混和シ内四升五合ヲ賣升ノ代價十四錢
ヲ以テ需用者ニ賣渡シタル所爲ハ刑法第五條ニ基キ酒造稅則第三十九條同第三十七條ニ依リ免許稅額三
拾圓ノ二倍罰金六拾圓ニ處シ現在ノ燒酎七升及其器械瓶罎樽樽各壹個ハ之ヲ沒收シ賣買キタル燒酎四升五合ノ造
石稅拾四錢五厘ノ三倍六十七錢五厘ノ料金ニ處シ其賣買代價六十三錢ヲ追徴スルモノ也

明治十九年十一月廿五日

四七一 明治十九年乙第八十七號

右市九郎カ被告事件ニ付明治十九年四月廿八日松江縣裁判所濱田支廳ニ於テ審理ノ末酒造稅則違犯ノ事實アリ

島根縣平民 山中市九郎

ト器ノ酒類醸造ノ所爲ハ酒造稅則第三十二條ニ依リ隱蔽酒十七石九斗二升四合ニ當ル造石稅七十壹圓六十九錢六厘ノ三倍罰金貳百拾五圓零八錢八厘ヲ科シ檢査濟ノ隱控ヲ立ノ爲メ開封シタル器械ヲ以テ未檢査ノ隱ヲ控ル爲メ使用シタルト檢査未納ノ器械ヲ使用シタルハ共ニ同則第三十五條ニ照シ各拾圓ノ罰金ニ處シ桶三個隱蔽酒及酒船壹個ヲ沒收スト旨渡シタルニ被告市九郎ハ檢査濟ノ酒船ヲ未檢査ノ隱ヲ控ル爲メ使用シタル所爲ニ對シ旨渡シタル部分ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シタルリ其要領ハ檢査濟ノ酒船ヲ未檢査ノ隱ヲ控ル爲メ使用シタルトテ稅則第三十五條ニ依リ罰セラル、理ナキノミナラス其酒船ヲ沒收スルノ正條ナキニ前掲ノ如ク罰金ニ處セラレ且其酒船マテ沒收スト旨渡サレタルハ縣律ノ錯誤ナリト云フニ在リ
對手人檢査補稅後賄ハ原裁判官於テ罰金ニ處シタルハ相當ナルモ控リ器械ヲ沒收シタル不法ナルヲ以テ上告趣旨相當ナリト答辨セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ之ヲ審投スルニ

酒造稅則第二十五條ニ背キタルモノトシ同第三十五條ニ於テ罰スルハ造酒控リ器械等使用スル時ハ其旨申出テ開封ヲ請ケタル上ニテ使用スヘキニ開封ヲ受ケシテ使用シタル所爲ヲ罰スル法規ニシテ開封ヲ請ケタル後他ノ方法ニ使用シタルモノヲ罰スルモノニ非スト本案被告入カ檢査濟ノ隱ヲ控ル爲メ開封請ケタル酒船ヲ檢査未納ノ隱ヲ控ル爲メ使用シタルハ稍稽當ナラサルモ開封ヲ請ケサル酒船ヲ使用シタルニ非スシテ開封ヲ請ケタルモノヲ使用シタルモノナレハ右第三十五條ニ依リ罰スルヲ得サル勿論被告ガ其使用シタルハ全ク隱蔽酒ヲ控ル爲メニ過キサレハ旁之ヲ罰スルヲ得サルモノトス然ルニ原裁判官於テ其事實ヲ認メナカラ右第三十五條ニ依リ罰金ヲ旨渡シミナラス其使用シタル器械ヲ沒收スルノ明文ナキニモ拘ハラズ沒收シタルハ上告論旨ノ如ク縣律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノト裁定ス
以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ注リ原裁判官檢査濟ノ隱ヲ控ル爲メ開封請ケタル船ヲ檢査未納ノ酒類ヲ控ル爲メ使用シタル所爲ニ對シ旨渡シタル部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判ヲ爲ス左ノ如シ

原裁判官カ認メタル事實ニ因リ前説明ノ如ク被告ガ所爲ハ素ヨリ罪トナラサルニ付治罪法第三百五十八條ニ照シ無罪ヲ旨渡シ其酒船ハ被告人ニ還付スル者也
明治十九年十一月廿九日

四七二 明治十九年第二百二十三號

長野縣平民 關與惣治

本件被告人カ所爲ノ事實ニ於ケル原裁判官ノ判定スル所ニ依レハ前年度ニ製造セシ檢査已濟ノ清酒ヲ明治十九年三月ニ至リ貯藏シテ爲シ其内ナル清酒六斗ヲ已ニ檢査濟ノ清酒樽ノ中ニ混入シ之ヲ控リ上ケタル迄ニシテ未タ清酒ノ檢査ニ至ラサルモノニ過キサルナリ然ルニ酒造稅則中ニ檢査濟ノ酒ヲ貯藏シテ爲ス場合ニ再檢査ヲ受ク可シトノ命令法ナキハ勿論該酒ヲ檢査未納ノ酒ニ混入シタルトノ外再ヒ納稅ヲ爲スヘシトノ法令アルニアラサレハ貯藏ヲ爲シタルトテ檢査未納酒ト認得スヘキモノニアラスシテ依然其稱呼ハ檢査已濟ノ古酒タルヲ勿論ナルヲ以テ該酒ヲ檢査已濟ノ隱ニ混入シ之ヲ控リ上ケタル所爲ヲシテ酒造稅則第二十三條第二項ノ違犯ナリトシ該則第三十六條ニ照シ處罰スヘキモノニアラサル而已ナラス被告カ所爲ノ如キヲ該則中制裁スル法條ナキヲ以テ刑法第二條ノ明文ニ基キ無罪ノ旨渡シヲ爲スヘキモノナリ然ルニ原裁判官於テ茲ニ出テテ前記ノ如ク斷了セシハ上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノト判定ス因テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判官破毀シ本院於テ直ニ裁判ヲ爲ス左ノ如シ

關與惣治

右被告人カ所爲ノ事實ハ原裁判官ノ判定スル所ニ依リ之ヲ罰スルノ法律ナキヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ從ヒ無罪

但控押ヘタル清酒及ヒ酒桶半切桶ハ治罪法第三百八條ニ依リ被告ニ還付ス

明治十九年十一月廿五日

四七三 明治十九年乙第六十五號

石川縣平民 三ツ野庄在門

酒造稅則第二條酒類ヲ分テ三類トシ第一類清酒濁酒其他醸造シタルモノヲ云フトアレハ釀ノ酒類中ニアルヤ固ヨ
リ論ヲ俟タズ殊ニ同則追加第十條ニ未製成ノ酒類ヲ所持スルモノハ其節管職ニ申出檢査ヲ受ケ現石數ニ付納稅ス
ヘレトアレハ本案被告ガ釀ヲ隱蔽セシ際發覺セシ所爲ニ對シテハ釀ノ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ罰金ヲ科スヘ
キハ當然ニシテ未定ノ清酒ノ石數ヲ算シテ罰金ヲ科スヘカラサルハ勿論ナレハ上告初項ノ論點ハ相當ナリト雖
モ酒造管職者ニシテ其用ニ供スル器械ヲ管職ニ申出テ檢査ヲ受クルハ其正當ナル業ヲ爲スニ使用スル諸器械ヲ指
稱スルモノニシテ營業外不正ニ使用スル如キ物品ハ該稅則第二十條第一項ノ規定外ナルヲ論ヲ俟スシテ明カナル
ハ原裁判官ガ該則第二十條第三十五條ヲ適用スヘキ罪ヲ組成セスト判定シタルハ至當ニシテ此上告點ハ其原由ナ
キモノトス因テ原判文上層六石一斗五升八合ヲ隱蔽シ云々ト認メナカラ未定ノ清酒ヲ隱蔽シテ罰金ヲ科センハ不
法ノ裁判ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ依リ原裁判擬律錯誤ノ部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス左
ノ如シ

三ツ野庄在門

右庄在門カ被告事件ニ對シ原裁判所ニ於テ認定セン酒類隱蔽ノ事實ニ據リ其清酒檢査ノ際清酒二十三石六斗四升
ニ合釀六石壹斗五升八合惣計貳拾九石八斗ヲ隱蔽セシ罪ハ明治十三年第四十號布告酒造稅則第三十二條ニ依リ同
十四年第七十二號布告第三條及前稅則第三條酒類造石稅一類壹石ニ付金四圓トアルニ照シ右清酒并釀ヲ沒收シ造
石稅百拾九圓二十錢ノ三倍即チ罰金三百五十七圓六十錢ニ處スルモノ也
明治十九年十一月二十日

四七四 明治十九年乙第四百六號

岩手縣平民 菊池藤吉

上告ノ主點トスル處ハ自家用料酒製造ノ免許證札ヲ受ケ之ヲ醸造スルニ當リ其制限ヲ超過シタルハ其免許札ハ無
効ニ歸シ應テ本則ニ依リ處罰セサル可カラズ云々論告スレモ附則第三條ニ云々一期製造高一石ヲ超過スルハ其免許
シ之ヲ超過スルハ總テ本則ニ從フヘシトアレハ現ニ自家ノ用ニ供スル酒類ト雖モ釀造高一石ヲ超過スルハ免許
本則ニ規定セル手續順序ニ依ルヘシトノ謂ニシテ其制限ヲ超ヘ製造シタルハ附則ノ支配ヲ脫シ本則ニ依リ處罰
スヘシトノ精神ニハ非サルナリ然リ而シテ釀造酒類ハ其性質混和物ニシテ分ツテ得可カラサルモノナレハ其釀造
石數一石ヲ超過シタルハ一渾ヲ犯則酒トナルヲ以テ其酒類及ヒ器械共悉皆沒收ス可キハ當然ナリト雖モ若シ一期
內數次ニ釀造シ内數次ハ制限以內ニ係リ最終ノ一次而已制限ヲ超ユルハ其最終ノ釀造酒類及ヒ物品ヲ沒收スル
ニ止ル可キモノトス今ヤ原判文ヲ閱スルニ被告入ハ云々酒造稅則附則第三條ニ違反シ一石ノ外尚一石五升一合ヲ
醸造シトノミアリ其一次ニ三石餘ヲ釀造シタルヤ將ク數次ニ釀造シタルヤ分明ナラス是等ノ事實ヲ審究明示ス
ルハ本案緊要ノ點ナルニ之ヲ明示セザレハ檢律ノ當否ヲ確查スルニ由ナキ不法ノ裁判ナリトス右ノ理由ニ依リ已
ニ破毀ス可キモノト認メタル上ハ他ノ上告論旨ニ付テハ別ニ辨明ヲ與ヘス因テ治罪法第四百二十八條ノ規定ニ則
リ原裁判官遊ノ全部ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ受ケシムル爲メ被告事件ヲ仙臺縣裁判所ニ移ス者ナリ
明治十九年十二月廿三日

四七五 明治十九年乙第四百七號

岩手縣平民 川村彌惣太

酒造稅則附則第三條ニ規定スルカ如ク自家用料酒醸造免許者ハ其一家内ニ於テ一期製造高一石以上ヲ超過スル
ヲ得サルニ之レニ背キ一石以上ヲ製造シタル時ハ其酒類タル一時ノ製造ニ係ル時ハ其全部ヲ以テ犯罪ニ係リタル
モノト云ハサルヲ得ヌ如何トナレハ酒類ノ如キハ性質上其犯罪ニ係ルモノト否トヲ分別シ能ハサルモノナレハナ
リ然リト雖モ之レニ反シ漸次一石以上ヲ製造シ犯罪ニ係ルモノト係ラサルモノトヲ分別シ得ヘキ場合假ハ一石ヲ
シノ部

造り次ニ五斗ヲ造リ又ハ一石ト五斗トヲ別個ノ器械ニ造リタル場合ノ如キハ明ニ分別シ得ヘキヲ以テ此場合ニハ第三條ニ背キタルノ故ニ依リ最初造リタル一石ト後ニ造リタル五斗トヲ併セテ没收スヘキモノニ非サルヲ以テ右第三條ノ違犯者アリト認定スルニハ宜ク其製造シタル酒類タル全ク一時ノ所爲ナル歟將タ漸次ノ醸造ナル歟長シ一時ノ所爲ニモセヨ其器械タル別個ナル歟否ナノ事實理由ヲ明示セサルヘカラス今原裁判官渡邊ヲ問スルニ(被告ハ明治十八年度自家用料酒製造免許證札ハ願受ケタリト雖モ成規ノ石數ヲ超過シ一石ノ外尚五斗六升九合ヲ醸造シタル云々)トアルニ依レハ被告人於テ一石以上ノ酒類ヲ醸造シタル事實明白ナリト雖モ本案犯罪組成上必要缺クヘカラス以上ノ事實即チ一時ノ所爲ナル歟將漸次ナル歟又其器械ハ一ニシテ分別シ能ハサルモノナル歟ノ理由ヲ明示セサルヘ原裁判官於テ現在酒ノ内ヨリ超過シタル五斗六升九合ヲ没收シタルノ適否ヲ審査スルニ由ナレ是レ即チ理由ニ於ケル不備アル不法ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス既ニ此點ヲ以テ破毀ノ原由アルモノト認メタル以上ハ上告論旨ニ對シ別ニ辨明ヲ與ヘス

明治十九年十二月廿五日

四七六 明治十九年乙第七百八十四號

岩手縣平民 出口安右衛門

治罪法第三百四條ニ規定スルカ如ク有罪ナルノ言渡ヲナスニハ其犯罪ヲ擲造スルニ必要ナル事實ノ理由ヲ明示セサルヲ得サルハ勿論其犯罪ノ場所ヲモ明示スルカ如キモ果テ管理シ得ヘキ場所ニ於テノ犯罪ナルヤ否ナク之ヲ知ルニ必要ナレハ是亦明示ナカラサルヲ得ス今原裁判官渡邊ヲ問スルニ(被告人ハ實業出口長吉ノ名義ヲ以テ明治十七年五月以來酒販十三石三斗六升二合五勺ヲ代金百八十二圓七十五錢ニテ受賣營業シタル云々)トアルニ依レハ被告カ酒販ノ受賣ヲ爲シタルノ事實ハ明ナリト雖モ其爲シタル犯罪ノ場所ニ於ケル何レナル歟等モ其明示アルヲ見ヌ抑酒造營業者ノ資格タルヤ其酒造免許場内ニ於テハ其權ヲ實行シ得ヘント雖モ酒造免許場外ニ在テハ其酒造ヲ爲スノ權タル有スヘキモノニ非サルヲ以テ其免許場外ニ在テハ假令酒販ノ受賣ヲ爲シタルトテ同第二十一條ノ

違犯者ナリト云フヲ得サルモノトス如何トナレハ該第二十一條ノ律意タル酒造營業者其酒造免許場内ニ於テハ酢及ヒ酒モ受賣スルヲ禁止シタルモノニシテ即チ其場所ニ依テ罪トナルモノタルヲ勿論ナルヲ以テナリ今試ミニ原裁判官カ有罪ノ資料ヲラシメタル被告ノ犯則申立書等ヲ問スルニ被告カ免許ヲ得タル酒造場外タル隣家ニ於テノ所爲ナルカ如ク果テ然レハ右第二十一條ノ違犯者ト云フヲ得サルモノ、如シト雖モ以上ノ如ク本案犯罪組成上必要ナル其犯罪ノ場所ヲ明示シアルトナケレハ隨テ疑律ノ當否ヲ審査スルニ由ナク即チ理由ニ於ケル不備アル不法ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス既ニ此點ニ付キ原裁判官破毀スヘキモノト認メタル上ハ被告人カ上告論旨ニ對シ別ニ辨明ヲ與ヘス

明治十九年十二月廿七日

四七七 明治二十一年乙第二八一號

青森縣平民 小林岩吉

明治十七年大藏省第六十四號酒造稅則取扱心得書第三十五項ヲ閱スルニ(濁酒白酒ハ都テ釀ノ儘ニテ検査シ造石稅ヲ査定スヘシ)トアリテ此注文ニ依ルトキハ濁酒ニ付造石稅ヲ定ムルハ釀ヲ以テスルモノニシテ之ヲ搾リ上ケタル石高ニ依リテ定ムルモノニアラサルヤ明瞭ナリ故ニ酒造稅則附則改正第五條ニ所謂一期製造高一石トハ搾リ上ケタル濁酒ノ石高ヲ以テ算シタルニアラス釀ヲ以テ算シタルニ在ルヤ勿論ナレハ被告人カ製造シタル釀石三斗八濁酒ニ搾リ上ケル時ハ假令壹石以下ニ減スルニモセヨ右附則第五條ニ反ラサルモノト云フヲ得サルモノトス又被告カ製造シタル釀中ヨリ三斗ノ清酒ヲ得ルノ目的ナリシカ如ク云フト雖モ果テ其目的ナリシトハ原裁判官ノ認定セサル所ナル而已ナラス假ニ其目的ナリシトナスモ之ヲ分別シテ論スヘキモノニアラサレハ之ヲ合シテ壹石以上ナリトシ之レニ罰金ヲ科シ酒類ヲ没收スルノ言渡ヲナシタルハ相當ノ疑律ニシテ錯誤ニアラサルモノトス

明治二十一年五月十日

○舊令

四七八 太政官第六十一號布告 明治十五年十二月

酒造稅則附則

- ①七八ノ 一 條 家用料ノ酒類(飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シ)ヲ製造スル者ハ管廳ニ届出製造免許證札ヲ受ケ證札料金八十錢ヲ納ムヘシ
- ②七八ノ 二 條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス
- ③七八ノ 三 條 家用料ノ酒類ハ一家内ニ於テ一期製造高壹石(二種以上製造スル者)ヲ超ユルヲ得ス若シ之ヲ超ル時ハ總テ本則ニ從フヘシ
- ④七八ノ 四 條 家用料ノ酒類ハ其住居セル一家ノ外ニ於テ之ヲ製造スルヲ得ス
- ⑤七八ノ 五 條 家用料ノ爲メ製造シタル酒類ハ之ヲ賣捌クヲ得ス
- ⑥七八ノ 六 條 家用料ノ酒類ヲ製造スル者免許證札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシ時ハ管廳ニ申出再渡又ハ賣捌クヲ請フヘシ
- ⑦七八ノ 七 條 家用料ノ酒類ヲ製造スル者ハ主任官隨時之ヲ検査スヘシ
- ⑧七八ノ 八 條 第一條第三條第四條第五條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器機ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ
- ⑨七八ノ 九 條 此規則ヲ犯シタル者ニハ本則第三十七條及第三十八條ヲ適用ス

(七九) 警廳營業稅則 明治十三年九月 第四十一號布告

警廳營業稅則別冊ノ通相定本年十月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

(別冊)

警廳營業稅則

第一章 免許證札 營業稅

第一條 凡ソ警廳(醸造酒類)ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受ケ一期營業稅トシテ左ノ通納ムヘシ

警廳營業稅 金五十圓

第二條 營業免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス

第三條 一期中何月ニ新規免許ヲ受クルモ營業稅ハ直ニ管廳ニ納ムヘシ

第四條 免許ヲ受ケタル者ハ其一期中販賣見込ノ石數毎年十月中管廳ニ届出ヘシ

第五條 販賣ノ節ハ其石數并ニ購求者居所姓名及ヒ年月日等遺漏ナク帳簿ニ記載シ置キ翌年十月中管廳ニ差出シ検査ヲ受クヘシ

管廳及ヒ仕込米諸帳簿倉庫納屋等主任官隨時之ヲ検査スヘシ(十五年第六十二號布告ヲ以テ本項追加)

第六條 免許證札ヲ賣買讓與スル時ハ雙方連印ノ願書ヲ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ

第七條 免許證札失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシ時ハ管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第八條 免許ヲ受ケタル者ハ警廳賣捌所ト書シタル標札ニ免許證札ノ番號ヲ記載シ戶外ニ掲出スヘシ

第九條 免許證札ハ貸借スルヲ許サス

第十條 免許證札ヲ受ケス警廳ヲ營業スル者ハ科料トシテ其營業稅二倍ノ金額ヲ徵スヘシ

第十一條 前明條ノ外販賣ノ節石數并ニ購求人ノ居所姓名等ノ帳記ヲ怠ルカ其他本則ニ違

四七九ノ一 項
四七九ノ二 項
四七九ノ三 項
四七九ノ四 項
四七九ノ五 項
四七九ノ六 項
四七九ノ七 項
四七九ノ八 項
四七九ノ九 項
四七九ノ一〇 項
四七九ノ一一 項
四七九ノ一二 項
四七九ノ一三 項
四七九ノ一四 項
四七九ノ一五 項
四七九ノ一六 項
四七九ノ一七 項
四七九ノ一八 項
四七九ノ一九 項
四七九ノ二〇 項
四七九ノ二一 項
四七九ノ二二 項
四七九ノ二三 項
四七九ノ二四 項
四七九ノ二五 項
四七九ノ二六 項
四七九ノ二七 項
四七九ノ二八 項
四七九ノ二九 項
四七九ノ三〇 項
四七九ノ三一 項
四七九ノ三二 項
四七九ノ三三 項
四七九ノ三四 項
四七九ノ三五 項
四七九ノ三六 項
四七九ノ三七 項
四七九ノ三八 項
四七九ノ三九 項
四七九ノ四〇 項
四七九ノ四一 項
四七九ノ四二 項
四七九ノ四三 項
四七九ノ四四 項
四七九ノ四五 項
四七九ノ四六 項
四七九ノ四七 項
四七九ノ四八 項
四七九ノ四九 項
四七九ノ五〇 項
四七九ノ五一 項
四七九ノ五二 項
四七九ノ五三 項
四七九ノ五四 項
四七九ノ五五 項
四七九ノ五六 項
四七九ノ五七 項
四七九ノ五八 項
四七九ノ五九 項
四七九ノ六〇 項
四七九ノ六一 項
四七九ノ六二 項
四七九ノ六三 項
四七九ノ六四 項
四七九ノ六五 項
四七九ノ六六 項
四七九ノ六七 項
四七九ノ六八 項
四七九ノ六九 項
四七九ノ七〇 項
四七九ノ七一 項
四七九ノ七二 項
四七九ノ七三 項
四七九ノ七四 項
四七九ノ七五 項
四七九ノ七六 項
四七九ノ七七 項
四七九ノ七八 項
四七九ノ七九 項
四七九ノ八〇 項
四七九ノ八一 項
四七九ノ八二 項
四七九ノ八三 項
四七九ノ八四 項
四七九ノ八五 項
四七九ノ八六 項
四七九ノ八七 項
四七九ノ八八 項
四七九ノ八九 項
四七九ノ九〇 項
四七九ノ九一 項
四七九ノ九二 項
四七九ノ九三 項
四七九ノ九四 項
四七九ノ九五 項
四七九ノ九六 項
四七九ノ九七 項
四七九ノ九八 項
四七九ノ九九 項
四七九ノ一〇〇 項

六七八二四一
五條
四六九七九
一三三條
七九一三三
一四一五條

犯スル者ハ科料トシテ一圓ヨリ少ナカラス五十圓ヨリ多カラサル金額ヲ徵スヘシ
第十二條 醬麴營業場ノ中ニ於テハ酒類受賣醬麴受賣酢造營業ヲ爲シ又ハ酒類(醬麴ヲ除ク)ヲ製造スルヲ許サス(十五年第六十二號布告)
第十三條 第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ
第十四條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但シ刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニ在ラス
第十五條 醬麴營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰ス

●參照

○關係法令

四七九 大藏省乙第四拾號達 明治十三年十一月

本年九月第四拾壹號ヲ以テ醬麴營業稅則御布告相成候ニ付右取扱心得書別紙之通相定候條此旨相違候事

(別紙)

醬麴營業稅則取扱心得書

第一款 營業免許
第一項 免許鑑札ハ豫メ授與スヘキ員數ヲ見積リ租稅局ヘ申出之ヲ受取置クヘシ

第二項 免許鑑札雛形及ヒ其記載方ハ第一號圖式ノ如シ

第三項 製造場ハ倉庫ノ棟數ニ拘ラス都テ其一區域ヲ以テ一箇所トシ免許鑑札ヲ授與スヘシ

第四項 免許鑑札ハ其年一期有効ノモノトス故ニ引續キ免許ヲ請フ者アルハ最初授與シタル鑑札差出サセ其鑑札ノ裏面ヘ該期ノ免許證印(第五項雛形ノ如シ)ヲ捺シ再ヒ之ヲ授與スヘシ

但鑑札裏面餘白盡キタルハ更ニ新鑑札ヲ授與スヘシ

第五項 免許證印ハ左ノ雛形ノ如ク各府縣廳ニ於テ調製スヘシ

但其證印方郡區長ヘ委任ノ向ト雖モ各府縣廳ニ於テ調製シ相渡スヘシ
(雛形畧ス)

第六項 稅則第六條免許鑑札賣買讓與ノ節其書換方若シ甲乙兩管廳ニ交渉スルハ雙方連署ノ書面ニ免許鑑札ヲ添ヘ甲管廳(賣渡讓渡人所在ノ管廳)ニ出願セシメ甲管廳ニ於テハ乙管廳(買受讓受人所在ノ管廳)ヘノ添翰(該期免許稅納濟且免許鑑札ハ取置キタル旨明記スヘシ)ヲ作り之ヲ下渡シ乙管廳ニ於テハ甲管廳ノ添翰ニ據リ書換鑑札ノ下渡方ヲ爲スヘシ

但製造場轉換ノ爲メ鑑札書換方兩管ニ交渉スルモノモ本項ノ手續ニ據ルヘシ

第七項 廢業ノ者ハ其届出ノ節免許鑑札ヲ返納セシムヘシ

第八項 廢業并書換等ノ返納鑑札ハ各府縣廳ニ於テ取纏メ十年當省乙第七號達ニ據

リ不取締無之様消却スヘシ

第九項 稅則第八條戶外ニ掲出スヘキ標札ハ左ノ雛形ニ倣ヒ調製セシムヘシ
(雛形畧ス)

第十項 稅則第五條賣上帳簿差出シタルキハ其記載ノ石數及ヒ購求者居所姓名等精
取ニ檢査ヲ遂ケ檢印ノ上下渡スヘシ而シテ該帳簿ハ營業中之ヲ保存セシムヘシ

第十一項 營業取締ノ爲メ便宜ニ主任官出張シ之ヲ點檢スヘシ

第十二項 稅則第四條販賣見込ノ石數ハ每一期分第二號雛形ニ倣ヒ石數表ヲ調製シ
其期十一月十五日限り差立テ租稅局ヘ送付スヘシ

但本文届出ノ後其増減ハ三箇月毎ニ取經メ製表ノ上翌月十五日限り差立テ租稅
局ヘ送付スヘシ

第十三項 醬麴製造場ノ員數ハ三箇月毎ニ取經メ第三號雛形ニ倣ヒ報告表ヲ調製シ
翌月十五日限り差立テ租稅局ヘ送付スヘシ(明治十五年十月大藏省第
三拾七號達ヲ以テ改正)

第十四項 免許鑑札受拂ハ每一期分第四號雛形ニ倣ヒ計算表ヲ調製シ翌期十月十五
日限り差立テ租稅局ヘ送付スヘシ

第十五項 (明治十五年十月大藏省第
三十七號達ヲ以テ削除)

第十六項 營業稅ハ每一期分第六號雛形ニ倣ヒ稅表ヲ調製シ翌期十月二十日限り差
立テ租稅局ヘ送付スヘシ

第十七項 販賣シタル石數ハ每一期分第七號雛形ニ倣ヒ石數表ヲ調製シ翌期十一月
十五日限り差立テ租稅局ヘ送付スヘシ
(雛形畧ス)

○判決例

四八〇 明治十九年第一千二百九十八號

富山縣平民 吉友 龜三郎

上告諭旨ハ引續營業ヲ爲ス者ハ其引續營業田中ニアリテハ未タ鑑札ノ下付ナキニ先テ製造スルモ其後ニ至リ下
付ナリシ鑑札ノ効ヲシテ既往ニ溯リ其効ヲ有スト云ニ在レテ該規則ノ一期ト稱スルハ毎年十月一日ヨリ九月三十
日迄ナルヲ以テ其期月日ヲ經過スルハ其鑑札ハ原ヨリ効力ヲ失ヒタルモノナルニヨリ新規營業者タルト引續營
業ヲ爲ス者トヲ問ハス更ニ新鑑札ノ下付アルマテハ總テ無鑑札營業者ト異ナル所ナキ者トス故ニ新鑑札ノ下付ナ
キニ先テ製造セシ者ハ該規則第十條ノ制裁ハ免カル、ヲ得サル者トス因テ原裁判官カ被告ノ所爲ニ對シ該條ヲ適
用シテ處罰セシハ至當ノ裁判ナリト裁定ス

明治十九年十一月十八日

(八〇)質屋取締條例 明治十七年三月
第九號布告

質屋取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年五月十五日ヨリ施行ス
(別冊)

質屋取締條例

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳(東京府)ノ免許ヲ受クヘシ
第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ檢印ヲ受クヘシ

シノ部

四八〇ノ一
四八〇ノ二
四八〇ノ三
四八〇ノ四

一三三三四
三三九四八
三三八〇二
四八七〇八
四五一一四
四八〇四一
四八五五五

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物貸金買入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ
差支ナキ横記載スヘシ但證人ヲ要スルトキハ質入主及證人ノ實印ヲ押捺セシメ置クヘシ
第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者證人タルトキハ此限
ニアラス
第五條 十五年未滿ノ者白痴瘋癲者及雇人雇主ノ家ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見
人雇主又ハ身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス
官廳町村學校病院社寺會社ノ印章記號アル物品ハ其質入シ得ヘキコトヲ證明スル證人二
名以上アルニ非ラサレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス
前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サルコト
アルヘシ

四八二〇八
四八二〇九
四八二一〇
四八二一一
四八二一二
四八二一三
四八二一四
四八二一五
四八二一六
四八二一七
四八二一八
四八二一九
四八二二〇
四八二二一
四八二二二
四八二二三
四八二二四
四八二二五
四八二二六
四八二二七
四八二二八
四八二二九
四八二三〇
四八二三一
四八二三二
四八二三三
四八二三四
四八二三五
四八二三六
四八二三七
四八二三八
四八二三九
四八三〇〇

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物
品ヲ質ニ取リ又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ
第七條 贓物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物品ヲ持來ル者アルトキハ直ニ所轄
警察署又ハ巡行ノ警察官巡查ニ密告スヘシ
第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルトキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所轄警察署ニ差出スヘシ
第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルトキハ警察官ニ於テ其物品代價及置主ヲ調査スルニ差支ナキ
横流質物賣拂帳ニ記載スヘシ
第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

一三三三四
三三九四八
三三八〇二
四八七〇八
四五一一四
四八〇四一
四八五五五

一三三三四
三三九四八
三三八〇二
四八七〇八
四五一一四
四八〇四一
四八五五五

第十一條 品觸到達以後一年內ニ類似ノ物品ヲ質ニ取リ又ハ寄藏シタルトキ若クハ其以前
ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ
第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直
ニ所轄警察署ニ届出ヘシ
第十三條 警察官ハ何時タリトモ質屋ノ店舖ニ臨ミ質物及帳簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其
質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出ツシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコト
得ス
第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
第十五條 此條例ヲ一年內ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止ス
ルコトヲ得
第十六條 此條例ヲ犯シタル者ハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
第十七條 營業上ニ付テハ家族又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ
第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府知事ヲ除ク縣令ニ於テ便宜取設ケ内
務卿ニ届出ツヘシ

●參照

○判決例

四八一 明治二十年乙第九十二號

大坂府平民 柳口 安三郎

質屋取締條例第十五條ニ基キ行政ノ處分ヲ以テ其質屋營業ヲ停止セラレタルハ其時間内營業スルノ權ナキヤ明
顯ナルヲ以テ其停止中營業スルノ權ナキハ恰モ免許ヲ受ケサルモノノ營業スル權ナキト同一ナリト云ハサルヲ得
ス故ニ原裁判官於テ被告人ハ大坂府知事ヨリ三月間營業停止ノ旨渡リ受ケ即チ營業スルノ權ナキニモ拘ハラズ
猶ホ之ニ背キ質屋營業ヲ爲シタルノ事實ヲ認テ以テ同條例第一條ニ依リ免許ヲ得タル上ニ非サレハ營業スルノ權ナ
キモノノ之ニ背キ免許ヲ得ス營業シタルト同一視シ前掲ノ如ク處斷シタルハ相當ナリトス而シテ前説明ノ如ク右
第一條ニ違背シタル以上ハ同法裁判ノ支配ヲ受クヘキ勿論ナルヲ以テ被告カ本案ヲ行政處分ニ屬シ司法ノ關與ス
ヘキモノニ非ストノ論旨ハ相立タサルモノトス

明治二十年二月十四日

四八二 明治二十年乙第三百六十二號

兵庫縣平民 上田 傳次郎

質屋取締條例第六條ノ律意ハ質屋營業人カ其入質者ノ盜罪詐欺取財ノ罪若クハ刑法第三百九十九條第四百一條等
ノ處斷ヲ受ケシモノナルヲ知リシ物品ヲ質ニ取リ又ハ寄附セシ時ハ所轄警察署ニ届出ツヘキニ在リテ假令此等
ノ處斷ヲ受ケシモノナルカ否ヲ知ラサルモ入質者於テ荷モ前項處斷ヲ受タル場合ニ係ル時ハ即チ營業人ヲ所罰ス
ヘシト規定シタルニアラサルヲ論テ誤タズ何トナレハ凡ソ罪ト爲ルヘキ事實ヲ知ラサル者ハ即チ其罪ヲ論セスト
ハ法律一般ノ原則ニシテ前第六條ハ此原則ノ例外法ト解スヘキモノニアラサレハナリ故ニ原裁判官於テ被告傳次郎
カ尾川運平ノ義キニ寄附罪ニ依リ處斷ヲ受ケシモノナルヲ知リシノ認ムヘキ証憑充分ナラスト判定シ以テ無罪
ヲ實據シタルハ至當ニシテ若モ法律ヲ誤解セシモノニアラスト因テ原檢察官ノ上告論旨ハ之ヲ採用セス

明治二十年四月十四日

四八三 明治廿年乙第七百五十一號

神奈川縣平民 國見 甚助

質屋取締條例第三條ヲ閱スルニ質物書帳ニハ警察官ニ於テ質物貸金質入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ
經テ支ナキ簿計帳ニヘシ云々トアルモ其物品ノ所有主及其住所迄ヲ尋問シテ記載スヘキト規定シタルニ非サルヲ
以テ之ヲ簿計帳ニ載セサルモ其實入主タル者ノ身元ヲ詳カニシ該條ニ定ル事項ヲ記載スル以上ハ之ヲ以テ違犯ノ所
爲トハ爲ヌヲ得サルナリ今原判決ヲ檢スルニ被告カ所爲タル即チ該條ニ從ヒ質物書帳ニ其實入ヲ爲シタル者ノ夫
ノ姓名其他物品金額年月日等ヲ記載シアル事實ヲ判示セリ而シテ其事實ニ據レハ右第三條ヲ犯セシ廉ナキハ
勿論復タ其置主トシテノ名ニ代ヘ夫尋吉ノ姓名ヲ記セシカ如キ婦ノ財産ハ即チ夫ノ財産ト想像スル義ヨリ普通ノ
例習ナルヲ以テ是亦無關係無効ノ記載ト爲シ該條ニ觸ルヘモノトハ云フヲ得ス然ラハ本案被告カ所爲ノ如キ無罪
ヲ實據タル當然ニシテ誤解ヲ誤リタルニ非サルヲ知ル可キナリ又原判決明示スル如ク其事實ヲ詳ケタルハ即チ無
罪タルノ理由ヲ付シタルモノニシテ之等ヲ理由ノ不備トハ云フ可キモノニ非ス因テ該上告ハ到底採用スルニ由ナ
キモノト判定シ治罪法第四百廿七條ニ從ヒ棄却スルモノ也

明治二十年九月二十二日

四八四 明治二十一年乙第百號

愛媛縣平民 筒井 キヌ

質屋取締條例ヲ按スルニ其第一條ハ質屋營業ヲナスニハ管轄廳ノ免許ヲ受クヘキト規定シ同第十四條ハ右等ノ
規定ニ背キタル者ヲ制裁スルノ法章ナリトス而テ官民ヲ問ハス他人ノ依頼ニ應シ又ハ餘裕ノ資産アルヲ以テ臨時
ニ質物ヲ取リ金錢ヲ貸與スルカ如キハ質屋取締條例ヲ違率セサルモ審ヨリ注ノ禁スル所ニアラス故ニ前二條ヲ適
用處斷スルニハ物品ヲ質ニ取リ金錢ヲ貸付ルヲ以テ一種ノ營業トナシタルノ事實ナカルヘカラス今ヤ原判決ヲ閱
スルニ被告ハ木村庄藏外一名ヨリ數度ニ表類其他ノ物品ヲ質物ニ取リ金貨ヲ貸渡シ各自共ニ其利息ヲ附シ而テ被
告ハ質屋帳札ヲ受ケサルモノトアリテ其前文ニ依ルルハ木村庄藏外一名ヨリ物品ヲ預リ金貨ヲ貸與シ各自ニ利息

シノ部

可收受シタリト云フニ外ナラズシテ其所爲タル臨時ノ貸付ナルカ營業ノ目的ヲ以テノ貸付ナルカ判然セサルモノナルニ原裁判官カ前記ノ事實ニ對シ實據禮ヲ受ケザリシハ即チ條例第一條ノ違犯トシ同第十四條ニ依リ處罰シタルハ上等第二論旨ノ如ク事實ノ理由ニ不備アル失當ノ裁判ニシテ擬律ノ當否ヲ鑑査スルニ由ナキモノトス
明治二十一年二月二十七日

四八五 明治十八年第二四六一號

和歌山縣平民 南川七郎右衛門

質屋取締條例第五條第二項注文ノ解釋ニ至テハ上等論旨其當ヲ得タルモノト雖モ本件ノ事實即チ住吉神社ノ記載シタル帳ヲ以テ熱田神社出雲大社ノ華燈籠ト等シク論シ得ヘキモノニアラス抑出雲大社熱田神社ト云フ如キハ官許社中明記アル所ニシテ其記名アルモノニ於テハ該第五條第二項ニ所謂社寺ノ記載ト云フヲ得ヘキモ其住吉神社ノ記載シタル如キハ住吉ノ神稻荷ノ神ト記載シタルニ外ナラスシテ神名ヲ職ニ記載シタリト云フニ過キス然レハ神社ノ記載トハ同シカラサルモノナルヲ以テ原裁判所カ本件ノ事實ニ對シ質屋取締條例第五條第二項ヲ適用セザリシハ允當ナルモノニテ上等論旨ハ其當ヲ得サルモノトス

四八六 明治二十一年乙第一九五號

福島縣平民 渡邊フク

本案原裁判所カ認定シタル被告ノ所爲ハ質屋取締條例第八條ニ違犯シ流質物ヲ賣拂フニ際シ五日以前ニ其物品目録ヲ所轄警察署ニ届出サリシト云フニアレハ其無届ニテ流質物ヲ賣拂フタルノ罪ハ免レサル處ナリト雖モ凡ソ自己ノ罪ヲ蔽ハントスルハ犯人ノ常情ナル以テ其無届ニテ賣拂フタル流質物ヲ警察官ノ閲覧ニ供スヘキ帳簿ニ記載シ置カサルハ條例第八條違犯ノ結果ト云フヘキモノニシテ斯ル場合ニ於テハ條例第九條ノ違犯トシ論スヘキモノニ非ラズトス然レニ原裁判所ニ於テ被告ノ所爲ヲ條例第八條ノ違犯ト認メ條例第十四條ニ依リ處罰シ尙ホ條例第九條ノ違犯トシ其罰ヲ併科シタルハ一所爲ヲ二所爲トシ處罰シタルモノニシテ則チ擬律ノ錯誤ナリトス右ノ理由ナルヲ以テ上等論旨中擬律錯誤ナリトノ點ハ其原由アルモノトス因テ治罪法第四百二十九條ニ照シ原裁判ノ擬律ヲ破毀シ直チニ裁判スルヲ左ノ如シ

九條ノ違犯トシ其罰ヲ併科シタルハ一所爲ヲ二所爲トシ處罰シタルモノニシテ則チ擬律ノ錯誤ナリトス
右ノ理由ナルヲ以テ上等論旨中擬律錯誤ナリトノ點ハ其原由アルモノトス因テ治罪法第四百二十九條ニ照シ原裁判ノ擬律ヲ破毀シ直チニ裁判スルヲ左ノ如シ

渡邊 フク

原裁判所ノ認メタル事實即チ被告ノ所爲ハ質屋取締條例第八條ノ違犯ナルヲ以テ同條例第十四條ニ照シ其範圍ニ於テ罰金三十圓ニ處ス

明治二十一年四月十四日

四八七 明治二十一年乙第三二〇號

愛媛縣平民 岩佐 虎次郎

質屋取締條例ノ如キハ畢竟一ノ取締法タルヘキモノナレハ普通刑法ノ原理ニ適從スルヲ得サルコトアルヤ勿論ナリ故ニ本案被告於テ油田「ヒサ」カ詐欺ノ手段ニ階リ即チ身元ヲ詳知スル山崎「ナカ」ナリト固信シタルモノニテ至ク無意ノ所爲ナレハ條例第四條ノ違犯トナシ科罰サルノ理由ナシト主張スルモ己ニ山崎「ナカ」ハ其身元ヲ詳知スルモノナリト自ラ明言スルニ拘ハラス油田「ヒサ」カ「ナカ」ト虚構セルニ容易ク「ナカ」ナリト誤認シタルハ被告カ不法意タル勿論ニシテ即チ自ラ不注意ナルヨリ油田「ヒサ」ア身元ヲ確認スルカ又ハ證人ヲ立テシムル等ノ手續ヲ履行セスシテ右「ヒサ」ヨリ衣類ヲ買取リタルモノナレハ其有意ト無意タルト問ハス該條例第四條ノ違犯ニシテ同第十四條ノ制裁ヲ免カレ得サルモノトス然ラハ原裁判官カ認メタル事實ノ所爲ニ對シ當行セル法律ニ於テモ適當ニシテ事實理由ノ組織ハ勿論擬律ノ錯誤アルヲ見サレハ上等論旨ハ到底相立タサルモノトス仍テ治罪法第四百二十七條ニ則リ之ヲ棄却スルモノ也

明治二十一年五月二十八日

(八一) 證券印稅規則 明治十七年五月 第十一號

シノ部

右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第二類

左ニ掲ケル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲換手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ

- 一金錢借用證文
- 一 地所賣買證文
- 一金高記載アル諸物品預リ證文
- 一金高記載アル諸物品借用證文
- 一 諸物品賣買證文
- 一金錢定規預リ證文
- 一金高記載アル諸般ノ契約證書
- 金高壹圓以上貳拾圓未滿 印稅壹錢
- 金高貳拾圓以上五拾圓未滿 同 貳錢
- 金高五拾圓以上百圓未滿 同 四錢
- 金高百圓以上百五拾圓未滿 同 六錢
- 金高百五拾圓以上貳百圓未滿 同 八錢
- 金高貳百圓以上三百圓未滿 同 拾壹錢
- 金高三百圓以上四百圓未滿 同 拾四錢

- 金高四百圓以上六百圓未滿 同 貳拾錢
- 金高六百圓以上八百圓未滿 同 貳拾六錢
- 金高八百圓以上千圓未滿 同 三拾貳錢
- 金高千圓以上千四百圓未滿 同 三拾八錢
- 金高千四百圓以上千七百圓未滿 同 四拾四錢
- 金高千七百圓以上貳千圓未滿 同 五拾錢
- 金高貳千圓以上貳千五百圓未滿 同 六拾錢
- 金高貳千五百圓以上三千圓未滿 同 七拾錢
- 金高三千圓以上三千五百圓未滿 同 八拾錢
- 金高三千五百圓以上四千圓未滿 同 九拾錢
- 金高四千圓以上 同 壹圓

右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

- 金高百圓未滿 印稅四錢
- 金高百圓以上總テ諸證書稅率ニ據ルヘシ
- 一金錢當座預リ證文
- 一 質物預リ書
- 金高壹圓以上貳拾圓未滿 印稅壹錢
- 金高貳拾圓以上 同 貳錢

八二ノ三

八二ノ一〇

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

八二ノ三三

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙之ヲ使用セントスルトキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高未タ滿タサルカ又ハ使用期限未タ盡キサルニ紙數盡キタルトキハ更ニ紙數ヲ增加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ期限ノ側ニ其事由及ヒ增加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルトキハ内國ノ貨幣ニ改算シタル金高ヲ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ證書ハ雙方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副證書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ本證書ト効用ヲ異ニスルモノ若クハ金高ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ就キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ脱稅ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後證書帳簿ノ受取人ニ於テ相當ノ印紙ヲ貼用スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スルモノ及ヒ手形用紙ヲ用ヒス若クハ不足稅ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ脱稅高二十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以テ消印シタルモノハ印稅高十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ請入證人トシテ加印シタルモノハ各正犯ニ係ル處ス

第二十二條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 前數條ノ罪ヲ犯シタルモノニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

參照

關係法令

四八八 大藏省第六拾號達 明治十七年八月

本年五月第拾壹號布告ヲ以テ證券印稅規則改正相成候ニ付右檢査規程左ノ通相定ム

證券印稅檢査規程 第一項 府縣收稅官吏ハ明治十七年第拾壹號布告證券印稅規則第八條ニ記載セル證書帳簿ノ檢査ヲ行フヘシ

第二項 檢査ヲ分テ二ト爲シ一ヲ定期檢査トシ一ヲ臨時檢査トス

シノ部

- 第三項 定期検査ハ毎年四五六ノ三ヶ月間ニ於テ之ヲ行ヒ臨時検査ハ該検査ヲ必要トスル場合ニ於テ之ヲ行フヘシ
- 第四項 検査員ヲ派遣スルニハ府縣管内ヲ數部ニ區畫シ每部其擔當員二名以上ヲ定ムヘシ
- 第五項 検査員ハ其擔當部内ノ商況戸數及路程ノ遠近ニ應シ一町村若クハ數町村ヲ以テ一區トシ区内ノ便宜ヲ量リ検査場ヲ設クヘシ
- 第六項 検査員ハ豫シメ検査日割ヲ定メ其日割及前條検査場ヲ其区内ノ町村ニ告知スヘシ
- 第七項 臨時検査ノ節ハ時宜ニヨリ前第五項第六項ノ手續ヲ履行セサルコトアルヘシ
- 第八項 検査ハカメテ便捷ヲ要シ人民ノ營業ニ障害ナキヲ圖ルヘシ
- 第九項 検査員検査ノ要領左ノ如シ
 - 一 證書帳簿上印紙貼用ノ有無當否
 - 一 帳簿見積金高及使用期限紙數記載方ノ有無當否
 - 一 貼用印紙消印ノ有無當否
 - 一 印紙再貼用又ハ印紙偽造變造ノ有無
 - 一 帳簿關製上詐偽ノ有無
 - 一 證書帳簿差出方店舖商況ニ相應スルヤ否
- 第十項 検査員ハ豫メ帳簿ヲ備へ受検査人ノ宿所職業姓名及ヒ證書帳簿ノ種類員數ヲ記載スヘシ

- 第十一項 證書帳簿ノ検査ヲ受ケサルモノ又ハ之ヲ受ケルモ尙疑訝ニ涉ルモノアルハ直チニ本人家宅ニ就テ検査ヲ爲スヘシ
 - 第十二項 検査員ハ検査セシ證書帳簿ニ捺印スヘシ
 - 第十三項 (明治十八年大藏省第(十七號)達ヲ以テ加除) (表樣式器之)
- 同指令
- 四八九 静岡縣伺 明治十六年 八月九日
- 証券印紙稅規則第三則第三條ニ見積金高ヲ帳簿ノ初丁ニ自記シ其金高ニ相當スル印紙貼用ノ上ハ必ス實印ヲ以テ圖印スヘキヲ會社ニ在テハ取引上社長若クハ頭取等ノ名義ヲ以テ取結ビタル証券類ハ貼用印紙ノ消印ハ其社長若クハ頭取ノ實印ヲ用フヘキニ敝人共同精社セシモノナレハ會社名ヲ以テスル證券簿へ貼用印紙ノ消印ニハ其社ノ印形ヲ用フルモ控支ナキヤ右相伺候也
- 大藏省指令 明治十六年 八月廿二日
- 伺之通
-
- 四九〇 静岡縣伺 明治十七年 一月廿八日
- 金高記載アル封金ノ擔當取タルモノハ第一類金錢判取帳へ記載セシムヘキヤ検査ノ際貼用印紙(他ノ印章ヲ以テ圖印シアル片ハ後來ヲ戒メ更ニ實印ヲ押サシムヘキヤ
- 大藏省指令 明治十七年 一月廿九日

前段金高記載アル封金ノ儘受取ルモノハ物品買取証ト視認メ荷物判取帳ヘ記載セシムヘシ後段申出ノ通

四九一 愛媛縣伺 明治十七年 一月卅一日

諸公債證券類ヲ貸借シ期限返却ノ節其借主ヨリ幾許ノ謝金ヲ取フヘキ旨記載アル証文ハ證券印稅規則第二則第一條二類中ノ金銭約定証文トシテ其封金ノ類ニ應シテ界紙又ハ印紙ヲ用ヒ無謝借賃ノ分ハ其証文ニ證券面ノ金額ヲ記入スルモノ個ハ證券面ノ金額ヲ轉記シタルマテニ實際取渡ヲ爲スヘキ金額ニアラサルヲ以テ金高記載無之約定証文トシ總テ界紙ヲ用ヒ可然故但公債證券預リ証文ハ儘モ本文ニ準シ可然哉

大藏省指令 明治十七年 二月廿二日 伺之通

四九二 札幌縣伺 明治十七年 四月廿九日

身代限財產ノ内證券印稅紙郵便切手等所持スル者アリ右公債ニ附スヘキヤ又ハ義務者ヨリ願ヒ出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ

司法省指令 明治十七年 五月廿三日

身代限財產ノ取扱ニ付四月廿九日付伺ノ證券印稅紙ハ地方廳ニテ原價ト引換郵便切手ハ郵便本分局ヘ廻シ郵便條例第三十六條第三十七條ノ處分ヲ請フヘシ

四九三 島根縣伺 明治十七年 六月六日

米穀借用証文ハ證券印稅規則第一類相當印紙ヲ貼用スヘキ哉
大藏省指令 明治十七年 六月十七日

新稅則實施後ハ金高記載ナケレハ第一類記載アルハ第二類相當ノ印紙ヲ貼用スヘキ儀ト心得ヘシ

四九四 山梨縣伺 明治十七年 七月廿八日

證券印稅規則第二條第一類ノ證券中營業ニ關スル送狀ニシテ金高五圓以上ノモノハ一錢印紙ヲ貼用スルノ制規ナリ然ルニ右金高ハ其送狀ヲ削フヘキ物品ノ運賃ニ係ルカ又ハ運送スヘキ物品ノ代價ニ依ルカ
大藏省指令 明治十七年 八月七日
其運送物品ノ代價ニ依ルヘキ儀ト心得ヘシ

四九五 愛媛縣伺 明治十七年 八月八日

證券印稅規則第一類期限ヲ定メサル預リ金証文ト第二類金銭當座預リ金証文トノ區分ハ利子ノ有無ニ仍テ區分スルモノニアラス而シテ第三條(前條三揭)ノ所ノ證券帳簿ト効用ヲ同フスルモノハ其名稱ニ拘ハラズ稅率ニ關シ相當ノ印紙ヲ用スヘシ(明)文アル上ハ證券發出人ニ於テ適宜ニ付記シタル名稱ニ仍リ印紙ヲ貼用セシムルモノニモアラス右ハ如何相心得然ルヘキ哉

大藏省指令 明治十七年 九月五日

全ク貸借ノ性質ヲ帯ヒサルモノ即チ保證預リノ類ハ期限ヲ定メサル預リ金証文無定期預リ金ノ使用及利子等ヲ約諾スルモノハ金銭當座預リ証文ニ屬スル儀ト可相心得事

四九六 石川縣伺 明治十七年 十月七日

本縣管下金澤區共有積金ト稱ヒ區會議決ヲ以テ年々收受シ幣ニ其金ハ私立銀行ヘ無定期利付預ケテ爲スモノアリ右金取扱ハ都子同區役所ニ於テ主管スルヲ以テ假令人民共有金ト雖モ區長ノ職權ヲ以テ主管スル以上ハ印稅

規則第九條ニ依リ該證書印紙貼用ニ及ハス哉或ハ別ニ出納取扱ヲ命シタルモノニアラサル上ハ第二類ニ依リ相
當印紙貼用致サセヘク備ニ候哉

大藏省指令 明治十七年
十月二十日

伺之趣區長ヨリ發スル證書ハ印紙貼用ニ及ハス銀行ヨリ發スル證書ハ第二類ニ依リ相當印紙貼用セシムヘキ備
ト可相心得事

四九七 農商務省伺 明治十七年
十一月十七日

屬員等俸給旅費等ノ受取證書ニ證券印紙貼否ノ儀ハ去ル七月廿三日ノ伺濟ニ依リ致區分來候處邊般檢査院へ御
指令ノ趣ニ候レハ今後當省各局都定備ノ定夫國丁農夫牧夫等ノ給料旅費其他手當報酬人民公用旅費ノ如キ支給
金ニ係ルモノハ受取證書ハ總テ印紙貼用ニ不及候ト相心得可然哉

太政官指令 明治十七年
十二月十二日

伺之通

四九八 新潟縣照會 明治十九年
四月九日

海運營業者アリ荷主ヨリ貨物ノ運送ヲ委託セシトキ別紙一號二號ノ如キ證書ヲ發セリ然ルトキハ該證書ノ性質
ハ專ラ運送ヲ目的トシテ振廻セシモノナレハ設令他ノ性質ヲ含有スルモ之ヲ送狀ノ部類ニ編入スヘキ又ハ其
運送ヲ目的トスルモ貨物到達マテノ間ハ該社ハ荷主ニ對スル預リ主ナレハ之ヲ預證ノ部類ニ編入スヘキヤ

大藏省主稅局回答 明治十九年
四月十九日

回漕營業者ヨリ發スル所ノ稅荷證書印紙貼用ノ儀ハ其性質効用全ク送狀ト認メ取扱フヘシ

四五〇

四九九 愛知縣伺 明治十九年
四月廿九日

茲ニ本縣開屋敷ノ者アリ自己ノ店舖ニ於テ本縣仲買人ヨリ本縣購求ノ際其品位ヲ鑑定シ價格相場ヲ約定ノ上其
價格等差約ナカラシメシメ買主ニ於テ一ノ帳簿ヲ製シ其初丁ニ直段決定ノ上ハ賣主ノ自筆ヲ以テ本縣ノ種目
及直段ヲ記載シ買受人ニ差出シ檢印ヲ受ケタル後ハ何様ノ相違アルモ此帳簿ヲ確證トスヘキ旨ノ契約文書ヲ明
記シ賣渡人數十名ヲシテ漸次記載セシメタル一別紙寫ノ如シ斯ノ如キモノハ索ヨリ甲乙二名ノ間ヲ互交スル通
儀ニアラサレハ一紙證書ニスヘキ性質ノモノト解釋セリ果テ然ラハ假令便宜上ヨリ之ヲ帳簿ニナスモ毎廉ニ賣
渡人ヲシテ相當印紙ヲ貼用スヘキハ當然ナルニ之ヲ貼用セスシテ既ニ授受使用セシモノハ賣主買主トモ證券印
稅規則第二類雜物品買賣證書ノ項ニ據リ同則第十九條ニ準據シ處分スヘキヤ

(別紙)

本縣要附帳

此賣附帳簿ハ直段決定ノ上ハ自筆ヲ以テ種目及直段ヲ記載シ買受人へ差出シ檢印ヲ受ケ通帳ヲ添へ帳簿へ
可差出候事然ル上ハ何様ノ相違有之候トモ此帳簿ノ記載ヲ確證ト可致候者也

年 月 日

某村

何某印

一長九反

○打付圓ニ付二反六步替

一買受人ノ檢印

同人印

打付圓ニ付二反七步五厘替(賣印ナキモノモアリ)

右正ニ費附候也

シノ部

(以下三百三條附込アリ人員四十八人ナリ)

大藏省指令 明治十九年 五月六日

同之類稅則第三類第五項ノ諸物品賣買證文ヲ便宜ノ爲メニ豫メ帳簿トナス者ハ其附込見積金高ニ隨ヒ帳簿主ニ於テ使用以前相當印紙ヲ貼用セシムヘシ

但印紙不貼用ニテ使用セシモノ處分ノ儀ハ申出ノ通

五〇〇 神奈川縣照會 明治十九年 五月十九日

本月十八日官報中證券印紙貼用方ノ儀ニ付愛知縣ヨリノ伺ニ對スル指令ヲ閱スルニ證券印紙稅規則第三類第五項諸物品賣買證文ヲ便宜ノ爲メ豫メ帳簿トナスモノハ其附込見積金高ニ隨ヒ帳簿主ニ於テ使用以前相當印紙ヲ貼用セシムヘシトアリ就テハ客歲五月二日本縣電報伺(證券印紙稅規則中第一類第三類ノ證券ヲ帳簿トナン數人ノ分ヲ附込トモノハ同稅則第三條ニ準據スヘキヤ)ニ對スル同月十六日電報御指令(本月二日電報證券印紙稅伺ハ豫メ豫率ニ照シ相當印紙貼用セシムヘシ)ハ自然消滅候儀ナルヤ

大藏省主稅局回答 明治十九年 五月廿二日

本月十八日官報中證券印紙貼用方愛知縣伺并指令掲載アルニ付貴縣客年五月二日電報伺ニ對スル指令消滅云々了承右ハ愛知縣ヘノ指令ハ第三類ノ證券ニシテ同項同稅率ノモノニ限リ附込見積金高ニ隨ヒ使用以前相當印紙貼用セシムヘシトノ旨趣ニアリ就テハ昨年五月二日電報電報伺ニ對スル指令中前件旨趣ニ抵觸スル處文ハ自ラ消滅シタル儀ナリ

五〇一 鹿兒島縣伺 明治二十年 一月十九日

登記簿ト證券印紙トハ矛盾セサル儀ト心得ヘキヤ

大藏省指令 明治二十年 二月一日

申出ノ通

五〇二 靜岡縣實議 明治二十年 四月十二日

證券印紙稅規則取扱備考中規則第二條第一類金高記載ナキ約定證文ノ註解ニ本證券金高ノ全部又ハ幾分ノ返済ヲ伸縮スル證書トアリ又第十七條註解ニ至リ効用ヲ異ニスルモノトハ期限ヲ定メタル借用證文ニ對シ返済期限ヲ伸縮スル證書トアリ而テ返済期限ヲ伸縮スルモノ、如キハ其權利義務ニ於ル甲乙ナキ様思考スルニ一八單ニ一類ニ屬シ一八二類ニ屬スルノ場合アルモノ、如シ果テ然リトセハ齊シク返済期限ヲ伸縮スルモノニシテ其一類トナリ二類トナルノ區分如何ナル場合ニ於テ區分シ得ルヤ

大藏省主稅局回答 明治二十年 四月十六日

證券印紙稅規則取扱備考中第十七條ノ註解ト第一類中金高記載ナキ約定證文トノ註解區別第十七條ハ第二類ノミニ對シ掲ケタルモノニアラス第一類ト第三類ノ證券ヲ總括シタル條ニテ則本條ノ註解ニアル如ク金高ヲ記載セズ單ニ返済期限ノミ伸縮スルモノハ第一類ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用シ又増減シタル其金高ヲ記載シタルモノハ第一類ニ依リ相當印紙ヲ貼用セシムルノ意難ナリ

○判決例

五〇三 明治二十年乙第二百十二號

抑モ舊證券印紙規則及改正同則共一年ヲ限リ印紙ヲ貼用スヘキ帳簿ニ印紙ヲ貼用セサル所爲ハ其一年内ニ在テハ連續犯ニシテ若シ數年連續シテ犯シタル時ハ一年毎ニ其罪ノ組成スヘキモノトス本案被告カ該帳簿明治十七年六月中印紙ヲ貼用セズレテ使用シタルハ舊證券印紙規則ノ下ニ在テ犯シタルモノニ付同規則第三則第一條第一類

シノ部

大坂府平民 喜多 萬治

金錢判取帳ハ附見積金高百圓未満ハ印紙貼用ニ及ハストアルニ依リ被告カ使用シタル帳簿ハ附見積金高百圓以下ナレハ印紙ヲ貼用スヘキモノニ非ス若シ百圓以上ナレハ其賦税ノ高ニ從ヒ違背罪若クハ贓罪ヲ組成スルモノニシテ其科料ノ壹圓九十五錢以下ナルハ違背罪ナルニヨリ檢察官ノ公訴及ヒタルハ明治二十年一月二十日ナルヲ以テ已ニ滿六ヶ月以上経過スルニ因リ治罪法第十一條ニ照シテハ公訴期滿免除ニ係リ而シテ明治十七年七月一日新規則實施後ニ係ル犯則ハ單ニ新規則ニ依リ處斷スヘキモノトス然ルニ原判文上是等必要ノ理由ヲ付セザレハ隨テ疑律ノ適用如何ヲ鑑査スルニ由ナク所謂事實ノ理由ニ不備アル失當ノ裁判ナルニヨリ破毀ノ原由アルモノトス

明治二十年二月二十六日

五〇四 明治十九年乙第千八百八十二號

山梨縣平民 古屋 大作

右大作カ被告事件谷村治安裁判所ニ關ク甲府輕罪裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付明治十九年十一月廿九日甲府輕罪裁判所於テ審理ノ未被告人ハ金高六百圓計帳ノ假約定證書ニ壹錢ノ印紙ヲ貼付シ印紙貳拾五錢不足ノ儘小佐野附外兩名ニ交付セシモノト認メ右所爲ハ假券印稅規則第十九條ニ該ルヲ以テ始審裁判所カ該條ニ照シ脱稅高二十倍ノ罰金ニ處スト旨渡シタルハ相當ナルニ依リ原裁判言渡ヲ認可ストノ終審裁判言渡ヲ爲シタルニ同裁判所檢申補遺三ハ該裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シタル其要旨ハ假券印稅規則第二類第四項ニ金高計帳アル假券ノ契約證書トアルハ其金額ニ對シ直接ニ權利義務ヲ生スル所ノ性質ヲ具有スル契約證書ヲ指實セルモノニシテ假令金高ヲ記載アルモ其金高ニ直接ノ權利義務ヲ生セザル約定書ナルニ在リテハ同則第一類第三項金高計帳ナキ約定書トアルニ同條スヘキモノナリ然ルニ本案被告カ小佐野附外二名ニ對シ差入シタル約定書ノ効力ハ其方法ノ如ク實行スル義務アルモ已ニ權利ノ確實ナル六百圓ノ金高ニ影況ヲ及ボス可キ契約ニアラザレハ該則第一類第三項ニ該當スル證書ニシテ之レニ相當スル證書印紙ノ貼付アルヲ以テ無罪タル者ナルニ原裁判官ハ其證書性質ノ如何ヲ探査セズ只金高ノ記載アルニ依據シ始審裁判官カ同則第二類第四項ニ同條シタルヲ相當トシ之ヲ認可シタルハ假券ニ對シテ不法ノ裁判ト思料スルニ付上告シテ破毀ヲ求ムト論訴スルニ在リ對手人被告大作ハ上告書類ノ送達ヲ受ケタル證書アルモ答辯書提出サズ

大審院於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ審理判決スル左ノ如シ

假券印稅規則第一條第二類ニ左ニ掲クル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ云々其第七項ニ金高計帳アル假券ノ契約證書トアリテ初シクモ金高ヲ記載スル契約證書ヲ受授スルニハ該項ノ金高ニ應ジ印紙ヲ貼付スルモノニシテ其記載ノ金高直接間接ノ關係如何ノ區別ヲ以テ印紙貼用ノ分別アルモノニアラス今原判決ヲ檢スルニ被告ハ明治十九年四月廿日付云々金高六百圓計帳ノ假約定證書ニ壹錢印紙ヲ貼用シタルハ假券印稅規則第二類金高計帳アル假券ノ契約證書金高六百圓以上八百圓未満印稅貳拾六錢トアルニ該當シ貳拾五錢ヲ不足ニ貼用シタルモノト認定ス其證據ハ云々證書印稅規則第十九條ニ照シ脱稅高ノ貳拾倍ノ罰金ニ該リ云々原裁判ヲ認可スルモノナリトアリテ其判定ノ事實タルヤ該規則第一條第二類第七項ニ違ヒタル明カナレハ其證書ノ性質ヲ別ニ探査スルヲ要セザルハ勿論其所爲ニ對シ同則第十九條ヲ適用シ脱稅高二十倍ノ罰金五圓ニ處斷シタル始審裁判ヲ認可セシハ毫モ疑律ニ錯誤アルニ非ラサル而已ナラス如此所爲ヲ該規則第二條第一類第三項ニ同條ス可キモノニアラス又原裁判ノ該則第二類第四項ヲ適用處斷シタルニモアラサルヲ以テ上告論旨ハ一モ其理由ナキモノト判定ス因テ治罪法第四百二十七條ニ照シ該上告ハ棄却スルモノ也

明治二十年一月二十二日

五〇五 明治二十年乙第六十四號

福岡縣士族 立花 親俊

假券印稅規則第一條ニ照シ假券受授ノ當時ニ在テ犯罪ヲ構成スルモノニシテ即時犯ナリ而テ原判文ニ徴シ一件書類ヲ差用スルニ被告親俊カ地所建築賣渡シ定約書ヲ北原仁三郎ト授受シタルハ明治十六年二月四日ニシテ其起訴アリ

シノ部

リタルハ同十九年五月十七日ナルヲ以テ宜シク新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從ヒ處斷セサルヘカラス故ニ被告等ノ所爲ニ對シ刑罰法第五條ニ基キ同第三條ニ依リ新舊法ヲ比照スルニ被告親儉カ所爲ハ舊法ニテハ明治七年第八十一號布告證券印稅規則第二條第一條第三項地所遺棄廢棄金高五百三十圓ノ定額證券ニ對シ貼用シ之ヲ北原仁三郎ニ交付シタルハ同規則第四條第七條ニ依リ減稅高ノ十倍即チ罰金五圓二十錢前同ノ證券ヲ仁三郎ヨリ受取リタルハ同條ニ依リ減稅高ノ五倍即チ罰金三圓六十錢其證券ニ對シ貼用シ受入池末儀三郎ノ印章ヲ以テ消印セシハ即チ罰金七圓ノヲ以テ論シ同規則第八條ニ依リ過料金三十圓以下ニ處スヘキニ該ノ新法ハ明治十七年第十一號布告證券印稅規則第二條第二項金高五百三十圓ノ證券ニ對シ貼用シ之ヲ交付シ并ニ同ノ證券ヲ受取リシ所爲ハ共ニ同第十九條ニ依リ罰金三圓八十錢宛又對シ貼用シ他ノ印ヲ以テ消印セシ證券ヲ交付セシ所爲ハ同第二十條ニ依リ料料金壹圓九十錢ニ對シ貼用シ他ノ印ヲ以テ消印セシハ新法ノ輕ニ從ヒ又之ヲ受取リタルハ舊法ヲ輕トナシ他人ノ印ヲ以テ消印セシ證券ヲ交付セシハ新法ニ從ヒ處斷スヘキモノ又被告治書藏儀三郎親儉カ所爲ハ舊法ハ明治七年第八十一號布告證券印稅規則第四條第九條ニ依リ各貳拾五圓以下ノ罰金過料ニ處ヌヘク新法ハ明治十七年第十一號布告證券印稅規則第二十一條ニ依リ正犯ニ係ル料料罰金ノ半額ニ相當スル料料罰金ニ處ヌヘキニ該當スルモ其刑ハ總テ輕罪以下ノ刑ニ當リ而シテ犯罪ノ日ヨリ起訴アリシ日迄ヲ算スルハ既ニ滿三年餘ヲ經過シ治罪法第十一條ニ照シ公訴期間滿除ヲ得タルモノナルニ原裁判所於テ各罰金料料ニ處シタルハ本院檢察官非常上告曾經ノ如ク所謂法律ニ於テ罰金ヘカラス所爲ヲ罰シタル失當ノ裁判ナリト判定ス因テ治罪法第四百三十五條ニ則リ原裁判ヲ破毀シ直チニ判決スル一左ノ如シ

立花親俊
外三名

右被告等カ所爲ノ事實ハ原裁判所ノ認ムル所ニ據リ前ニ說明スル理由ナルヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ照シ共ニ免罪スルモノ也
明治二十年一月二十九日

五〇六 明治十九年第四百五十九號

凡ソ法律上一年ト稱スルハ曆ニ從フハ普通ノ原則ナレハ明治十七年第十一號布告改正證券印稅規則第二條證券帳簿ノ第一類ノ部ニ金錢判取帳一年以内會簿ニ付印稅貳拾錢トアル其一年ハ年度ノ如何ニ關セス曆ニ從ヒ十二月ヲ以テ稱セシモノナルヤ論ヲ據タサルナリ今原判文ヲ閱スルニ「明治十八年四月開製シタル金錢判取帳ニ證券印紙ヲ貼用セス同年七月ヨリ明治十九年三月マテ九月間之ヲ使用シ」トアリテ此事實ニ據レハ被告ハ金錢判取帳ヲ一年以内無印紙ノ儘使用セシモノトス然レハ改正證券印稅規則第一條第二條第十九條ヲ適用シテ處斷スルニハ宜ク其一年以内ノ稅高即チ貳拾錢ノ罰金四圓ヲ科セサルヘカラス然ルニ原裁判茲ニ出テ本案ノ如ク二年ノ印稅連稅ヲ以テ論シ都合八圓ノ罰金ヲ言渡シタルハ全ク擬律ヲ錯誤セシモノタルニ過キスシテ本件上告論旨ハ乃チ治罪法第四百十條第十項ニ該當スル上告ノ理由アルモノトス
右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判言渡ノ被告カ金錢判取帳ニ證券印紙ヲ貼用セスシテ使用セシ所爲ニ關スル部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス一左ノ如シ

小川 元次郎

原裁判所カ認メン事實ニ據リ被告カ金錢判取帳ニ證券印紙ヲ貼用セスシテ使用セシ所爲ヲ刑罰法第五條ニ基キ明治十七年第十一號布告改正證券印稅規則第一條第二條第十九條ニ照シ其一年以内即チ貳拾錢ノ印稅ヲ連稅セシモノナルヲ以テ其稅高貳拾錢ノ貳拾倍罰金四圓ニ處スル者也

明治二十年四月四日

五〇七 明治二十年乙第七百七十四號

シノ部

三重縣平民 高山房吉

八百三十九

右被告事件ニ對シ明治二十年九月十四日安濃津縣裁判所ニ於テ被告カ明治二十年一月ヨリ同七月マテ無印紙ノ
 備置リ帳ト題スル帳簿ヲ使用シタルハ判取帳ト其性質ヲ異ニシ取引先ニ於テ請取リタル金額ヲ點檢スル爲メ金額
 渡主ヲシテ其渡高ヲ記入押印セシメタル事實ニシテ法律ニ正條ナキ所爲ナルヲ以テ刑法第二條ニ照シ處分スヘキ
 者トシ無罪ヲ宣渡シタル裁判ニ對シ原裁判所檢事補近藤兵三郎ハ上告ヲナシタリ其被告ハ本案被告カ無印紙ノ備
 置使用シタル帳簿ト題スル帳簿ハ金額渡主ヲシテ其渡高ヲ記入押印セシメタル者ニシテ現ニ右帳簿ヲシテ財産授受
 ヲ證明スルニ用ヒタルヲ認メナカラ法律ニ正條ナシトシ無罪ヲ宣渡タルハ罰スヘキ所爲ヲ罰セザル越權ノ處分
 ナリトス抑右帳簿ハ其記載スル所部常ノ判取帳トハ殊別ナリト雖モ畢竟其効用ニ至テハ他日金額ノ授受ヲ證明スル
 者モ金額判取帳ニ異ナラス加之證券印稅規則第一條ニ曰ク凡財產ノ授受及契約ノ證明ニ用フル證券帳簿ハ此規則
 ニ備ヒ印紙ヲ貼用スヘシ云々又同規則第三條ニ曰ク凡財產ノ授受及契約ノ證明ニ用フル證券帳簿ハ此規則
 ス稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ云々トアルニ於テハ同規則第二條第一類ノ範圍内ノモノト云ハサルヲ得然
 ラハ則チ被告カ使用シタル帳簿ト金額判取帳ト其効用ヲ同フスルモノニ付證券印稅規則第二條第一類ニ從ヒ一年
 以內一冊ニ付印稅二十錢ヲ貼用セザルヘカラス然ルニ無印紙ノ備置使用シタルハ同規則第十九條ニ依リ稅高二十倍
 罰金即四圓ヲ科セザルヲ得サルヤ明ナリ故ニ原裁判ノ全部ヲ破毀シ相當ノ判決ヲ望ムト云フニ在リ
 對手人被告房吉ハ答辯書ヲ提出ス

大審院於テ治罪法第四百二十五條ノ法式ヲ履行シ判決スルノ左ノ如シ

上告ニ因リ原判決ヲ查スルニ被告カ無印紙ニテ使用シタル帳簿ト題スル帳簿ハ金額渡主ヲシテ其渡高ヲ記入押
 印セシメタル者ニシテ證券印稅規則ニ所謂判取帳トハ其性質ヲ異ニスル者トス抑金額判取帳トハ賣買ノ物件又ハ
 金額等ヲ交付シタル帳簿トシテ其受取人ニ調印セシムル處ノ簿冊ニシテ契約證書又ハ受取書ニ代用スヘキ性質ノモ
 ノナレハ證券ノ一種ナルヲ以テ印稅規則ノ支配ヲ受ケシムル者トス然ルニ被告カ使用シタル帳簿ハ契約書又ハ受
 取書ニ代用スヘキ者ニ非スシテ却テ渡主カ引渡渡高ヲ筆記シタル者ナルヲ以テ證券印稅規則ノ支配ヲ受ケヘキ
 者ニ非ストス故ニ原裁判所於テ前記ノ事實ヲ明示シ無罪ノ宣渡ヲナシタルハ適法ノ裁判ニシテ上告ノ理由ナキ者

トス依テ治罪法第四百二十七條ニ則リ本案上告ハ之ヲ棄却スル者也
 明治二十年十月十三日

五〇八 明治二十年乙第七百九十六號

三重縣平民 若林喜七

證券印稅規則第二條第一類第二十項所謂金額判取帳ナルモノハ其關聯者於テ數人ニ對シ金額物品ノ受取ヲ記入セ
 シメ以テ他日ノ證ニ供スル爲メニ使用スル帳簿ニシテ即チ金額物品ヲ交付スルモノ之ヲ關聯スルモノナレハ彼ノ
 現品金額ヲ收受セルモノヨリ辨出セシ所ノ請取書トハ其性質ヲ異ニスルハ勿論假令帳簿表題ノ如何ニ拘ハラズ其
 實效判取帳ト効用ヲ同クスルニ於テハ規則上營業ノ爲メニ使用セルト否トノ區別ナキヲ以テ共ニ相當印紙ヲ貼用
 セサルヘカラス然ルニ本案上告被告タル前記ノ如ク單ニ日用諸物現金買取ノ都度金額ノ請取書ヲ取置クノ煩ヲ
 厭ヒ便宜爲メ關聯使用シ書ヲ營業ニ關セザルモノナレハ證券印稅規則ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラスト云
 フニアレモ原裁判官カ請取ノ證憑ヲ採擇シ本件帳簿ハ其表題ノ如何ニ關セス已ニ金額ノ請取ヲ記入セシメ實際金
 錢判取帳ナルニ相當印紙ヲ貼用セシメテ使用シタルモノト認定シテハ別ニ營業上ニ使用云々ノ事ヲ掲ケサルモ
 理由ノ不備ト爲シ得サルモノナレハ前記ノ如ク到底證券印稅規則違犯タルハ免カレサルモノトス故ニ被告於テ
 曠々論駁スルモノハ帳簿ノ性質ヲ誤解シタルト一ハ事實判定ノ當否ヲ非難スルニ外ナラスシテ上告適法ノ理由ハ
 之レナキモノト判定ス

明治二十年十月二十七日

五〇九 明治十九年第一千二百二十七號

栃木縣平民 内田 國次郎
 同縣平民 内田 龍五郎

シノ部

上等第一論點ハ證券印稅規則第十九條ニ所謂科料罰金ハ其證券運帶ノ權者於テ其脱税高二十倍ノ金額ヲ運帶シテ負擔ス可キ云々分疏スルニアレモ抑モ各種ノ證券ニ印紙ヲ貼用スルカ如キハ荷クモ其證券ニ連署スル者ハ各自ニ爲ス可キノ義務ヲ命シタルモノナレハ其之ヲ爲サ、ル場合ニ於テハ各自ニ其刑ヲ科ス可キハ固ヨリ當然ナリトス故ニ原裁判所於テ各自ニ其刑ヲ科シタル最モ相當ニシテ擬律錯誤ナリト云フヲ得ヌ又第二論點ハ同規則第二十條ニ所謂減輕トハ酌量減輕ノミヲ指示シタル云々既告スレモ該條ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕云々トアレハ其酌量ト自管トニ別ナキハ多辨ヲ要セスシテ明カナレハ原判官於テ該條ヲ適用シテ自管減輕ヲ與ヘサルハ至當ニシテ擬律ノ錯誤ニ非ラヌトス之ヲ要スルニ被告兩名カ上告ハ法律ヲ誤解シ毫モ瑕疵ナキ裁判ニ對シ漫リニ非理ヲ訴フルニ過サレハ採用スルヲ得ヌ因テ治罪法第四百二十七條ニ則リ本按上告ハ之ヲ棄却スル者也

明治十九年十一月廿九日

五〇〇 明治十九年第四百二十九號

熊本縣平民 濱津 又吉

抑モ貼用ノ印紙ニ消印ヲ爲サシムルハ其印紙ヲ再ヒ貼用スルヲ防クノ意ニ出タルモノナレハ證券印稅規則第二十條ニ所謂印稅高十倍トハ即チ現ニ貼用シアル印紙ノ無消印ニ係ル稅高ノ十倍ヲ指稱シタルモノナルヤ明カナリ然レハ本案被告カ印紙ニ消印セサル所爲ニ付テハ其現ニ貼用セル印紙ノ稅高即チ壹錢ノ十倍ノ科料ニ處セサルヘカラス然ルニ原裁判所ニ於テ帳簿ニ貼用スヘキ印紙ノ總高ノ十倍罰金貳圓ヲ言渡シタルハ上告論旨ノ如ク不法ニシテ即チ治罪法第四百十條第十項ニ該當スル上告ノ理由アルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判言渡ノ上告ニ係ル部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲スノ如ク

前ニ判明スルカ如クナルヲ以テ被告カ印紙ニ消印ヲ爲サ、リシ所爲ヲ明治十七年拾壹號布告證券印稅規則第二

十條ニ照シ其現ニ貼用セル印紙ノ稅高即チ壹錢ノ拾倍拾錢ノ科料ニ處スル者也

明治十九年十一月二十日

五一〇 明治二十一年乙第三三二號

東京府平民 山崎喜左衛門

外三名

右山崎喜左衛門外三名カ證券印稅規則就犯罪事件ニ付明治二十一年三月十四日東京縣裁判所ニ於テ被告山崎喜左衛門池田亥之助ハ明治二十一年二月廿六日證券印稅章圖ヲ貼用スヘキ地所家屋土藏醬油藏並ニ醬油製造諸器械等ヲ代金八千圓ヲ以テ賣買スヘキ爲取換約定證書ヘ何レモ證券印稅八十錢不足ニ貼用セシ其證書一通ヲ北原正三郎ヨリ受取リ一通ヲ同人ヘ交付シ證券印稅規則第二條第二類ヲ犯シ其始末ヲ同年三月三日本縣警察署ヘ自首シ被告關勇輔ハ明治二十一年二月廿六日北原正三郎ヨリ山崎喜左衛門池田亥之助ヘ交付シタル前記ノ證券印稅八十錢不足ニ貼用セシ金八千圓ヲ以テ賣買スヘキ地所家屋等ノ約定證書ヘ其事實ヲ證明スル爲メ立會人トシテ記名押印シ之ヲ法律ニ照スニ喜左衛門亥之助ノ所爲ハ證券印稅規則第十九條ニ該ル關勇輔ノ所爲ハ同規則第二十一條ニ該ル而テ喜左衛門亥之助ハ自首スルモ同規則第二十六條ニ依リ減輕ノ例ヲ用ヒス依テ山崎喜左衛門池田亥之助ヲ脫稅高八十錢ノ二十倍金拾六圓宛約定證書二通分ノ罰金三十二圓宛ニ處シ關勇輔ヲ約定證書一通ノ脫稅高八十錢ノ二十倍金十六圓ノ半額即チ罰金八圓ニ處スト言渡シ被告北原正三郎ニ對シテハ明治二十一年三月廿二日同裁判所ニ於テ被告人ハ明治二十一年二月廿六日證券印稅章圖ヲ貼用スヘキ地所家屋土藏醬油藏並ニ醬油製造諸器械等ヲ代金八千圓ニテ賣買スヘキ爲取換約定證書ヘ何レモ證券印稅八十錢ヲ不足ニ貼用セシ其證書一通ヲ山崎喜左衛門池田亥之助ヨリ受取リ一通ヲ其兩名ヘ交付シ右所爲ハ證券印稅規則第二條第二類及ヒ同規則第十六條ヲ犯シタルモノニ付同規則第十九條ニ照シ處罰スヘキモノトス依テ被告人ヲ脫稅高八十錢ノ二十倍金拾六圓宛約定證書二通分ノ罰金三十二圓ニ處スト言渡シタルニ被告四名ハ上告ヲ爲セリ其喜左衛門亥之助カ懸意ノ要領ハ印稅規則犯ノ如キ純然タル

規則犯ハ直ニ普通一一般ノ法則ヲ適用シ得ヘキモノニアラス之レ他ナシ印稅規則ノ設ケアル所以ハ一ニ稅稅ヲ防クノ方法ニシテ稅稅保護ノ趣意ニ出テタルニ外ナラサルヲ以テナリ此稅稅ヲ防キ稅稅ヲ保護スル規則ニシテ尚ホ刑注第百四條ヲ適用スルモノトセンカ其高遠ニ思惟スヘカヲサルノ結果ヲ生セン今一例ヲ舉ケテ之ヲ證明セン千人連署シテ一通ノ證書ヲ以テ金員ヲ借受クルニ其印稅ノ貼用ニ不足アリシモノトセンカ此場合ニ於テ各自ニ罪ヲ科スルモノトセハ其罰金額ハ非常ノ高額ニ至ル豈如此智理ノ法アランヤ夫レ此千人中一人ヲ發見シ相當印紙ヲ加貼シ清印セバ他ノ九百九十九人ノ罰則ノ責ハ消滅スルヤ論ヲ俟タス然ラハ此責任ハ連署ナルヤ明カナリ既ニ其實ニシテ連署ナレハ其罰モ亦連署ナラサルヘカラス故ニ曰ク本案ノ如キ規則犯ハ普通法ト異ナリト之レ即チ上告人カ印稅規則犯ハ性質上刑注第百四條ヲ適用スヘカラスト云フ所以ナリ以上ノ理由ニ付上告人連署シテ三十二圓ノ罰金ニ處セラルヘキモノト思料シ破毀ヲ求ムト被告關勇輔カ惡意ノ要領ハ原判文ヲ閱スルニ(相方ノ間ニ周旋シ保體人ニ立タルモノトス)トノ首越ニシテ(證券印稅規則第二十一條ニ依リ罰金八圓ニ處ス云々)ト言渡サレタルモ其證書ニ微スルハ(立會人)ト明記アリ又同被告タル山崎喜左衛門及池田亥之助代人金森由太郎カ公廷ニ於テ爲セル陳述ニ依レハ賣買者互双ノ權利義務ニ關係ナキヲ證言セリ因テ證券印稅規則第二十一條ヲ按スルニ該條ハ爲約者互双間ニ立チ其權利義務ノアル處ヲ保タシムル爲メ證人トナリタル場合ニ於テ罰スル條項ト信ス奈トナレハ證人ノ性質ハ第一ノ義務ニ從ヒ第二ノ義務ノ發生スルモノナレハナリ今ヤ本案事件ノ如キハ立會人ニシテ證人保體ノ性質ヲ備ヘタルモノニアラサルハ(立會人)トアル而已ナラス山崎喜左衛門及金森由太郎カ公廷ノ陳述ニ依テモ分明ナルニ拘ハラヌ證券印稅規則第二十一條ニ據リ罰金八圓ニ處セラレタルハ擬律ノ錯誤ナリ

大審院ニ於テ治罪法第百二十五條ノ定式ヲ履行シ之ヲ審按スルニ被告山崎喜左衛門池田亥之助カ上告ノ趣旨ハ前掲ノ如シト雖モ刑注第五條第三項ニ若シ他ノ法律規則ニ於テ刑罰ニ據ケタル者ハ此刑法ノ總則ニ從フトアリテ證券印稅規則ニハ別ニ總則ノ揭示アラサルヲ以テ同則第二十六條ニ據ケタル場合ノ外ハ刑法ノ總則ニ從ハサルヲ得サルヤ勿論ナリ然レハ刑注第百四條ヲ適用シ得ルヤ亦論ヲ俟タサル處ナルヲ以テ原裁判官カ刑注第百四條ニ依リ被告山崎喜左衛門池田亥之助ヲ各自處斷シタルハ不法ナリトノ論旨ハ其原由ナキモノトス又原判文ニ據ル

ニ關勇輔ノ所爲ハ事實ヲ證明スル爲メ立會人トシテ記名押印シタルト云フニ在レハ乃チ證明ノ責任アルモノト判定シタル事實ニシテ證人ナリト云ハサルヲ得サルニ付同規則第二十一條ニ依リ處分スヘキモノニアラストノ上告旨趣モ亦相立タサルモノトス

明治二十一年四月三十日

五二二 明治二十一年之第三三七號

神奈川縣平民 守谷 富藏 外四名

證券印稅規則第二條第一類第十九項ニ所謂金錢諸物品通帳トハ金錢諸物品ノ渡主又ハ賣主等自ラ調製シ之ヲ受取主又ハ買主ニ交付シ置キ其金錢諸物品ヲ相渡シ又ハ賣却シタル度毎ニ渡主又ハ賣主ニ於テ自ラ其帳簿ニ記入シ再ヒ之ヲ受取主又ハ買主ニ交付シ金錢諸物品ノ授受ハ勿論其物品ノ代價支拂モ此帳簿ニ依テナスモノトス故ニ此帳簿ニ依リ渡主賣主ハ金錢ヲ渡シタルト又ハ賣渡シタルトヲ證明シ又受取主買主ニ在テハ其受取リタル高又ハ代價ヲ支拂ヒタル等ノ事實ヲ證明スルノ具ニ供スル帳簿ナルヲ以テ同第一條ニ基キ印紙ヲ貼用シタルニアラサレハ使用スルノ時許サ、ル所以ナリ本案富藏カ無印紙ノ僅使用シタリト云フ買物通帳ト應スル帳簿ハ買主被告富藏自ラ調製シ賣主タル被告武吉外三名ヲシテ其物品ヲ賣却スル毎ニ物品ト代金トヲ記入セシメタルモノニシテ即チ賣主等カ調製シテ買主被告富藏ニ交付シタルニアラサレハ右ニ所謂金錢諸物品通帳トハ其性質ヲ異ニスルヤ勿論ナレハ法律上罰スヘキ限ニアラストス因テ原檢察官カ被告等ヲ證券印稅規則違犯者ナリトノ上告論旨ハ相立タサルモノト判定スルヲ以テ治罪法第百二十七條ニ則リ本案上告ハ之ヲ棄却スルモノ也

明治二十一年五月三十一日

(八二) 商標條例 明治十七年六月 第十九號布告

商標條例別冊ノ通制定シ明治十七年十月一日ヨリ施行ス

シノ部

第八二〇、二二八
九二〇、二二條

第十四條 商標ノ登録ニ係ル願書ニハ左ノ區別ニ從ヒ證券印紙ヲ貼用ス可シ(明治二十年四月廿六日法律第六十號)

一 商標ノ登録、登錄商標ノ兼用轉用又ハ改正及登錄證ノ再渡 金壹圓

二 登錄商標ノ滿期續用 金五圓

登錄ノ證ヲ受ケル者ハ左ノ區別ニ從ヒ登錄料ヲ納ム可シ

一 商標ノ登録 金拾圓

二 登錄商標兼用轉用又ハ改正ノ登録 金五圓

三 登錄商標ノ讓與又ハ分與ノ登録 金五圓

第十四條 商標ノ登録ヲ願出ツル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ但願書ヲ却下スルトキハ之ヲ返付ス

一 商標一個ニ付金拾圓但一商標ヲ數種ノ商品ニ兼用若クハ轉用スル者ハ其商品一種コトニ金五圓ヲ加フ

二 商標ノ讓與分與又ハ改正ヲ願出ツル者及滿期續用ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金五圓

三 登錄證ノ再渡ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金壹圓

第十五條 登錄商標主其專用權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ并要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第十六條 登錄商標ヲ偽造シテ使用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス其盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第八二〇、二二八
九二〇、二二條

第十七條 登錄商標ニ相紛ラハシキ商標ヲ造リテ使用シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十八條 第十六條第十七條ノ違犯ニ係ル商標ヲ附シタル商品ヲ情ヲ知テ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第十六條第十七條第十八條ノ場合ニ於テハ仍ホ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカラサルモノハ商品ヲ破毀セシム

第二十條 詐偽ノ所爲ヲ以テ商標ノ登録ヲ得及商標ノ登録ヲ詐稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二十一條 第六條第七條ノ屆出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十三條 第十六條ヨリ第十八條ニ至ルノ罪ハ登錄商標主ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十四條 登錄商標主告訴ヲ爲シタルトキハ裁判官ニ於テ假ニ其告訴ニ係ル商標ヲ附シタル商品ノ發賣ヲ停止スルコトヲ得

附則 本條例頒布以前使用スル商標ヲ專用セント欲スル者ハ本條例施行ノ日ヨリ六月間ニ於テ其登録ヲ願出ツ可シ其願書ハ本條例施行ノ日ヨリ八月間之ヲ留置其間ニ之ト抵觸ス可キ願書到達セザレハ之ヲ登録ス可シ

シノ部

第八二〇、二二八
九二〇、二二條

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ専用センカ爲メ登録ヲ願出ツル者アリ抵觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラヌ農商務卿ニ於テ其商標ノ使用最久シキト認定スルモノヲ登録シテ其他ヲ却下ス可シ

本條例第三條ニ依リ處分ス可キ願書ト雖モ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置附則第一項ニ依リ願出ツルモノニ抵觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラヌ之ヲ却下ス可シ

前二項ノ場合ニ於テ願書ヲ却下スルトキハ其手数料ヲ返付ス

本條例頒布以前使用スル商標ニシテ現ニ其同業者間ニ専用ノ効アルモノハ商業上慣用セル目印ト雖モ其登録ヲ願出ルコトヲ得(明治十八年一月第四號布告ヲ以テ此項追加)

●參照

○關係法令

五二三 太政官第拾三號布達 明治十七年六月

今般商標條例制定候ニ付商標登錄願手續別冊ノ通相定ム

(別冊)

商標登錄願手續

第一條 商標ニ關スル願書届書ハ都テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出ス可シ

第二條 商標ノ登録ヲ願出ツルトキハ商標見本五枚ヲ添へ願書一通明細書二通ヲ差出ス可シ(明治二十年五月農務省令第二號ヲ以テ改正)

第三條 一箇ノ商標ヲ二種以上ノ商品ニ用ヒンカ爲メ又ハ二箇以上ノ商標ヲ一種ノ商品ニ用ヒンカ爲メ登録ヲ願出ツルトキハ其商品一種又ハ商標一箇毎ニ各別ノ願書及ヒ明細書ヲ差出ス可シ

第四條 條例第七條ニ據リ相續ヲ届出ツルトキ其死亡後相續ニ係ル者ハ相續者并身元詳ナル証人二名以上連署シ其生存中ノ相續ニ係ル者ハ登録商標主相續者連署ス可シ

第五條 條例第八條ニ據リ商標ノ讓與分與ヲ願出ツルトキハ讓主ヨリ約定書本書ヲ添へ願書一通ヲ差出ス可シ

其登録ヲ經タルトキハ約定書本書ニ登録済ノ證印ヲ捺シ之ヲ下付ス可シ(明治二十年農務省令第二號ヲ以テ本條各項改正)

第六條 條例第九條ニ據リ登録商標ノ轉用兼用及改正ヲ願出ツルトキハ第二條ニ準據ス可シ

條例第十條第十一條ニ據リ商標ノ續用及登録證ノ再渡ヲ願出ツルトキハ願書一通ヲ差出ス可シ(明治二十年五月農務省令第二號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第七條 商標ノ登録ヲ願出ル者及登録商標ノ兼用轉用改正讓與又ハ分與ヲ願出ル者ハ其登録ヲ届届ヘキ旨ノ通知ヲ得タル日ヨリ三十日以内ニ其登録料ヲ納ム可シ此期限内ニ登録料ヲ納メサルハ其出願無効タル可シ但已ヲ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルトキハ此限ニアラス(明治二十年農務省令第二號ヲ以テ改正)

第八條 登錄願書ヲ却下スルトキハ其理由ヲ指示ス可シ

第九條 商標登錄願書ノ訂正ニ關シ違フ受ケタルトキハ其日ヨリ十五日以内ニ明細書ノ訂正ニ關シ違フ受ケタルトキハ其日附ヨリ三箇月以内ニ訂正書又ハ答辨書ヲ出ヌ可シ此期限内ニ之ヲ出サントキハ其出願無効タル可シ但已ヲ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルトキハ此限ニアラス(明治二十年農商務省令第二號ヲ以テ改正)

第十條 商標登錄願人ハ專賣特許局ノ達ニ隨ヒ其商標ノ木版又ハ鉛版ヲ差出ス可シ其達ノ日附ヨリ六箇月以内ニ之ヲ差出サントキハ其出願無効タル可シ但已ヲ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルトキハ此限ニアラス(明治二十年五月農務省令第二號ヲ以テ改正)

第十一條 登錄商標ヲ使用スル商品ノ種類ヲ定ムルコト左ノ如シ但シ願人ニ於テ其種類ヲ判知シ難キモノハ農商務省ニ於テ之ヲ判定ス可シ

第十二條 商標ニ關スル諸願書式及明細書文例等ハ別ニ告示ス可シ(明治二十年五月農務省令第二號ヲ以テ本項追加)

商品ノ種類

第一種

化學品及藥劑

酸類 鹽類「アルカリ」漂白粉 護膜 樹脂 膠燐 石礆 酒精「グリセリン」「キナミン」「ホルヒネ」丁幾劑 舍利別 煎劑 丸藥 膏藥 藥油 麝香 丁子

第二種 等

染料及顔料

藍玉 藍靛 紫根 紅朱丹 綠青 燒青 洋靛 白粉 胡粉 藤黃等

第三種

塗料

漆 假漆「ペンキ」澁 批墨等

第四種

香料及燻料

香油 髮膏 香袋 香水 炷香 線香 煉香等

第五種

金屬及其半加工品

銑鐵 鍛鐵 鋼鐵 條鐵 鐵葉 鐵板 銅 銅板 銅鐵線 鉛 鉛板 亞鉛 亞鉛板 錫 合金等

第六種

金屬ノ製品

鑄物 打物 彫鏤品及編物等

第七種

シノ部

利器及尖刃器
錄 鋸 鑿 錐 鑿 針 釘 剪刀 小刀 剃刀 庖丁 齧嘴等

第八種

貴金屬及其製品(アルミニウム金ニッケル銀ノ製品モ此中ニ屬ス)
黃金 銀 四分一 紫銅其他貴金屬ノ合金鍍品及彫鍍品等

第九種

珠寶及其彫鍍品
珊瑚珠 眞珠 瑪瑙 水晶 黃玉 碧玉等及其攪造品

第十種

鐵物類(但石炭ハ第五十一種ニ屬ス)

第十一種

石材及其製品并彫鍍品
石板石 大理石 砥石 石器等及其攪造品

第十二種

漆喰類
漆喰「セメント」石膏等

第十三種

陶磁器類
諸種ノ陶磁器 土器 埴埴 瓦 煉化石等

第十四種

七寶燒
玻璃及其製品

第十五種

玻璃壘 玻璃管 彩色玻璃等

第十六種

機械類
紡績機 裁縫機 製糖機 印刷機械其他諸製造機械 蒸氣ノ機關及罐等

第十七種

農工器具
鋤 鍬 唐箕 熊手 釘拔 鐵鎚 繩墨等

第十八種

學術上ノ器械類
理化學 醫術及測量等ノ器械

第十九種

度量權衡
第二十種

シノ部

運送用ノ車類

荷車 馬車 人力車 自轉車等

第二十一種

樂器

琴 三味線 胡弓 笛等

第二十二種

時計及其付屬品

第二十三種

銃砲 彈丸 火藥 烟火類

第二十四種

蠶種紙 繭

第二十五種

真綿及木棉綿

第二十六種

生絲 絹絲及天蠶絲(琴絲 金絲 銀絲等)此中ニ屬ス)

第二十七種

綿絲

第二十八種

毛絲

第二十九種

麻絲

第三十種

絹織物

第三十一種

木綿織物

第三十二種

毛織物

第三十三種

麻織物

第三十四種

絹綿麻毛外ノ織物及各種ノ交織物

第三十五種

絲類ノ編物及組物

第三十六種

レース 打紐 網等

被服

シノ部

第三十七種 諸種ノ衣服 織物製帽子 手套 足袋 織物製雨衣 袴 目利安等

釀造物及飲料

第三十八種 諸種ノ酒 酢 醬油 蜜柑水 曹達水等

砂糖

第三十九種 諸種ノ砂糖 糖蜜 蜂蜜等

菓子及麵包類

第四十種 干菓子 蒸菓子 掛ヶ物 西洋菓子 餡 砂糖漬等

茶及咖啡類

第四十一種

煙草類

第四十二種

穀菜種子及菓物類

第四十三種 五穀 蔬菜 草 菓實 種子 根球等

四百五十八

挽粉澱粉及其製品

第四十四種 諸種ノ挽粉 澱粉 麩類 湯波 蒟蒻 凍豆腐 凍蒟蒻等

味噌・醬物及漬物類

第四十五種

肉類海草ノ貯藏食品

第四十六種 鰹節 鰯 乾鮑 海苔 昆布 佃煮 罐詰 雲丹諸種ノ鹹製品等

牛乳製品

第四十七種 凝乳 乳油 乳餅 乳粉等

煙具及袋物

第四十八種 諸種ノ煙管 煙袋 煙管筒 懷中物等

紙及其製品

第四十九種 諸種ノ紙 色紙 短冊 摺草紙 油紙 漉紙 書簡筒 張文匣 一閑張 元結等

筆墨類

シノ部

第五十種 筆 墨 朱墨 印肉 墨汁 石筆 鉛筆 洋筆等

皮革及其製品

馬具 草包 文匣 草帶 靴等

第五十一種

燃料

諸種ノ炭 附木 摺附木 燈心等

第五十二種

油蠟類

諸種ノ油 蠟 蠟燭 脂肪等

第五十三種

肥料

干鰯 餅粕 油粕 骨粉等

第五十四種

木竹材

第五十五種

木竹藤製品及其漆塗蒔繪品類

指物 挽物 曲物 桶類 編物 組物等

第五十六種

角甲牙類ノ製品

第五十七種

藁及草ノ製品

疊表 筵 編笠 繩 麥藁細工等

第五十八種

傘杖及履物

諸種ノ傘 杖 下駄 草履 鼻緒等

第五十九種

扇子及團扇

第六十種

提燈及「ランプ」類

第六十一種

齒磨及洗粉

第六十二種

刷子類

第六十三種

玩具類

シノ部

花簪 鞠 碁 將棋 人形 獨樂 楊弓 押繪 造花 骨牌等

第六十四種

錦繪及寫真類

第六十五種

書籍新聞紙雜誌類

○同指令

五一四 京都府伺

明治十七年 六月三十日

商標條例第三條ニ依リ商標登録願出タル際同一又ハ相紛シキ商標ヲ同一種類ニ専用センコトヲ願出ルモノアリ。抵觸スルハ其願書日附ノ同シキ者ハ條例第三條ニ依リ共ニ之ヲ却下セラルヘキ成規ニシテ之ヲ再ヒ願出ルコトヲ得。ヤ否ニ至テハ他ニ明文無之聊カ疑議相生候右ハ一旦却下セラレタル商標ハ再度登録願出ルコトヲ得サル儀ニ候哉。

農商務省指令 明治十七年 七月九日

伺之趣同日付ナルヲ以テ共ニ却下サレタル商標ト雖モ双方熟儀ノ上其中一人ヨリ再願スルヲ得ヘキ儀ト可相心得事。

五一五 島根縣伺

明治十七年 七月十二日

今般商標條例并商標登録願手續制定相成候處該條例并手續中疑義ニ涉ル件左ニ相伺候也。

第一條 該條例第五條第二項ニ依ルニ地名ノ名家號會社名ノミヲ以テスル者又ハ商標普通ノ名稱或ハ内外國ノ旗章ノミヲ以テスル者ハ登録ヲ願出ル能ハサル儀ニ候處内外國ノ旗章ニ商標普通ノ名稱ヲ加ヘ又ハ地名人名號會社名ニ商標名稱ヲ加フル如キハ登録ヲ願出ルコトヲ得ヘキ筋ニ可有之哉。

第二條 右同項中商標普通ノ名稱トハ産出地製造者ノ異ナルニ關ハラヌ同種ノモノニハ普ク通用スル名稱ヲ指

ス儀ニシテ例ヘハ河内木綿雲州人參ト云フカ如キ一地方ノ物産ニ固有スル名稱ハ此限外ニ候哉又家傳ノ秘法若シクハ自家ノ發明ニヨリ製造スル商標ニシテ特ニ固有ノ名稱ヲ付シ同種類ノモノト雖モ他家ノ製造ニ用イサルモノ、如キハ商標トシテ登録ヲ願出ツルヲ得ヘキ儀ニ候哉。

第三條 數人組合ヲ設ケ同一種類ノ商標ニ對シ同一ノ商標ヲ用フルノ約束ヲ結ビタルモノハ其登録ヲ願出ツルコトヲ得ヘキ儀ニ候哉又別ニ組合ヲ設ケサルモ尚ホ數人連署シテ出願シ得ヘキ筋ニ候哉。

第四條 該條例第八條ニ分取トアルハ數個ノ商標ヲ専用スルノ權ヲ有スルモノ其内一個若クハ數個ノ商標ヲ他人ニ讓與スルコトヲ指ス儀ニ可有之哉又ハ商標ノ専用權ヲ得タルモノ自ラ用フル商標ヲ他人ニモ亦之ヲ使用セシムル儀ニ候哉。

第五條 登録願手續第四條乃至第七條ノ場合ニ於テモ一個ノ商標ヲ二種以上ノ商標ニ用ヒ又ハ二個以上ノ商標ヲ一種ノ商標ニ用フルルハ尚ホ第三條ニ準シ各別ノ願書并明細書ヲ差出スヘキ筋ニ候哉。

第六條 登録願手續第九條ニヨルニ商標ノ彩色ハ適宜變換スルコトヲ得ヘキ儀ニ候處紙片ニ押捺シテ商品ニ貼用スル目的ヲ以テ登録ヲ得タルモノ場合ニヨリ之ヲ縮印トシテ使用スルカ如キモ尚ホ商標主ノ自由ニ任セラルヘキ儀ニ候哉。

農商務省指令 明治十七年 八月二日

伺之趣左ト通可相心得事。

第一條 願出ツルコトヲ得ス。

第二條 一地方ノ物産ニ固有スル名稱ト雖モ亦商標普通ノ名稱ノ限内トス後段ハ伺ノ通。

第三條 組合ニ於テ販賣スル商品ニ商標ヲ専用セント欲スルハ其組合員ヨリ登録ヲ願出ツヘシ後段ハ願出ツルコトヲ得ス。

第四條 後段ノ通。

シノ部

第五條 何之處

第六條 用方ハ明細書ニ記シテ用方ト異ナルヲ得ス

五二六 德島縣伺 明治十七年七月十八日

本年第十九號御布告商標條例中左記ノ項々疑義ヲ生シ候ニ付何分ノ御指揮相成度候也

一商標條例第三條第二項ノ末其日附同シキ者ハ共ニ之ヲ却下スヘシトアリ候テ其共ニ却下サレタル後再ヒ其一人ニシテ同一商標ニ同標ノ商標登録ヲ願出ルルヲ得サルハ勿論ニ候得共種類ヲ異ニスル商品ニハ登録願出ルモ妨ナキ候ニ候哉

二同條例第五條第一項ニ已ニ登録セル商標ト同一又ハ相紛ラハシキ云々トアリ然ルニ管下産出ノ藍玉食鹽等ノ如キハ從來ノ商標多クハ相類似ス故ニ相紛ラハシキト否ラサルトハ左圖ノ内甲圖ノ如キハ相紛ラハシカラサル者トシ乙圖ノ如キハ相紛ラハシキモノト相紛メ可然ヤ果テ然ラハ其相紛ラハシキモノハ願書進達セズ當廳限リ却下候テ可然哉

三同條例第三項ニ同業者普通ニ用ヒ又ハ商標上慣用セル目印ヲ以テスルモノトアリ然ルニ管下産出食鹽等ノ如キハ從來一村毎ニ一ツノ目印ヲ烙印シ其傍ラ一己人ノ小印ヲ烙シ以テ何村ノ産ニシテ其ノ製タルヲ明シ之ヲ商標トセリ即チ左ノ丙圖ノ類ノ如シ候テハ其大印(丙圖中イ)ノ如キハ村票ニシテ即チ同業者普通ニ用非又商標上慣用セル目印ト云ハサルヲ得スト雖正傍ラ小印(丙圖中ロ)ヲ加ヘテ始メテ一己人ノ全キ商標トセリ此等ハ數人各自ニ登録ヲ願出ルモ妨ケナキ哉

四同條例第四項ノ本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標トハ附則第一項ニ依リ登録願出サル者ニ候哉然ルトキハ條例頒布以前ヨリ現ニ用ヒ來ル商標ハ假令登録願出トモ其効力ヲ有スルモノ、如ク若シ其使用者ハ登録願出者トセハ第一項ト重複ニ相成候様相見ヘ如何心得可然哉
但シ本文前段同ノ通ニ候ハ、本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アルト否トハ判別スルニ甚ク難ク若シ知ラ

四五二九
一候哉

スシテ甲者登録ヲ願出登錄証ヲ得而チ後チ乙者ノ現ニ使用セシ一判然スルニ於テ本條例第十二條ニ依リ其登錄無効ニ屬スルトキハ甲者ノ不幸ナル最モ甚シ故ニ其現ニ使用者アルト否トハ如何ノ途ニヨリテ熟知セシムヘキ候ニ候哉

(甲乙丙圖見之)

農商務省指令 明治十七年八月二日

何之處左ノ通可相心得申

第二項 何ノ通

第三項 甲圖中(圖ハ甲之)ノ如キハ相紛ラハシカラサルモノニシテ其他ノ特號ハ悉皆紛ラハシキモノトス如斯紛ラハシキ商標願出候節ハ願人ニ諭示シ願人之ヲ下段ノ儀願出候ハ、其意ニ任セ候儀ハ不普候ヘ共其紛ラハシキヲ以テ其願限リ願書却下候儀ハ相成ラヌ

但(圖ハ甲之)ノ如キハ條例第五條第三項ノ商標上慣用セル目印ナルヲ以テ登録ヲ願出ツルヲ得ス

第三項 丙圖ノ如キ普通ノ商標ニ小印ヲ添加シ之ヲ商標ト爲シ各自ヨリ願出候儀ハ相成ラヌ

第四項 條例第五條第四項ニ掲載セル條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標トハ條例附則ノ限内ニ登録ヲ經サレモノニシテ即チ公有ニ屬セル商標ノ謂ヒニ付條例第五條第二項ノ專用ニ屬セル商標トハ區別有之重複ノ儀ニアラヌ
同項但書 從來同業者中ニテ使用セル商標ハ其同業者中ニ於テ之ヲ知ルハ最も便宜ヲ有スルモノナリ故ニ新ニ商標ヲ專用セント欲ムル者ハ同業者中ニ於テ會テ使用シ來レルモノニ紛ラハシカラサル商標ヲ選擇スル様注意セシムルヘシ

五二七 新潟縣伺 明治十七年七月廿六日

シノ部

一 前條例頒布後專用ニアラサル商標ヲ用ユルモノハ若シ假テ其專用權ヲ侵スノ愛不少右ハ條例第四條ノ方法ヲ以テ右等ノ懸念ナカラシムルノ御注意ナルヤ

一 一種ノ物品ヲ假令ハ標語メ標語メノ類ニシテ其容器ヲ大中小ノ數個ニ別ツカ如キモノハ前標ヲモ其容器ニ應シ收個ヲ製スルハ勿論ナリト雖モ願書及明細書ノ如キハ各別ニセス一箇ニ見做シ出願ヲ爲サシメ可然哉

一 前標ノ材料ハ糊リ紙類ニ不限其貼用スヘキ物質ニヨリ木類金屬ヲ以テ製スルモ妨ケナキヤ

右數項目下並掛ノ儀有之候條至意何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

農商務省指令 明治十七年 八月六日

伺之趣左ノ通可相心得事

第一項 伺ノ通

第二項 願書及明細書ハ各別ニ出スニ及ハス然レモ容器ニ從テ其前標ヲ大中小ニ爲スルハ豫テ明細書ニ詳記ス可シ

第三項 伺ノ通

五二八 京都府伺 明治十七年 八月二日

麴種モヤレハ前標登錄願手續第十一條前品ノ種類中何種ニ該當候哉

農商務省指令 明治十七年 八月廿一日

伺之趣前標登錄願手續第十一條第四十二種ニ可屬儀ト可相心得事

五二九 大坂府伺 明治十七年 八月十三日

一 二人以上同一又ハ相紛シキ商標ヲ同一種類ノ前品ニ專用スル能ハサルハ勿論ニ候ヘ共茲ニ同業者一致團結シ

申合規約ヲ設ケ以テ製品ノ改良ヲ圖ルカ爲メ必要ナル場合ニ於テハ仲間中ノ約束ヲ以テ一定ノ商標ヲ製シ之ヲ同業者各自ノ製品ニ貼用セント欲スル者アリ右ハ專用ノ權アリ之カ登錄ヲ願出ルヲ得ヘキモノニ候哉
一 前項願出ルヲ得ルモノトセハ同業者仲間取締人ノ名義ヲ以テ出願可然哉
一 仲間ニ於テ一定ノ商標ヲ貼付セント商標製造者自己ノ商標ヲ貼付セント欲セハ別ニ之ヲ製シ之カ登錄ヲ願出ルヲ得ヘキハ勿論ニ候哉

農商務省指令 明治十七年 八月三十日

伺之趣左ノ通可相心得事

第二項 第二項相成ラス

但仲間若クハ組合名ヲ以テ製造販賣スル物品ニ貼用スルモノハ此限ニアラス
第三項 見解ノ通

五二〇 千葉縣伺 明治十七年 八月廿一日

本年第十九號布告商標條例第五條第三項前品普通名稱第三項前業上慣用セル目印等ヲ以テスル者ハ前標登錄願出ツルコトヲ得スト有之候處左記第一項包紙ニ印刷或ハ物品貼用第二項前業上慣用目印シ楳或ハ葛粉木製筐ノ類墨汁ヲ以テ畫ク等ノ類ハ出願スヘキ限リニ無之ト考置候ヘ共一己ノ慣用他方ヘノ信用ヲ目的トシテ出願スル輩モ可有之儀ニ付至意何分ノ御指示被下度此段相伺候也

第一項

一 何々丸何々散 何々製ノ粉等ノ類

但上ニ官許左右ニ國郡村名或ハ上ニ製製左右ニ國郡村等ノ類

第二項

一 今半圓等其種類

シノ部

同上三何々製左右二國郡村家 特將印或ハ墨汁ニテ畫ク等ノ類

農商務省指令 明治十七年 九月九日

何之趣一己入ノ從來使用セルモノト雖モ商品普通ノ名稱又ハ形質品位ヲ表スル文字及ヒ從來世上ニ於テ布薩ニ慣用セル目印ノ如キハ登録不相成儀ト可心得事

五二一 和歌山縣伺 明治十七年 九月四日

本年第十九號御布告商標條例中疑義ヲ生シ候ニ付左ノ事項相伺候何分ノ御指示相成度候也

第一項 本條例第五條第一項ニ已ニ登録セル商標ト同一又ハ相紛ハシキ商標ニシテ同一種類ノ商品ニ用フル者
同第三項ニ商標上慣用セル目印ヲ以テスル者ハ商標登録ヲ願出ルヲ得ストアリ其商標ト目印トノ區別ハ圖形ノ疎密若クハ符號ノ大小等ヲ以テ判ツヘキニ非ス願下ニ應出スル水炭醬油又ハ食鹽等ノ如キモノハ從來慣用セル符號ハ頗ル疎ニシテ一瞥以テ識別シ易カラス其商標ト目印トノ區別ハ如何相心得可然哉

第二項 前項若シ圖形ノ模倣又ハ疎密ヲ以テ判ツヘカラサルモノトセハ商標ナルカ將タ目印ナルカハ願入ノ申立ニ任セサル可カラス若シ然ラハ甲者頗ル簡單ナル圖形ヲ以テ商標ト爲シ其專用權ノ登録ヲ願出シ者ハ甲者ト同一ノモノヲ以テ自家ノ目印ト爲シ各之ヲ用ユルハ甲者ノ商標ニ同シキモノ目印ナルヲ以テ甲者ニ於テハ其專用權ヲ侵サレタルモノト爲スヘカラス甲者登録ノ保護ヲ受クルモ完全ノ効力ヲ缺カ如シ右ハ如何相心得可然哉

農商務省指令 明治十七年 九月十八日

何之趣左ノ通可相心得事

第一項 商標トハ自他ノ商品ヲ區別スルカ爲メ商品ニ付スル目印ヲ謂ヒ商標上慣用ノ目印トハ從來一般ノ商家ニ於テ用ヒ來レル布薩印即チ全ノ類ヲ謂フ

第二項 既ニ登録商標ト同一又ハ紛ハシキ目印ハ假令何等ノ名稱ヲ以テスルモ同シ商品ニ用ユルヲ得ス

五二二 長野縣伺 明治十七年 九月十三日

商標條例并商標登録手續御制定相成候儀ハ製絲ノ如キ春秋繭ノ區別ニヨリ其商標ヲ二様ニ製シ紋様ハ同一ナルモ彩色ヲ殊ニス而テ尚之ヲ明瞭ナラシムル爲メ春秋繭ノ文字ヲ記載セリ右ハ彩色及ヒ文字ノ相違ハ有之候ハ共致儀同一ナル上ハ春個ノ商標ト見做シ可然哉

農商務省指令 明治十七年 九月十九日

伺之通

但春秋繭ノ文字ハ商標ノ附記ナルヲ以テ商品ニヨリテ文字ヲ異ニスルヲアラハ其趣ヲ明細書ニ詳記スヘシ

五二三 大阪府伺 明治十七年 八月三十一日

一 當府下酒造業及酒類發賣業ノ者從來清酒ノ樽包(被褥ト云フ)ニ白鶴白雲梅園等ノ銘印ヲ用ヒ以テ商標トナス者多シ右ハ同業者中相用ユルモノナルカ故ニ條例第五條第三項ニ該當スルモノ、如ク相見候ハ共退テ右銘印使用ノ由來ヲ推究スレハ蓋シ其始ハ一人一己ノ商用ナルヤ復タ疑ヲ容レヌ然ラハ則チ同業者中最モ古ク相用ユルモノハ其專用權ヲ有スルモノ、如ク相見候ニ付無論第五條第三項ノ範圍外ト心得可然哉

二 已ニ登録ヲ經タル商標ヲ改正セント欲スルハ之カ出願ヲ要スル勿論ニ候處商標中專用ノ要點ヲ除クノ外上下左右等ノ圖形模倣及文字等ヲ變換セント欲スルハ出願ヲ要スヘキヤ將タ届出ノミニテ可然哉

三 同一種類ノ商品中品位較等ニ分ル、モノアリ其商標ノ專用權ハ同一ナルモ其品位ノ等級ニ應シ松印竹印或ハ甲乙或ハ鶴龜等ノ銘印ヲ添加シ以テ上下ノ品位ヲ區別スルモノアリ右ハ當初登録出願ノ際明細書ニ其區別ヲ記載設置候ハ適宜添加候トモ妨ケナキ儀ニ候哉

シノ部

農商務省指令 明治十七年 九月十八日

伺ノ趣左ノ通可相心得事

第一條 白濁白雲等ノ銘ニ於ケル從來多クノ酒造家之ヲ慣用シ既ニ自他ノ商品ヲ區別スルノ効力ヲ失ヒ一種ノ酒質ヲ指定スルニ至リシトハ之ヲ普通ノ名稱ト看做スヘシ

第二條 商標中専用ノ要點外ニアル圖形模様等ヲ模倣スルハ商標ノ改正ニ屬ス

但條例第六條ノ場合ニ於テ商標中ノ住所氏名等ヲ模倣セント欲スル時ハ届出ノミニテ可トス

第三條 見解ノ通

五二四 山口縣伺 明治十七年 九月八日

本年第十九號御布告商標條例第五條第三項ニ商標上慣用セル目印ヲ以テスル者ハ登録ヲ願ヒ出ルヲ得スト有之然ルニ懸下岩國産紙ノ儀ハ舊稱ノ當時ニ於テ一ノ官衙アリテ左圖ノ符號ヲ貼シ其品位ヲ分別スルノ成規ニ候處置縣以來岩國産紙堂ナルモノ其方法ニ據リ該符號ヲ専用シ來レリ又近來ニ至リテハ同業者各自ニ之ヲ貼付スル慣行之アリ若シ此際他ニ該符號ヲ以テ商標登録ヲ願出ルルハ該社専用權ヲ拋棄致シ候ニ付目下登録方可願出哉伺出候右等ハ條例第五條第三項ニ該當スル者ト思考致候（共爲念相伺候也）

（符號圖略之）

農商務省指令 明治十七年 九月廿二日

伺ノ通

五二五 兵庫縣伺 明治十七年 九月廿二日

第一條

條例第五條第二項中商品普通ノ名稱トハ板令ハ酒醬油類ノ類ヲ指スカ又ハ此等ノモノハ商品固有ノ名稱ニシテ灘酒龍野醬油阪上類ノ類ヲ云フ儀ニ候哉

第二條

條例第五條第三項同業者普通ニ用ヒ又ハ商標上慣用セル目印トアルハ例ハ極上飛切天下第一天印精選等ノ類ヲ云フカ又ハ同業者各自ノ目印即チ○△□等ノ類ヲモ併セ指スカ

第三條

條例第五條第四項中本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標トアリ當類下灘酒ニ正宗惣花大關等ノ酒銘アリ其根元ハ其一家ノ酒銘ナリシモ其銘漸ク聲價ヲ世上ニ博スルニ從ヒ他人之ニ擬スルモノ次第ニ増加シ増加スルニ從テ聲價愈々博ク若シ一朝之ヲ制限スルルハ販路忽チ障害ヲ來スヘキ景況ニシテ近來某製ノ正宗某製ノ惣花ト唱ヘ其酒銘殆ント該地方慣用ノ姿ヲナセリ其標牌記號方ハ酒樽ノ上包ニ正宗惣花大關等ノ酒銘ヲ大書シ之ニ注連又ハ松或ハ竹梅等ノ圖繪ヲ加ヘ且其標造極製天下ニ○等ノ烙印ヲ捺ス其圖形概テ左ノ如シ

（圖略之）

右疑問

第一 イ印大關ハ條例第五條第四項條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標ニ相當シ即チ公有ノ商標ト相心得

ハキ哉

第二 ニ印水印モ亦其慣用法イ印ニ異ナラサルヲ以テ前同様可相心得哉

第三 ハ印ト印子印ル印ハ條例第五條第三項同業者普通ニ用ヒ又ハ商標上慣用セル目印ニ相當スルモノト可相心得哉

第四 ロ印ハ印又印リ印ハ何レカ其一ヲ擇ヒ例ヘハロ印又ハハ印ヲ以テ商標トシ登録願出ルイヲ得ヘキモノニ候哉

第五 某シテ前收項伺ノ通ナルルハ專用權ヲ有スル登録商標ハロ印又ハハ印ニシテ其他イ印ハ印ニ印水印ト

シノ部

印子印リ印又印ル印等ハ極薄適宜併用スルモ妨ケナキ儀ニ候哉

第六 口印又ハ印即チ登錄ヲ得クルモノノミヲ以テ商標ト唱ヘ其他ノ諸國繪烙印等ハ畢竟製品容器ヲ裝飾シタル繪烙ノ一部ニ屬シ商標ノ全形以外ト見做スヘキ哉又ハイ印ヨリ印ニ至ルモノハ悉皆商標ノ全形内ニ屬スヘキ儀ニ候哉

第四條

本年御省第五號告示第二番式第四項(此商標ノ何處ニハ其地何某ノ文字ヲ何様ニ附記致候)トアリ例ヘハ幾何地何某製如此類ノモノ其標花ハ商標ニシテ何地何某製ノ文字ハ附記ナリ此附記ハ商標全形ノ内外何レニ可屬哉

第五條

若シ前條ノ附記ヲ以テ商標ノ全形内ニ屬スルモノトセハ例ヘハ其製品容器ノ正面ニハ標花ノミヲ盡キ何地何某製ノ文字ヲ其側面ニ附記スル場合ニ於テハ一個ノ商標ニケ所ニ分裂スヘシ此等ハ妨ケナキ儀ニ候哉

第六條

登錄ヲ得タル商標ノ全形内外上下左右周圍等ヘ登錄商標ノ文字又ハ横文ニテ同意義ヲ或ハ記載シ或ハ記載セザル等適宜ニ任セ候儀ハ不苦候哉

第七條

例ヘハ標花ノ商標ヲ以テ登錄ヲ得其製品上中下ヲ區別セン爲メ商標ノ全形内又ハ全形外上等品ニハ全中等品ニハ全下等品ニハ(等)印ヲ適宜記載スルハ妨ケナキ儀ニ候哉

第八條

登錄商標全形ノ内外適宜ノ個所ヘ其商品ノ容積重量尺度量號年月等ヲ記載スルハ商標主ノ隨意ニ任スヘキ儀ニ候哉

第九條

商標登錄願書式ニ何組組長トアルハ同業者各自業務ノ改良進歩ヲ計ルノ目的ヲ以テ組織シタル例ヘハ茶葉組合

露業組合ノ如キ類ヲ云フニ非スシテ全ク會社ノ方法ヲ以テ一個体ヲ爲シタルモノヲ指稱スル儀ニ候哉

第十條

條例第九條登錄商標ト他ノ種類ノ商品ニ兼用若クハ轉用云々トアリ種類異同ノ差別ハ本年第十三號布達第十一條ニ明記アル六十五種ノ區別ニ從ヒ例ヘハ食鹽ト膏藥ハ其物相異ナルカ如シト雖モ等シク第一種ニ屬スルヲ以テ同種類トシ炭綿ト木棉綿ハ共ニ第二十五種ニシテ同種類ナルモ絹絲ト綿絲トハ第二十六種ト第二十七種ト其屬スル所相異ナルヲ以テ其品相似タリト雖モ眞綿ト木棉綿ノ例ニ依ラス仍ホ別種類トナスカ如キ旨意ニ候哉果テ然ラハ食鹽ニ用ユル登錄商標ヲ膏藥ニ兼用又ハ轉用スルモ同種類中ナルヲ以テ別ニ出願又ハ届出等ニ及ハサル儀ニ候哉

第十一條

登錄商標ノ全形中又ハ其以外ニ灘酒海野醬油阪上鹽等ノ文字ヲ適宜記載スルハ不苦儀ニ候哉

第十二條

製造人登錄商標ヲ其製品ニ貼付シ之ヲ買受ケテ販賣スル商人モ亦其自己ノ登錄商標ヲ之ニ貼付シ順次賣買スル毎ニ各商標ヲ増貼スルハ妨ケナキ儀ニ候哉

第十三條

登錄願手續第二條ノ見本願書明細書等願書參考ノ爲メ成規負載ノ外見本ハ登錄願書明細書ハ各管通宛願人ヨリ別ニ差出サセ不苦候哉

農商務省指令 明治十七年 九月十七日

伺ノ趣左ノ通可相心得申

第一條 總テ普通ノ名稱トス

第二條 條例第五條第三項ニ掲載シタル同業者普通ニ用フル目印トハ例ヘハ茶筒ノ茶蓋ニ茶蓋ノ形ヲ付シ足袋ノ包紙ニ足袋ノ形ヲ付スルノ類ヲ謂ヒ商標上慣用ノ目印トハ商家一般ニ慣用シ來レル布羅印即チ()等

シノ部

ノ類ヲ謂フ

但極上飛切等ノ文字ハ物ノ品位ヲ表スルカ爲メニ用フルモノナルヲ以テ之ヲ商標ノ要部ト爲スヲ得ス

第三條 第一項 酒銘大關ノ如キハ條例附則第一項ノ願書提出期限ヲ經過スルニ非サルハ其公用商標タルト否ヲサルトヲ判定スルヲ得ス

但大關ノ銘タル從來多クノ酒造家之ヲ慣用シ既ニ自他ノ商品ヲ區別スルノ効力ヲ失ヒ一種ノ酒質ヲ指定スルニ至リシハ之ヲ普通ノ名稱ト看做スヘシ

第二第三第四項 ニホ兩個ノ印ハ第一項本文ノ通ハトチル四個ノ印ハ物ノ品位ヲ表スルモノナルヲ以テ登錄ヲ願出ツルヲ得スリ又兩個ノ印ハ第二條本文ニ據テ了解スヘシロハ兩個ノ印ハ外部ノ觸摸及ヒ俄ノミヲ要部トシ内部ノ文字ヲ要部外ニ附記スレハ登錄ヲ願出ルモ妨ナシ

第五項 併記ノ儀ハ見解ノ通

第六項 前段見解ノ通

第四條 書式ニ掲載シタル附記ハ商標ノ全形内ニ附記スルノ方法トス

但何面書列附記ノ如キハ之ヲ全形ノ外執レニ屬スルモ願人ノ適宜タルヘシ

第五條 全形内ノ附記ヲ製器ノ容器ニ從テ變換スルアルモノハ明細書中用方ノ處ニ於テ其旨ヲ詳記スヘシ

第六條 商標ノ全形外ニ記載スルハ適宜ニ任スト雖モ全形内ニ記載セント欲スルハ豫テ明細書ニ記載シ置ヘシ

第七條 前同斷

第八條 前同斷

第九條 見解ノ通

第十條 前段ハ見解ノ通後段ハ届出ヘシ

第十一條 第六條ノ指令ニ同シ

第十二條 見解ノ通

第十三條 相成ラス

但願人肯臨ノ上ハ妨ナシ

五二六 栃木縣伺 明治十七年 十一月八日

第一項 管内ニ於テ從來家號ノ頭字ヲ以テ洋字トナシ商標ニ使用セシモノアリ今之カ登錄ヲ願出ツルト雖モ右ハ洋和ノ文字ヲ異ニスルモ條例第五條第二項ニ該當スルモノト心得可然哉

第二項 前項ノ場合ニ於テハ地方廳限リ下戻可然哉

農商務省指令 明治十七年 十二月三日

伺之趣左之通可相心得事

第一項 願出ツルモ妨ケナシ

第二項 例規ニ據テ進達スヘシ

五二七 和歌山縣伺 明治十七年 十二月十七日

本年十二月八日官報第四百三十五號官報前商標登錄願ノ儀ニ付栃木縣ヨリ伺第一項ニ家號ノ頭字ヲ以テ洋字トナシ商標ニ使用セシモノ登錄願出云々ニ對シ御省御指令ニ願出ツルモ妨ケナシトアリ右ハ條例第五條第二項ノ家號トハ假令ハ紀伊ノ國屋又ハ尾張屋等ノ類ヲ指シタルモノニ可有之歟果テ然ラハ右等ノモノハ願出ツルヲ得サルモノニ有之處如此家號ノ頭字ヲ洋字ニ改メタルモノハ商標トナルヲ得ヘキモノナラハ紀伊ノ國屋ノ紀尾張屋ノ尾ノ類ノ如キモノ和字ヲ以テ商標トナスヲ得ヘキヤ都テ右等ノ種類ハ即チ商標ニ非スシテ所謂目印ノ部ニ屬スヘキモノト相考候へ共聊カ解候相伺候

シノ部

五二七

五二六

農商務省指令 明治十七年 十二月廿四日

伺之趣蒙號ノ頭字ト雖モ從來同業者普通ニ用ヒ又ハ前業上濫用ノ目印ニアラサルニ於テハ其登錄ヲ願出ツルモ
妨ケナキ儘ト可相心得事

五二八 岡山縣伺 明治十七年 十月八日

一本年第十九號ノ布告ヲ以テ商標條例御制定相成候處右ハ一般商家ノ膏品ニ限リ専用可致モノニシテ府縣監獄
署ニ於テ製造スル物品ニハ適用難致儀ト思慮候ヘ共抑在監人ノ如キハ無資無産無技無能ノ徒多キヲ以テ監獄
則ニ於テ之ニ種藝ヲ授クルノ事業ヲ設ケテ以テ在監人ニ習熟セシムルニ於テハ其製出スル處ノ物品ハ監獄署
ニ於テハ販賣セザルヘカラス其販賣ノ方法ニ至テハ均シク他ノ商店ニ異ナルナシ然ラハ則チ監獄署ノ製造
品ト雖モ商標專用登錄ヲ願出ス不苦候哉

一采テ前條御許可相成候ハ、在監人工事ヲ習熟シ放免ノ後チ監獄署ニ於テ商標專用ヲ得タル物品ヲ製作シ之ヲ
販賣セントスルモノヘハ商標專用ノ權ヲ分與致シ不苦候哉

農商務省指令 明治十七年 十二月廿五日

伺ノ趣出願スルノ限リニ無之儘ト可相心得事

五二九 島根縣伺 明治十七年 十月廿四日

商標條例中疑義ノ廉左ニ相伺申候

四五五六
ノ四項

第一條 條例第五條第四項ノ儀ニ付徳島縣伺御指令ノ趣有之候處其公有標ニ屬スヘキモノハ幾年ノ後露顯スル
モ限ナキヤ
第二條 前條公有標後日露顯シ之ニ抵觸スレハ條例第十二條ニ據リ無効ニ歸スヘキ處其公有商標トナスヘキ實

否ノ調査ハ何等ニ據ルヘキモノナルヤ

第三條 若シ公有商標ハ人民ノ申出ニ任セ別ニ調査セラレサルモノトスレハ附則限内ニ出願登錄ヲ得専有權ヲ
有スル者ト抵觸スルトハ如何可心得哉

第四條 公有商標ト同一又ハ相紛ハシキ商標ヲ同一種ノ商品ニ用フルハ出願スルヲ得スト雖モ出願セスシテ
同標ノ商標ヲ使用スルモノアルモ不問ニ置クヘキ筋ナルヤ

農商務省指令 明治十八年 三月三日

伺之趣左ノ通可相心得事

第一條 見解ノ通

第二條 已ニ登錄ヲ經タル商標ニシテ後日公有ニ屬スヘキ商標ナルコトヲ商標登錄所ニ於テ發見シタルハ農
務卿之ヲ判定シ民間ニ於テ發見セシキハ裁判官ノ審判ニ據ルモノトス

第三條 附則限内ニ出願シ其登錄ヲ經タル商標ハ條例第五條第四項ニ抵觸スルコトナシ

第四條 見解ノ通

五三〇 富山縣伺 明治十八年 七月八日

登錄商標ヲ使用スル商品ノ種類ハ商標登錄手續第十一條ニ明示有之候處其同種類内ノ品ヲ二品以上甲乙丙
丁便立ニ取リ束子之ヲ包括スルニ無之儘ト相心得可然ヤ

農商務省指令 明治十八年 七月廿一日

伺之趣商標明細書中ニ掲載セル商品ナレハ幾品タリ之ヲ包括スル上包紙若クハ上蓋等ニ登錄商標ヲ使用シ登
支無之儘ト可相心得事

(八三) 獸醫免許規則 明治十八年八月 第三十八號布告

シノ部

獸醫免許規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス

(別冊)

獸醫免許規則

四五三三三三三
四三三三三三三
六五三三三三三
一五四二二二二
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三
四五三三三三三
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三

- 第一條 獸醫ハ獸醫學術ノ試験ヲ受ケ農商務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス
- 第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘシ
- 第三條 官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第四條 外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第五條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ農商務卿ハ獸醫學術ノ試験ヲ經サル者ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ
- 第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ
- 第八條 開業免狀ヲ毀損シ失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

四五三三三三三
四三三三三三三
六五三三三三三
一五四二二二二
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三
四五三三三三三
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三

四五三三三三三
四三三三三三三
六五三三三三三
一五四二二二二
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三
四五三三三三三
三〇三三三三三
六七八二二二二
一〇三四三三三
七〇八三三三三
二四三三三三三
八三三三三三三

- 第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ
- 第十條 獸醫廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ
- 第十一條 獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ農商務卿其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ
但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ
- 第十二條 前條ニ據リ獸醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ
- 第十三條 農商務卿ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ
- 第十四條 官許ヲ得スシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

參照

○關係法令

五三一 農商務省訓令第二十一號 明治十九年十二月八日

明治十八年八月布告第二十八號 獸醫免許規則第五條ニ據リ假開業免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ左ノ假開業獸醫免許手續ニ據リ取扱フヘシ

假開業獸醫免許手續

シノ部

第一條 獸醫ニ乏シキ地トハ開業獸醫ノ居住所ヨリ一日中ニ往復シ能ハサル土地ニ限ルヘシ

第二條 假開業免狀ヲ得ント欲スル者アルトキハ甲號書式ノ願書ニ履歷書ヲ添ヘ郡區役所ヲ經テ地方廳ヘ差出サシムヘシ

第三條 假開業免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ獸醫缺乏ノ土地ニ限リ區域ヲ定メ其地勢廣狹牛馬頭數等乙號書式ニ據リ詳細取調本人ノ願書及履歷書ヲ添ヘ具狀スヘシ

第四條 假開業獸醫ハ一區域ニ壹人ヲ限ルヘシ

第五條 假開業獸醫營業ノ免許年限ハ滿二年以内トス

但シ免許期限ヲ經ルモ仍ホ獸醫ニ乏シキ場合ニ於テハ此手續ニ據リ更ニ假開業免狀ノ下付ヲ具申スルコトヲ得

第六條 假開業獸醫ハ免許區域外ニ出テ病畜ノ治療ヲ爲スヲ得スト雖モ免許區域内ニ牽來リタル病畜ハ之ヲ治療セシムルコトヲ得

第七條 假開業獸醫ニシテ本免狀ヲ得タルトキハ地方廳ヲ經由シテ其假開業免狀ヲ當省ニ返納セシムヘシ

第八條 假開業獸醫免許年限中其區域内ニ於テ本免狀ヲ得タル獸醫ノ開業者アルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ經伺ノ上該假開業免狀ヲ返納セシムルコトヲ得

第九條 假開業獸醫ニシテ免狀ノ有効期限ヲ經過シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ該

免狀ヲ當省ニ返納セシムヘシ

第十條 假開業免狀下付ノ出願ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ
(書式等ス)

○伺指令

五三二 官城縣請訓 明治十七年 八月二十日

刑注第二百五十六條ニ官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者云々トアリ該醫業トアルハ獸醫ヲモ含有セシヤ將タ包含セサル儀ト心得可然哉聊疑義ヲ生シ候條至急伺分ノ御訓示有之度候也

司法省内訓 明治十七年 九月三日

別紙請訓之刑注第二百五十六條ハ獸醫ヲ包含セサル儀ト心得此旨及内訓候也

五三三 廣島縣伺 明治十八年 九月五日

今般第二十八號ヲ以テ獸醫免許規則布告相成候ニ付テハ從來本縣ニ於テ開業免狀ヲ授與シタル獸醫ハ規則第一條ニ據リ明治十九年六月三十日限り消滅スル儀ニ候哉將タ本縣開業免狀ヲ締認シ更ニ御省ニ於テ免狀御下付可相成儀ニ候哉

農商務省指令 明治十八年 九月十六日

伺之趣ハ前段伺之趣

五三四 青森縣伺 明治十八年 九月十六日

今般本縣ニ於テ駒場農學校獸醫科得業生ヲ準判任御用掛ニ採用候處右ハ第二十八號布告獸醫免許規則第三條ニ據リ卒業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントヲ願出ルルハ直ニ該免狀ヲ授與セラルモノト存候ヘ共元來獸醫術得業

シノ部

生タルノ資格ヲ以テ採用被候モノニ候ハハ在官中ハ別ニ開業免狀ヲ願出ス候トモ他開業被候ト同ク隨意ニ人民ノ求メニ應シ牛馬并ニ諸畜治療爲被候テ差支無之候哉

農商務省指令 明治十八年十月二日

伺之趣旨職ノ有無ヲ問ハス開業免狀ヲ有セサル者ハ人民ノ求メニ應シ治療不相成儀ト可心得事

五三五 福島縣伺 明治十八年十月九日

從來ノ馬醫ナルモノ數村ノ農馬アラスヲ集メ蹄剪刺絡等ノ術ヲ施シ來候處本年第二十八號公布實施後ハ右蹄剪刺絡共ニ獸醫ニアラサレハ施術不相成哉

農商務省指令 明治十八年十月廿三日

伺之趣

五三六 岩手縣伺 明治十八年十一月六日

本年十月二十六日第六百九十七號官報ニ福島縣ヨリ從來ノ馬醫ニテ農馬ヲ集メ蹄剪刺絡等ヲ施來候處本年第二十八號公布實施後ハ蹄剪刺絡共ニ獸醫ニアラサレハ不相成儀ノ伺ニ對シ伺之趣トノ御指令ヲ揭載有之右刺絡ハ畜ヨリ獸醫ノ職業ニ屬スレハ蹄剪刺絡ハ履尾同様半ノ家畜ノ修飾ナレハ獸醫ニアラサルモ施術不苦哉ニ被考候ハ共果シテ獸醫ニ限ルモノトセハ本縣ノ如キ家畜多數ニシテ地理不便或ハ獸醫アルモ蹄剪未熟ナル等ヨリ修飾ヲ忌リ爲メニ患者ヲ願生スル哉ノ恐有之ニ付右様ノ場合ニ於テハ本縣限リ特ニ蹄剪業ヲ許可スルモ不苦候哉

農商務省指令 明治十八年十一月十九日

伺之趣旨職非サレハ營業不相成儀ト可心得事

五三七 岩手縣伺 明治十八年十一月十二日

岩手縣醫學校ハ本縣勸業所轄トシ明治十二年十一月外山牧場内ニ創立シ同課雇渡邊東洋ニ教授方擔當爲被同十三年十月同人解散ニ付本縣御用係丹下謙吉ニ擔任申付候然ルニ獸醫ハ牧畜附帶ノモノニ付該校資金ハ牧畜仕注金(拂納分合金)ヨリ仕拂來候タメ同十四年拂納事業ヲ民移スルニ際シ該學校モ雇馬事務所ハ附屬セシメ候ヘ共生徒ノ養成ハ本縣ニ緊急ナルヲ以テ教員モ亦引續キ擔當爲被同十六年三月又名ノ卒業生ヲ得更ニ生徒ヲ召集シ翌十七年該學校ハ縣立學校ニ引直シ目下尚繼續生徒ヲ養成致居候前述ノ通創始本縣勸業所轄ニシテ中頃私立學校トナリ後縣立學校ト相成候ニ付右卒業生ノ如キモ始ヨリ私立學校ノ生徒トハ多少相違有之且試驗規則第五條ノ學科ハ已ニ該校規則ニ據リ修得セシ者ニシテ獸醫免許規則第三條府縣立學校卒業生徒トハ趣ヲ異ニスルモ組織上ニ至テハ縣立學校同様ニ有之且同規則第五條ニ於テ獸醫缺乏ノ地ニハ假開業免狀ヲ授與セラルノ場合モ有之該生徒ノ如キ不幸ニシテ卒業ノ際學校ハ私立ノ態ニ有之候ヘ共學術上ニ於ケル敢テ官立學校卒業生ニ異ナル者ニ無之ニ付特ニ獸醫免許規則第三條府縣立學校卒業生ニ準シ試驗ヲ要セスシテ免狀御下附可相成儀ニ候

農商務省指令 明治十八年十二月一日

伺之趣旨開業免狀下付候限リニ無之儀ト可心得事

五三八 千葉縣伺 明治十九年三月八日

獸醫假開業免狀ハ地方ノ情況ニヨリ獸醫乏シキト認メ授與ノ具申ヲナスモノナレハ後來獸醫成出ノ見込アルニ於テハ豫メ假免狀ノ有効年限ヲ定メ具狀不苦哉

農商務省指令 明治十九年三月十六日

伺之趣

シノ部

五三九 沖繩縣伺 明治十九年二月十七日

獸醫ヲ開業セント欲スルモノハ明治十八年第二十八號布告ニ基キ農務省ノ免狀ヲ得ルニアラサレハ施術スルヲ得ヌ又獸醫ニシテ土地ハ規則第五條ニ依リ試驗ヲ要セス假開業免狀ヲ下付スルノ明條アルモ本縣ノ民情風俗ハ特殊ニシテ元來醫術ヲ賤ムノ風習アリ隨テ人醫ヌラ仍且進歩セス且下其需用ニ乏シキヲ以テ折角醫生養成中ナレバ殊ニ獸醫ニ至テハ從來類似ノ業ヲ營ム者ナシ就テハ追テ醫學生ノ内ヲ選拔シ該醫修業セシムヘキ計畫中ナレバ本縣ハ往古ヨリ牛羊豚ヲ飼養シテ以テ常食ニ供スルノ習慣アリ爲メニ家畜夥多ニシテ往々傳染病等ノ害ヲ斃死スル者少カラズ殊ニ規則實施ノ日ニ至リテハ屠獸檢査(獸類ノ健否ヲ)傳染病豫防消毒等差支ノ場合多ク有之該醫營業者出來候迄ハ右豫防等ノ備懸下開業醫ニ於テ取附候檢査程度既ニ獸醫免許等ノ儀ニ付テハ岩手外ニ縣ヨリ伺ヘ御指令ノ趣モ有之候ヘ共本縣ノ儀ハ實ニ不得止儀ニ付特別ノ御詮議ヲ以テ御裁可相成候様致度農商務省指令 明治十九年三月十六日 伺之趣謹聞屆畢

五四〇 茨城縣伺 明治十九年十二月廿二日

昨十八年第二十八號公布獸醫免狀規則中疑義ノ廉左ニ相伺候 一 本規則第六條ニ開業免狀ヲ得ル者トアルハ假開業免狀ヲ得ル者ヲモ含有セル儀カ 一 前項果テ然ルトキハ假開業免狀ヲ得ル者ニシテ獸醫開業試驗ニ及第シ開業免狀ヲ得ル者アルトキハ又第六條ニ據リ免狀手数料ヲ徴收シ可然哉 一 本規則第七條ヨリ第十三條迄ノ各條ハ又假開業免狀ヲ得ル者ニ通シテ施行スル義カ若シ否ストスルトキハ其取扱如何可心得哉

農商務省指令 明治二十年一月十二日

伺之趣左ノ通心得ヘシ 第一項及第二項ハ見解ノ通 第三項ハ前段見解ノ通

五四一 德島縣伺 明治二十年四月十三日

獸醫ニアラサル者ニシテ蹄剪刺絡トモ施術營業相成ラサル旨農ニ福島縣外一縣ヘ御指令ノ次第モ有之候處從來ノ慣行ニ據リ牛馬ニ衣治ヲ施ス如キモ猶獸醫ニ限ルヘキ裁取テ然ラハ茲ニ營業トナスニアラス無實ニシテ自己ノ技工ニ任セ觀望ヲハ他ノ假開業免狀ニ應シ一時牛馬ニ衣治ヲ施ス者アルトキハ明治十八年公布第二十八號第十四條ニ該當スル義ニ候ヤ將タ右所爲ノ如キハ營業トナスニアラサルヲ以テ取締上後來不問ニ付シ可然ヤ 農商務省指令 明治二十年四月廿三日 伺之趣免許獸醫ニアラサレハ施術スルヲ得ス

〇判決例

五四二 明治二十年乙第二十八號

抑法律ハ將來ノ事ヲ規定スルモノニシテ既往ニ溯リ其効ノ及ホス可カラサルハ法理ノ原則ナリ故ニ已得ノ權ハ法律ノ効ヲ既往ニ及ホスノ特定アル場合ノ外ハ之ヲ失フ事ナキモノトス今獸醫免狀規則ヲ審檢スレハ獸醫規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス其第一條獸醫ハ獸醫學術ノ試驗ヲ受ケ農務省ヨリ開業免狀ヲ得タル者トストアリ即チ該條ハ將來獸醫ト爲ラント欲スル者ニ命令シタル法文ニシテ已ニ免狀ヲ得テ該條ノ業ヲ爲ス者ニ及ホサルヤ前段明ノ法理ニ因リ明カナリ而テ該規則中別ニ從來ノ開業獸醫ニ就キ命令シタルノ法條ナキハ

大坂府平民 岡本和助

勿論他ニ該醫ノ業ヲ終廢スル等ノ特定法アルニアラサレハ該則發布前既ニ免狀ヲ得テ開業スル者其免狀ノ効力ヲ失フ事ナキハ論ヲ談サルナリ本件被告入カ所爲ノ事實ニ於ケル原裁判官ノ認定スル所ニ依レハ管テ大坂府廳ノ許可ヲ得テ職醫ノ業ヲ爲シ居タリシニ明治十八年第二十八號布告ヲ以テ職醫規則制定セラレ該則施行後ニ至リ更ニ其第一條ニ依リ免狀ヲ得シテ職醫業ヲ爲シタル者ナリ然レハ被告入ハ曩キニ官許ヲ得既ニ職醫業ヲ爲スノ權ヲ有スル者ナレハ爾後職醫免狀規則發布アルモ既得權ヲ失フ可キノ特定法ナキヲ以テ更ニ免狀ヲ受ケスシテ該業ヲ爲シタリトテ該規則第一條ノ違犯者ト爲ヌヲ得サルヤ明瞭ニシテ他ニ之ヲ罰スル法律ナケレハ被告入カ所爲ハ罪トナラサルモノナリ然ルヲ原裁判ノ茲ニ出テス職醫免狀規則第十四條ニ依リ罰金ノ刑ヲ言渡シタルハ上告論旨ノ如ク據律ヲ錯誤シタル不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノト判定ス因テ治罪法第四百二十九條ニ則リ原裁判ヲ破毀シ直チニ本院於テ左ノ裁判ヲ爲ス

右被告入カ所爲ノ事實ハ原裁判官ノ認定スル所ニ依レハ法律上之ヲ罰スヘキ正保ナキヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ從ヒ無罪

明治二十年一月三十一日

岡本和助

(八四)種痘規則 明治十八年十一月第三十四號布告
種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省甲第八號及甲第拾六號布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ
第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フ

四五五五五
六〇一八四
六二二三四
六七九四四
五五五五五
五五五五五

ハシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラヌ掛官吏ノ指定シタル期限内ニ種痘ヲ行フヘシ
第四條 種痘ヲ受ケヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證明ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ戸長役場ニ届出ヘシ
第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス
第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戸長役場ニ届出ヘシ
但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ
第七條 十六歳未滿ノ者ノ尊長後見人若クハ屋主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ實ニ任ヌヘシ
貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ實ニ任ヌヘシ
第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ
但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ
第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五拾錢以下ノ科料ニ處ス
第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度內務卿ニ報告スヘシ

シノ部

四五五五五
六〇一八四
六二二三四
六七九四四
五五五五五
五五五五五
八四一三三
九四一三三
三九九三三
八四一三三
三九九三三
四五五五五
六〇一八四
六二二三四
六七九四四
五五五五五
五五五五五
四五五五五
六〇一八四
六二二三四
六七九四四
五五五五五
五五五五五

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

●參照

○伺指令

五四三 岐阜縣伺 明治十七年 九月廿一日

從來開業醫ニシテ地方廳免許證所持ノ者今回御省ヨリ更ニ開業免許證御下付相成候ニ付テハ右免許證所持ノ者ハ科目ノ何タルヲ論セズ種痘場所ノ健別ニ出願不爲致意許不苦儀ト心得可然哉

内務省指令 明治十七年 十月六日

書面資料整齊料ヲ除クノ外伺之通

但種痘場所爲スモノハ其處へ届出サスヘシ

○

五四四 東京府伺 明治十八年 十一月廿七日

本月九日第三十四號布告種痘規則第二條ノ年限前即チ五年以前ニ再種シタル者ハ其善感ナルト不善感ナルトヲ問ハズ法律上再種満ノモノトセヌ五年ヨリ七年ノ間ニ再種スルニアラサレハ規則ニ背犯シタルモノト認ムヘキ儀ニ候ヤ果テ然ルハ例へハ初種後四年ニ再種善感シタル者ト雖更ニ三年以内即初種後七年以内ニ法律上ノ再種ヲナササルヲ得サル筋ニ候哉又ハ善感ナル者ニ限リ再種満ノモノトシ其ノ年ヨリ起算シテ五年乃至七年ニ三種ヌヘハ法律上ノ責任ヲ了リ候儀ト心得可然哉

内務省指令 明治十八年 十二月廿三日

前段伺ノ通

○

五四五 山梨縣伺 明治十八年 十二月一日

第一條 規則第一條ニ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシト有之候處若シ再三種ヲ行フモ猶不善感ナル場合ニ於テハ其善感ヲ見ルニ至ル迄一週年毎ニ一回以上ツ、種痘可致儀ト心得可然哉

第二條 種痘善感后又ハ再種后天然痘ノ流行等ニ遭遇シ數度臨時ノ種痘ヲ爲セシモノト雖モ規則第二條ノ期年ニ至レハ更ニ再三種ヲ行フヘキ儀ト心得可然哉

第三條 規則第三條ニ依リ三種ヲ了ヘタルモノハ天然痘流行時ト雖モ別ニ種痘ヲ爲サシムルニ不及儀ニ可有之儀

内務省指令 明治十八年 十二月廿三日

第一條 若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行ヒ尚ホ不善感ナルモ規則第一條ノ責任ハ了シタル儀ト心得ヘシ

第二條 伺ノ通

第三條 規則第二條ニ依リ三種ヲ了ヘタル者ト雖モ規則第三條ノ場合ニ於テハ掛官吏ノ見込ニ由リ更ニ三種痘ヲ行ハシムル儀ト心得ヘシ

○舊令

五四六 内務省甲第十六號布達 明治九年 五月

天然痘預防規則別紙之通相定條條其方法細目並ニ右ニ關スル費用收事支給等ノ儀ハ各地方ノ便宜ニ從ヒ精々普及候儀可取計此旨布達候事

(別紙)

天然痘預防規則

第一條 小兒初生七十日ヨリ滿一年迄ノ間ニ必ズ種痘スヘシ若シ事故アリテ此期ニ後ル、モノハ其次第ヲ醫務取

シノ部

掃若クハ區戶長ニ届クヘシ
 但初種ノ後五年成ハ七年毎ニ再三種ヲ試ムヘシ
 第二條 種痘シタル者ハ必ス其種痘證ヨリ種痘病ノ證書ヲ請ケ取リ置クヘシ
 但天然痘證痘ニ感シタルモノモ本文ニ準シテ醫師ノ證書ヲ請ケ取リ置クヘシ
 第三條 職務取締若クハ區戶長ハ初種ノモノ再三種ノモノ及ヒ事故アリテ種痘スルニ能ハサルモノ等夫々検査シ
 地方廳ニ届ケ出ツヘシ
 第四條 地方廳ニ於テハ職務取締若クハ區戶長ノ届書ヲ以テ半ケ年分ツ、取纏メ毎年三月九月内務省ニ差出スヘシ
 第五條 送種ノ時ハ必ス第二條ニ掲グル醫師ノ證書ヲ所持スヘシ
 但滿二十五年以上ノモノ並天然痘病ノ證書アルモノハ此限ニアラス
 第六條 管内ニ於テ天然痘流行スル時ハ管廳ヨリ流行ノ緩急病症ノ輕重等ヲ接近ノ府廳ニ報告シ且内務省ニ届出
 ツヘシ
 第七條 前條ノ際ニ臨テハ未痘兒ハ勿論種痘病ノ者ニ至ルマテ年齡期限ヲ問ハス普ク接種スヘシ
 但未決既決監獄留ノ囚徒ハ本條ニ準シ官ヨリ接種セシムヘシ
 第八條 第一條及ヒ第二條ノ旨ヲ遵守セス或ハ無醫ノ説ヲ唱ヘ種痘ヲ拒ミ若クハ他人ヲ迷惑スル等ノ者ハ違式註
 退ヲ以テ論シ罰金ヲ科スヘシ

(八五)信號器製造取締 明治十九年六月
 總務省令第十二號
 明治十八年八月第二十七號布告海上衝突豫防規則改正追加ニ記載シタル信號器中星火ヲ發ス
 ル榴彈或ハ火箭信號燈管及轟彈ハ遞信省ノ許可ヲ受ケタルモノニ非サレハ之ヲ製造スルヲ
 得ス犯ス者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

四三七一〇二
四六一三號

(八六)獸類傳染病豫防規則 明治十九年九月
 農商務省令第十一號
 獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス
 但明治九年二月内務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類ハ本規則施行ノ
 日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則
 第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽熱
- 三 鼻疽及皮疽
- 四 傳染性胸膜炎
- 五 傳染性鵝口瘡
- 六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患
 畜ト健畜トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患畜及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ
 第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警
 察署及戶長役場ニ届出ツヘシ
 第四條 獸醫牛疫ト診斷シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之

四八六ノ二三
四八九號

八六ノ二三
一八九號
八六ノ二三
一八九號
八六ノ二三
一八九號

シノ部

八六ノ一七
一八條

ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ	手當金評價十分ノ四
評價金五十圓マテ	同 十分ノ三
評價金百圓マテ	同 十分ノ二
評價金二百五十圓マテ	同 十分ノ一
評價金五百圓マテ	同 十五分ノ一
評價金千圓マテ	同 二十五分ノ一

八六ノ三二
三二四ノ六二
七一九條

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

八六ノ二四
九一三ノ九條

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戶長役場ニ於テハ其旨ヲ患者所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

八六ノ二四
九一三ノ九條

第八條 傳染病畜ノ全瘵又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

八六ノ二四
九一三ノ九條

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其排泄物及之ニ觸レタル飼料雜草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ

但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

八六ノ九一
九條

八六ノ三二
九條

第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患者ノ在リシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

八六ノ三三
九條

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸類市場ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得

八六ノ一三
一四一五條

第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戶長役場ハ郡區役所ヲ經警察署ハ直ニ所轄廳警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ

八六ノ一三
九條

第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示シ且近接ノ地方廳ニ報告スヘシ

但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示スヘシ

第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ毎土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報告ヲ得タルトキハ農商務大臣ノ允許ヲ得テ豫防線ヲ劃シ獸類ノ出入往來ヲ停止スルヲ得

第十七條 牛渡蔓延ノ際ニ限リ其患者ニ接近シタル牛ハ假令健康ノモノタリトモ警視總監

八六ノ五六
條

シノ部

北海道廳長官府縣知事ニ於テ農商務大臣ノ允許ヲ經タル後之ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ全額ヲ下付スヘシ

第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ農商務大臣ノ允許ヲ得タル後其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

○ (八七) 所得稅法 明治二十年三月 勅令第五號

廢所得稅法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

所得稅法

第一條 凡ソ人民ノ資産又ハ營業其他ヨリ生スル所得金高一箇年三百圓以上アル者ハ此稅法ニ依テ所得稅ヲ納ムヘシ

但同居ノ家族ニ屬スルモノハ總テ戶主ノ所得ニ合算スルモノトス

第二條 所得ハ左ノ定則ニ據テ算出スヘシ

第一 公債證書其他政府ヨリ發シ若クハ政府ノ特許ヲ得テ發スル證券ノ利子、營業ニアラサル貸金預金ノ利子、株式ノ利益配當金、官私ヨリ受クル俸給、手當金、年金、恩給、金及

八六ノ二三
四六八ノ九一
〇一二條刑
三二四九條刑

四五四七ノ二
四八七ノ二
三四五六七
二四二九條參

四五四七ノ二
三三三三
八七ノ二三
三三三三
二二二九

八七ノ二三
條參

八七ノ二三
七二七三
四條參

割賦賞與金ハ直ニ其金額ヲ以テ所得トス

第二 第一項ヲ除クノ外資産又ハ營業其他ヨリ生スルモノハ其種類ニ應シ收入金高若クハ收入物品代價中ヨリ國稅、地方稅、區町村費、備荒儲蓄金、製造品ノ原質物代價、販賣品ノ原價、種代、肥料、營利事業ニ屬スル場所物件ノ借入料、修繕料、雇人給料、負債ノ利子及雜費ヲ除キタルモノヲ以テ所得トス

第三 第二項ノ所得ハ前三箇年間所得平均高ヲ以テ算出スヘシ但所得收入以來未タ二年ニ滿タサルモノハ月額平均其平均ヲ得難キモノハ他ニ比準ヲ取リテ算出スヘシ

第三條 左ニ掲クルモノハ所得稅ヲ課セス

第一 軍人從軍中ニ係ル俸給

第二 官私ヨリ受クル旅費、傷痍疾病者ノ恩給金及孤兒寡婦ノ扶助料

第三 營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得

第四條 所得稅ノ等級及稅率左ノ如シ

等級

稅率

第一等	所得金高三萬圓以上	百分ノ三
第二等	所得金高貳萬圓以上	百分ノ二半
第三等	所得金高壹萬圓以上	百分ノ二
第四等	所得金高千圓以上	百分ノ一半
第五等	所得金高三百圓以上	百分ノ一

シノ部

七ノ二二二二

八七ノ一五
二〇條

八七ノ六一
五二〇、二五條

八七ノ二四
條

五五〇、八
七ノ二四二
七條

八七ノ二七條
七條

五四七條

五四七ノ五
一七條

其決議ニ據テ之ヲ處分スヘシ但其處分納稅後ニ涉ルトキハ稅額ノ不足アルモノハ之ヲ追徴シ過剩アルモノハ之ヲ還付スヘシ

第二十一條 調査委員會又ハ常置委員會ハ此稅法ニ關シ調査上必要ト認ムルトキハ納稅者ニ尋問スルコトヲ得

第二十二條 調査委員其他所得稅ノ調査ニ關スル者ハ納稅者ノ資産及所得ニ係ル事件ヲ他ニ漏洩スヘカラス

第二十三條 納稅者其納期前ニ於テ所得金高十分ノ五以上ヲ減損シタルトキハ郡區長ニ申出ルコトヲ得郡區長ハ事實ヲ審査シテ其稅額ヲ減シ所得金高一箇年三百圓ヲ下ルモノハ之ヲ免稅スヘシ但既納ノ稅金ハ之ヲ還付セス

第二十四條 所得金高ヲ隱蔽シテ逃稅シタル者ハ其逃稅金高三倍ノ罰金ニ處ス但自首スル者ハ其稅金ヲ追徴シ其罪ヲ問ハス

第二十五條 第二十二條ヲ犯シタル者ハ三百圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 第六條ノ届出ヲ爲サ、ル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十七條 此稅法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十八條 此稅法施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十九條 此稅法ハ明治二十年七月一日ヨリ施行ス

但北海道沖繩縣及東京府管轄小笠原島伊豆七島ニ於テハ官府ヨリ受クル俸給手當金年金及恩給金ノ外ハ當分ノ内之ヲ施行セス

附則

本法第六條ノ届書ハ本年ニ限リ七月三十一日マテニ差出スヘシ

參照

○關係法令

五四七 大藏省令第八號 明治二十年

所得稅法施行細則左ノ通相定ム

所得稅法施行細則

第一條 戶主ニ所得ナクシテ同居ノ家族ノミニ所得アル場合ニ於テモ一家内ニ屬スルモノハ總テ合算ノ上其戶主ノ名ヲ以テ届出納稅スヘキモノトス

第二條 稅法第二條第三項ニ依リ所得ヲ算出スルハ其年所得ヲ生スヘキ現在ノ資産又ハ現在ノ業務ニ應シ前二箇年平均若クハ月額平均ノ歩合ニ依リ又ハ他ノ比準ニ依ルヘキモノトス

第三條 物品ニテ收入スル所得ハ其相當價格ヲ以テ代金ヲ算出スヘシ

第四條 稅法第六條ノ届書ハ第一號書式ニ依ルヘシ

第五條 左ニ掲グル者ハ一定ノ地ニ其納稅管理人ヲ定メ戶長ヲ經テ郡區長ニ届出此稅法施行ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシ

一 此稅法ヲ施行セサル地ニ居住シ本法施行ノ地ニ於テ生スル所得金一箇年三百圓以上ヲ收入スル者

シノ部

一 内外國ニ旅行シ又ハ外國若クハ此税法ヲ施行セサル地ニ寄留スル納稅者

第六條 一人ニシテ數箇所ニ於テ所得ヲ收入スル者ハ其居住地ノ郡區長ニ届出ヲ爲

スト同時ニ第二號書式ニ依リ其所得ヲ收入スル各地ノ郡區長ニ届出ヘシ

第七條 郡區長第六條ノ届出ヲ受クルトキハ之ヲ其納稅地ノ郡區長ニ送付スヘシ但

其届出高ニ對シ意見アルトキハ別ニ其意見ヲ附スヘシ

第八條 納稅者他ノ郡區役所所轄内ニ轉居セントスルキ及ヒ轉居シタルキハ各其地

ノ戶長ヲ經テ郡區長ニ届出ヘシ

第九條 郡區長第八條ノ他ニ轉居セントスル者ノ届出ヲ受タルトキハ直チニ轉居者

ノ所得稅ニ係ル一切ノ事項ヲ其轉居先ノ郡區長ニ通報スヘシ

第十條 郡區長ハ其所轄内ニ於テ納稅者ト認ムルモノ、所得ニ關シ調査上必要ナル

場合ニ於テハ各地方ノ會社若クハ一個人ニ對シ其事項ノ問合ヲ爲スコトヲ得

第十一條 郡區長ハ調査委員選舉ノ爲メ税法第六條ノ届出ニ依リ毎年五月納稅者ノ

住所姓名ヲ其管内ニ公告スヘシ

第十二條 調査委員會及ヒ調査委員選舉ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ム

第十三條 調査委員ヲ辭スルコトヲ得ル者ハ郡區長ニ於テ已ムヲ得スト思料スル事

故アルモノニ限ル

第十四條 調査委員會ノ決議書ハ會長及委員二名以上之ニ署名スヘシ

第十五條 所得稅ノ等級金額ハ第三號書式ニ依リ毎年八月十日マテニ之ヲ達スヘシ

一八條附則

第十六條 區長ニ於テ直ニ戶長ノ事務ヲ行フ區内ニ在テハ府縣知事ノ見込ヲ以テ大

藏大臣ノ認可ヲ受ケ一區内ヲ數部ニ劃シ每部ニ五名以下ノ臨時取調掛ヲ置キ區長

ノ指揮ニ從ヒ所得稅調査ニ關スル下調ヲ爲サシムルコトヲ得

第十七條 税法第二十九條但書ノ所得ニ關スル等級金額ハ北海道廳長官東京府知事

沖繩縣知事之ヲ査定スヘシ

第十八條 調査委員招集ニ應ゼサルカ又ハ會員過半数出席セス若クハ其他ノ事故ニ

依リ第十五條ノ等級金額達期限マテニ調査ヲ了セサルキハ郡區長ニ於テ等級金額

ノ意見ヲ付シ府縣知事ニ差出シ府縣知事ハ之ヲ大藏大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘ

シ

第十九條 第五條ニ違ヒ又ハ第六條第八條ノ届出ヲ怠リタル者ハ壹圓以上壹圓九拾

五錢以下ノ科料ニ處ス

附則

本年ニ限リ第十一條ノ公告ハ十月末日迄ニ第十五條ノ達ハ十二月末日迄ニ之ヲ爲ス

ヘシ(明治二十年九月大藏省令第十三號ヲ以テ改正)

五四八 大藏省訓令第三十五號(明治二十一年七月九日)

所得稅納稅者届出タル書面ニ誤謬ノ嫌アルヲ以テ訂正方申出ツルトキハ郡區長之ヲ

審査シ其事實明確ト認ムル者ニ限リ左ノ區別ニ從テ之ヲ取扱フヘシ

シノ部 九百一

第一項 調査委員會開會以前ニ申出ツル者ハ郡區長ニ於テ之ヲ訂正セシムヘシ
第二項 届出ノ重複ニ涉レル者ハ調査委員會決議後ト雖モ郡區長ニ於テ之ヲ訂正スルコトヲ得

第三項 第二項ノ場合ヲ除クノ外其申出ノ調査委員會決議後ニ係ル者ハ所得税法第十八條及第二十條ニ據リ處分スヘシ

○伺指令

五四九 靜岡縣伺 明治廿年七月

所得税法施行細則第六條ニ一人ニテ數ヶ所云々第二號書式ニ依リ其所得ヲ收入スル各地ノ郡區長ニ可届出ト有之右ハ税法第二條第三項ニ屬スルモノニ限リ届出ヲ爲サシムル儀ニシテ第一項ニ掲記ノ分ハ總テ届出ヲ爲サシムルニ及ハサルヤ

同第十條會社若クハ一人個人ニ對シ其事項ノ問合ヲナスコトヲ得ト有之候ハ共其事項書面ニテ難澁場合ニ於テハ其本人ヲ呼出ヌヲ得ルヤ

大藏省指令 明治二十年七月廿七日

第一項申出ノ通第二項本人ヲ呼出ヌコトハ相成ラス

五五〇 岡山縣問合 明治二十年九月十五日

所得税法第二十四條ニ據リ處罰シタルモノハ其違税金追徴ニ不及候テ然ルヘキヤ

大藏省主税局回答 明治二十年九月廿九日

右ハ處罰ヲ經ルト雖モ其違税金ハ仍モ追徴スヘキ等ニ有之候

五五一 滋賀縣伺 明治二十年十二月二日

所得税納稅者他ノ郡區役所轄内ニ轉居セントスル時及轉居シタル時ハ其地ノ戶長ヲ經テ届出郡區長ハ直ニ轉居者ノ所得税ニ係ル一切ノ事項ヲ轉居先郡區長ニ通報スヘキ等本年五月貴省令第八號施行細則第八條第九條ニ掲載有之候處既ニ調査會終了後他ノ調査會開會以前ノ郡區ヨリ轉居シタルモノアルトキハ其常人所得税ヲ調査スル爲メ再ヒ調査會ヲ開クニ及ハス郡區長限リ査定セシメ可然哉

大藏省指令 明治二十年十二月六日

伺之通

但郡區長ニ於テ本人届書ニ對シ意見アル時ハ税法第十八條ニ據ルヘシ

(八八)新聞紙條例 明治二十年十二月 勅令第七十五號

朕新聞紙條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

新聞紙條例

第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ發行ノ日ヨリ二週日以前ニ發行地ノ管轄廳東京府ハヲ經由シテ内務省ニ届出ヘシ

第二條 新聞紙發行ノ届書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 題號
- 二 記載ノ種類
- 三 發行ノ時期
- 四 發行所及印刷所

シノ部

四五五ノ一
 四五五ノ二
 四五五ノ三
 四五五ノ四
 四五五ノ五
 四五五ノ六
 四五五ノ七
 四五五ノ八
 四五五ノ九
 四五五ノ一〇
 四五五ノ一一
 四五五ノ一二
 四五五ノ一三
 四五五ノ一四
 四五五ノ一五
 四五五ノ一六
 四五五ノ一七
 四五五ノ一八
 四五五ノ一九
 四五五ノ二〇
 四五五ノ二一
 四五五ノ二二
 四五五ノ二三
 四五五ノ二四
 四五五ノ二五
 四五五ノ二六
 四五五ノ二七
 四五五ノ二八
 四五五ノ二九
 四五五ノ三〇
 四五五ノ三一
 四五五ノ三二
 四五五ノ三三
 四五五ノ三四
 四五五ノ三五
 四五五ノ三六
 四五五ノ三七
 四五五ノ三八
 四五五ノ三九
 四五五ノ四〇
 四五五ノ四一
 四五五ノ四二
 四五五ノ四三
 四五五ノ四四
 四五五ノ四五
 四五五ノ四六
 四五五ノ四七
 四五五ノ四八
 四五五ノ四九
 四五五ノ五〇
 四五五ノ五一
 四五五ノ五二
 四五五ノ五三
 四五五ノ五四
 四五五ノ五五
 四五五ノ五六
 四五五ノ五七
 四五五ノ五八
 四五五ノ五九
 四五五ノ六〇
 四五五ノ六一
 四五五ノ六二
 四五五ノ六三
 四五五ノ六四
 四五五ノ六五
 四五五ノ六六
 四五五ノ六七
 四五五ノ六八
 四五五ノ六九
 四五五ノ七〇
 四五五ノ七一
 四五五ノ七二
 四五五ノ七三
 四五五ノ七四
 四五五ノ七五
 四五五ノ七六
 四五五ノ七七
 四五五ノ七八
 四五五ノ七九
 四五五ノ八〇
 四五五ノ八一
 四五五ノ八二
 四五五ノ八三
 四五五ノ八四
 四五五ノ八五
 四五五ノ八六
 四五五ノ八七
 四五五ノ八八
 四五五ノ八九
 四五五ノ九〇
 四五五ノ九一
 四五五ノ九二
 四五五ノ九三
 四五五ノ九四
 四五五ノ九五
 四五五ノ九六
 四五五ノ九七
 四五五ノ九八
 四五五ノ九九
 四五五ノ一〇〇

五 發行人、編輯人、及印刷人ノ氏名年齢

編輯人ハ二人以上アルトキハ其主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者タルヘシ但紙面ニ部門ヲ分チ其各部門ニ主任編輯人ヲ設クルコトヲ得

四五五ノ四條
八八ノ二七條
一〇二七條

第三條 届出ヲ爲シタル後、題號、記載ノ種類又ハ發行人ヲ變更セントスルトキハ二週日以前ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ

發行ノ時期、發行所、印刷所、編輯人、印刷人ニ變更アリタルトキハ一週日以内ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ

四五五ノ五條
八八ノ二七條
一〇二七條

第四條 發行人死去シ又ハ法律上其資格ヲ失ヒタルトキハ一週日以内ニ發行人ヲ定メ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ其届出ヲナスマテハ假發行人ノ名義ヲ以テ發行スルコトヲ得

四五五ノ六條
八八ノ二七條
一〇二七條

第五條 發行ノ届出ヲナシタル日又ハ發行休止ノ日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルトキハ其届出ノ効ヲ失フモノトス

四五五ノ七條
八八ノ二七條
一〇二七條

第六條 内國人ニシテ滿二十歳以上ノ男子ニ非サレハ發行人、編輯人、印刷人トナルコトヲ得ス

四五五ノ八條
八八ノ二七條
一〇二七條

公權ヲ剝奪セラレタル者及公權ヲ停止セラレタル者其停止間發行人、編輯人、印刷人トナルコトヲ得ス

四五五ノ九條
八八ノ二七條
一〇二七條

第七條 編輯人、印刷人、ハ互ニ相兼アルコトヲ得ス

四五五ノ十條
八八ノ二七條
一〇二七條

第八條 發行人ハ保證トシテ左ノ金額ヲ届書ト共ニ管轄廳東京府ハニ納ムヘシニ納ムヘシ

四五五ノ十一條
八八ノ二七條
一〇二七條

一 東京ニ於テハ千圓

四五五ノ十二條
八八ノ二七條
一〇二七條

一 京都大阪横濱兵庫神戸長崎ニ於テハ七百圓

四五五ノ十三條
八八ノ二七條
一〇二七條

一 其他ノ地方ニ於テハ三百五十圓

四五五ノ十四條
八八ノ二七條
一〇二七條

一 三回以下發行スルモノハ各前記ノ半額

四五五ノ十五條
八八ノ二七條
一〇二七條

保證金ハ時價ニ準シタル公債證書又ハ國立銀行ノ預手形ヲ以テ之ヲ納ムルコトヲ得

四五五ノ十六條
八八ノ二七條
一〇二七條

學術、技藝、統計、官令又ハ物價報告ニ關スル事項ノミヲ記載スルモノハ本條ノ限ニ非ス

四五五ノ十七條
八八ノ二七條
一〇二七條

第九條 保證金ハ新聞紙ノ發行ヲ廢止シ又ハ其發行ヲ禁止セラレタルトキハ之ヲ還付ス

四五五ノ十八條
八八ノ二七條
一〇二七條

第十條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サス又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メヌシテ發行スルモノハ正當ノ届出ヲナシ又ハ保證金ヲ納ムルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

四五五ノ十九條
八八ノ二七條
一〇二七條

第十一條 新聞紙ハ每號ニ發行人、編輯人、印刷人ノ氏名發行所ヲ記載スヘシ

四五五ノ二十條
八八ノ二七條
一〇二七條

發行人、印刷人、ノ外何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス新聞紙又ハ記載ノ條項ニ署名スル者ハ總テ編輯人ト共ニ其實ニ當ラシム

四五五ノ二十一條
八八ノ二七條
一〇二七條

第十二條 新聞紙ハ其發行毎ニ先ツ内務省ニ二部管轄廳東京府ハ及管轄始審裁判所檢事局ニ各一部ヲ納ムヘシ

四五五ノ二十二條
八八ノ二七條
一〇二七條

第十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付キ其事項ニ關スル當人又ハ關係アル者ヨリ正誤又ハ正誤書辨駁書ノ掲載ヲ求メタルトキハ其求ヲ受ケタル後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲナシ又ハ正誤書辨駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ若シ正誤書辨駁書ノ字數原文ノ二倍ヲ超過スルトキハ其超過ノ字數ニ付其新聞社ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ代價

四五五ノ二十三條
八八ノ二七條
一〇二七條

シノ部

九百五

四五五二五五
四ノ三〇條
八ノ二一三二
八條

四五五四ノ二八
條
八ノ二一三二
二八條

四五五四ノ三三
條
八ノ二一三五
八ノ二九條

四五五四ノ三八
條
八ノ二一三五
九條

四五五二五五
四ノ三二三五
八五六二五五
八條

ヲ要求スルコトヲ得

正誤辨駁ハ原文ト同號ノ活字ヲ用ヒ同一欄内ノ首部ニ掲載スヘシ

正誤辨駁ノ文章若クハ趣旨法律ニ觸ルハトキ又ハ之ヲ求ムル者其氏名住所ヲ明記セサル
トキハ掲載スルヲ要セス

第十四條 官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録セシ事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ於テ正誤又ハ
正誤書辨駁書ヲ掲載シタルキハ當人又ハ關係アル者ノ求メナシト雖モ其新聞紙ヲ得タル
後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤スヘキコト前條ノ例ニ依ル但廣告料ヲ要求スルコ
トヲ得ス

第十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付裁判ヲ受ケタルトキハ其新聞紙ノ次回發行ニ於テ
宣告ノ全文ヲ掲載スヘシ

第十六條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ附セサル以前ニ於テ之ヲ記載スルコトヲ
得ス

傍聽ヲ禁シタル訴訟ニ關スル事項ハ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十七條 刑事ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ記載スルコトヲ得ス

刑事ノ被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲メニスル文書ヲ掲載ス
ルコトヲ得ス

第十八條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略
ニ拘ラス之ヲ記載スルコトヲ得ス

二〇八八ノ一
六二九條
九七

四五五四ノ一
四二五二七
九二〇二二
六二五條
八ノ一九二
三〇條

四五五四ノ三
條
八ノ二一三二
二五條

四五五四ノ一
八二五條
八ノ二〇二四
二五條

八八ノ二二
三二五條

官廳ノ記事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ラス之ヲ記載スルコトヲ
得ス

第十九條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル新聞紙ハ内務大臣ニ於テ其發行
ヲ禁止シ若クハ停止スルコトヲ得

第二十條 新聞紙ノ發行ヲ禁止シ若クハ停止シタルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ發賣頒布
ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十一條 外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト
認ムルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコ
トヲ得

第二十二條 陸軍大臣海軍大臣ハ特ニ命令ヲ發シテ軍隊軍艦ノ進退又ハ軍機軍略ニ關スル
事項ノ記載ヲ禁スルコトヲ得

第二十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付ヤ公訴ヲ起ストキハ檢察官ハ假ニ其新聞紙ヲ差
押フルコトヲ得

裁判官ハ犯罪ノ情狀ニ依リ差押ヘタル新聞紙ヲ沒收スルコトヲ得

第二十四條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付ヤ訴訟ヲ起シタルトキ原告ニ於テ其新聞紙ニ署
名シタル編輯人ハ實際主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者ニアラスシテ他ニ主任編輯人アル
コトヲ證明シタル場合ニ於テハ裁判官ハ其署名シタル編輯人及實際ノ主任編輯人ヲシテ
其ニ其實ニ當ラシムヘシ

四八八ノ二三
二四條

第二十五條

新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ非毀ノ訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確實ヲ得タルトキハ非毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

四五五ノ二〇
四八八ノ九
一〇條

第二十六條 裁判確定ノ日ヨリ一週日以内ニ裁判費用及罰金ヲ完納セヌ又ハ損害ヲ賠償セサルハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ仍ホ足ラサルハ刑法徵收處分ニ依ル保證金ヲ以テ裁判費用賠償及罰金ニ充テタルトキハ發行人ハ管轄廳東京府ハノ通知ヲ得タル日ヨリ一週日以内ニ其缺額ヲ完納スヘシ若完納セサルトキハ其之ヲ完納スルニ至ルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

四五五ノ二
二二三ノ三
四八八ノ三五
三六條

第二十七條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サヌ又ハ第六條第七條第十一條第一項第十二條ヲ犯シ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メヌシテ發行シタルトキハ發行人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但詐稱ノ罪ヲ犯スモノハ罰發行人ニ同シ
第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキハ發行人一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
第八條ノ末項ニ屬スル新聞紙ニシテ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ノ事項ヲ記載シタルトキハ編輯人罰前項ニ同シ

四五五ノ二
八三〇條
八ノ三五
三六條

第二十八條 第十三條第十四條第十五條ニ違フトキハ編輯人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五五ノ三
一三三ノ三
八八ノ三五
三六條

第二十九條 第十六條第十七條第十八條ニ違フトキハ編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五五ノ三
三六條

第三十條 第二十一條ニ違ヒ發賣頒布ヲ爲ス者ハ罰前條ニ同シ

四五五ノ三
三六條

第三十一條 第二十二條ニ違フトキハ發行人編輯人ヲ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五五ノ三
三六條

第三十二條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ論說ヲ記載シタルトキハ發行人編輯人印刷人ヲ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

四五五ノ三
三六條

本條ヲ犯ス者ハ其犯罪ノ用ニ供シタル器械ヲ沒收ス

四五五ノ三
三六條

第三十三條 猥褻ノ新聞紙ヲ發行メルトキハ發行人編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五五ノ三
三六條

第三十四條 第十三條ノ場合ニ於テ私事ニ係ルモノハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

四五五ノ三
三六條

第三十五條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

四五五ノ三
三六條

第三十六條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ六箇月トス

四五五ノ三
三六條

第三十七條 時々ニ發行スル雜誌ノ類ハ出版條例ニ依ルモノヲ除クノ外皆此條例ニ依ル

參照

○關係法令

五五二 太政官第二十一號布達 明治十六年六月

シノ部

凡ソ官報ニ登載シタルモノハ新聞紙條例ニ依リ記載スルコトヲ得サル者ト雖モ各新聞紙ニ於テ其文ヲ抄録スルコトヲ得
官報ニ於テ新聞紙ニ記載シタル事項ノ誤ヲ正ストキハ新聞紙條例第二十九條ニ從ヒ正誤ノ全文ヲ登載スヘシ

○
[五五三] 内務省甲第十七號達 明治十八年五月

新聞紙ニシテ他ノ新聞紙(歐文新聞ヲ除ク)ニ掲載スル論說ヲ十日以内ニ其新聞紙ニ轉載スルルハ必ス原新聞紙ノ持主又ハ社主ノ承諾ヲ要セシメ候條現ニ發行ノ新聞紙ハ直チニ向後發行セントスルモノハ出願ノ際其旨持主又ハ社主ヘ相達左ノ書式ニ準シ受書ヲ徵シ當省ヘ進達可致此旨相達候事
但豫メ轉載ノ目的ヲ定メ發行スルモノハ別ニ本文原新聞持主又ハ社主ノ承諾證爲差出受書一同進達候儀ト心得ヘシ

書式

今般何新聞發行相願候ニ付准 歐文ノ新聞紙ヲ除キ他ノ新聞紙ニ掲載スル論說ヲ十日以内ニ轉載致候儀ハ必ス原新聞紙ノ持主又ハ社主ノ承諾ヲ得タル上記載可致候也
年月日 持主何ノ誰

警視總監宛
府知事縣令

豫メ轉載ヲ目的トスル新聞紙原新聞紙持主又ハ社主ノ承諾證ニ添付スル書式

今般准許相願候何々新聞ハ何々新聞何々新聞何々新聞ニ掲載スル論說ヲ轉載致候目的ニ付何々新聞何々新聞持主又ハ社主ノ承諾ヲ得候條別紙承諾證相添此段御届仕候也
年月日 持主何ノ誰
警視總監宛
府知事縣令

○舊令

[五五四] 太政官第十二號布告 明治十六年四月

新聞紙條例別冊ノ通改正ス

(別冊)

新聞紙條例

第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ其發行所ノ管轄廳(東京府ハ警視廳)ヲ經由シテ内務卿ニ願出テ准許ヲ受ク可シ時々ニ別行スル雜誌雜報ノ類ハ皆此條例ニ依ル

第二條 新聞紙發行ノ願書ハ左ノ事項ヲ掲ケ持主若クハ社主ヨリ差出ス可シ
一 題號

二 記載ノ題目(政治法律農工商業等ノ類)

三 別行ノ定期又ハ無定期(毎日毎週毎月又ハ無定期ニシテ逐號發行スル者)

四 發行所及印刷所

五 持主若クハ社主及ヒ編輯人印刷人ノ族籍身分姓名年齢住所

第三條 社長幹事其他等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス新聞紙ニ署名スル者ハ總テ持主社主ノ例ニ依ル

第四條 新聞紙ノ題號記載ノ題目又ハ持主社主ヲ變更セントスルルハ更ニ管轄廳(東京府ハ警視廳)ヲ經由シテ内

項一八八ノ
一八八ノ
一八八ノ

シノ部

三條

四條

六條

七條

八條

九條

十條

十一條

十二條

十三條

十四條

十五條

十六條

十七條

十八條

十九條

二十條

二十一條

二十二條

二十三條

二十四條

二十五條

務卿ニ願出テ准許ヲ受ク可シ

前項ノ外第二條ノ題書ニ掲ク可キ事項ニ於テ變更アルハ七日以内ニ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ届出ツ可シ
第五條 持主若クハ社主死去シ又ハ法律上其資格ヲ失ヒタルハ假ニ持主社主ヲ定メテ新聞紙ヲ發行スルコトヲ得但七日以内ニ管轄廳(東京府ハ警視廳)ヲ經由シテ内務卿ニ願出准許ヲ受ク可シ

第六條 編輯人印刷人ハ互ニ相雜スルコトヲ得ス
第七條 内國人ニシテ滿二十歳以上ノ男子ニ非サレハ持主社主編輯人印刷人トナルコトヲ得ス
公権ヲ剝奪セラレタル者ハ持主社主編輯人印刷人トナルコトヲ得ス公権ヲ停止セラレ及ヒ演説ヲ禁止セラレタル者其停止期間亦同シ

第八條 新聞紙ノ發行ヲ願出ルトキハ保證トシテ左ノ金額ヲ納ム可シ但專ラ學術技術統計及官令又ハ物價報告ニ係ル者ハ此例ニ在ラス
東京ニ於テハ千圓
京都大阪横濱兵庫神戸長崎ニ於テハ七百圓
其他ノ地方ニ於テハ三百五十圓

一月三回以下發行スル者ハ各前項ノ半額
第九條 保證金ハ持主若クハ社主ヨリ爲替方又ハ銀行ノ預手形成ハ時價ニ準シタル公債證書ヲ以テ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ納ム可シ

新聞紙ノ發行ヲ廢止シ又ハ禁止セラレタルハ保證金ヲ還付ス
第十條 新聞紙發行ノ准許ヲ得タル日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルハ其准許ノ効ヲ失フ者トス
刑行ノ定期ニ發行セサルトキハ七日以内ニ休業ノ旨ヲ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ届出ツ可シ休業届出ノ日ヨリ五十日ヲ過キ再ヒ發行セサル者亦前項ニ同シ
無定期ノ新聞紙前號刑行ノ日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサル者亦同シ

三條

四條

五條

六條

七條

八條

九條

十條

十一條

十二條

十三條

十四條

十五條

十六條

十七條

十八條

十九條

二十條

二十一條

二十二條

二十三條

二十四條

二十五條

二十六條

二十七條

二十八條

二十九條

三十條

三十一條

三十二條

三十三條

三十四條

三十五條

三十六條

三十七條

三十八條

三十九條

四十條

四十一條

四十二條

四十三條

四十四條

四十五條

四十六條

四十七條

四十八條

四十九條

五十條

五十一條

五十二條

五十三條

五十四條

五十五條

五十六條

五十七條

五十八條

五十九條

六十條

第十一條 新聞紙ハ毎號ニ持主若クハ社主及編輯人印刷人ノ氏名并發行所ヲ記載ス可シ

第十二條 發行所ノ外ニ於テ發賣スル者ハ其發賣所及發賣人ノ氏名住所ヲ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ届出ツ可シ
第十三條 新聞紙ハ其刑行毎ニ先ツ内務省ニ二部管轄廳(東京府ハ警視廳)及本管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ各一部ヲ納ム可シ

第十四條 新聞紙ニ記載シタル事項治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞乱スル者ト認ムルトキハ内務卿ハ其發行ヲ禁止若クハ停止スルコトヲ得
第十五條 各地方(東京府ヲ除ク)ニ於テ發行スル新聞紙前條ニ觸ル、者ト認ムルトキハ府知事縣令ハ其發行ヲ停止シ内務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フ可シ

第十六條 新聞紙ノ發行ヲ禁止若クハ停止シタルトキハ内務卿ハ其新聞紙ヲ差押ヘ又ハ發賣ヲ禁止シ其情重キ者ハ印刷器ヲ差押フルコトヲ得
府知事縣令ニ於テ停止ヲ命シタルトキハ其新聞紙ヲ差押ヘ及發賣ヲ禁止スルコトヲ得ルモ内務卿ノ指揮ニ非サレハ印刷器ヲ差押フルコトヲ得ス

第十七條 一人又ハ一社ニシテ數個ノ新聞紙ヲ發行スル者一個ノ新聞紙ヲ停止セラレタルトキハ其停止中他ノ新聞紙ヲ發行スルコトヲ得ス

第十八條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ關スル犯罪ハ持主社主編輯人印刷人及筆者譯者ハ共犯ヲ以テ論ス
第十九條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ關スル犯罪ハ其情狀ニ因リ裁判官ニ於テ犯罪ニ係ル新聞紙ヲ沒收スルコトヲ得其告發管轄廳ニシテ實際ニ檢察官警務官ハ裁判確定ニ至ル迄犯罪ニ係ル新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十條 裁判確定ノ日ヨリ七日以内ニ裁判費用及罰金ヲ納完セス又ハ損害ヲ賠償セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツ可シ仍ホ足ラサルトキハ刑法第二十七條及第四十七條ニ依ル

保證金ヲ以テ裁判費用賠償及罰金ニ充テタルトキハ持主若クハ社主ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ノ通知ヲ得タル日ヨリ七日以内ニ其欠額ヲ納完ス可シ若シ納完セサルトキハ其新聞紙發行准許ノ効ヲ失フ者トス

第八八ノ
二七條

第二十一條 准許ヲ得ヌ又ハ准許ノ効ヲ失ヒタル後私ニ新聞紙ヲ發行スル者ハ持主社編輯人印刷人各六月以上三年以下ノ輕懲罰ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ仍ホ其發行シタル新聞紙ヲ沒收ス其禁止停止ノ處分ヲ犯シ及第十七條ニ違テ發行シタル者亦同シ

第八八ノ
二七條

第二十二條 詐偽ノ願書若クハ屆書ヲ差出シタル者及ヒ第四條第一項第五條ニ違フ者ハ持主若クハ社主一月以上一年以下ノ輕懲罰ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ編輯人印刷人知情ヲ知ル者亦同ク處斷ス前項ノ場合ニ於テ内務卿ハ其新聞紙ノ發行ヲ禁止若クハ停止スルコトヲ得

第八八ノ
二七條

第二十三條 第四條第二項及第十條第十條第十一條第十二條第十三條ニ違フ者ハ持主若クハ社主拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス其第十一條ニ違フ者ハ編輯人印刷人亦同ク處斷ス

第八八ノ
二七條

第二十四條 禁止セラレタル新聞紙ノ持主社編輯人印刷人ハ禁止ノ日ヨリ二年間持主社編輯人印刷人トナルコトヲ得ヌ犯ス者ハ三月以上三年以下ノ輕懲罰ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第八八ノ
二七條

第二十五條 沒收若クハ差押ノ處分ヲ受ケ又ハ發賣ヲ禁止セラレタル後其新聞紙ヲ發賣又ハ頒布シタル者ハ發賣者頒布者受賣者ヲ問ハス各十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八八ノ
二七條

第二十六條 新聞紙ニ記載シタル事項ハ其原稿ヲ刷行ノ日ヨリ三週間保存シ官署ノ訊問ニ備フ可シ違フ者ハ編輯人拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八八ノ
二七條

第二十七條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付官署ヨリ其出所ノ訊問ヲ受ケタルトキハ之ヲ證明スヘシ違フ者ハ編輯人罰前條ニ同シ

第八八ノ
二七條

第二十八條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付裁判ヲ受ケタルトキハ其新聞紙ニ於テ直ニ宣告ノ全文ヲ掲載ス可シ違フ者ハ編輯人罰前條ニ同シ

第八八ノ
二七條

第二十九條 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付關係アル者ヨリ正誤ヲ求メタルトキハ其求メヲ得タルヨリ次回

第八八ノ
二七條

又ハ第三回ノ刷行ニ於テ別ニ一欄ヲ設ケ正誤ノ文ヲ掲載シ又ハ正誤ス可シ違フ者ハ編輯人罰前條ニ同シ但其正誤ノ趣意法律ニ觸ル、者及之ヲ求メタル者ノ姓名詳ナラサルトキハ此限ニ在ラス

第八八ノ
二七條

第三十條 官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録セシ事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ正誤ヲ載セタルトキハ關係アル者ノ求メナシト雖モ其官報又ハ新聞紙ヲ得タルヨリ次回又ハ第三回ノ刷行ニ於テ正誤ス可キコト總テ前條ノ例ニ依ル(十八年第二十一號) 布告ヲ以テ改正

第八八ノ
二七條

官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録セシ事項ハ其官報又ハ新聞紙ノ題號并刷行ノ年月日ヲ掲載スヘシ違フ者ハ編輯人二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス(十八年第二十一號) 布告ヲ以テ追加

第八八ノ
二七條

第三十一條 式ニ依リ宣布セサル公文及上書建白請願書ハ當該官印ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ記載スルコトヲ得ヌ違フ者ハ二月以上二年以下ノ輕懲罰ニ處シ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス 其大意ヲ録シ若クハ草按ヲ掲載スルモ亦同シ

第八八ノ
二七條

第三十二條 官署院ノ議事及府縣會ノ傍聽ヲ禁シタル議事ハ詳略ニ拘ラス之ヲ記載スルコトヲ得ヌ違フ者ハ罰前條ニ同シ

第八八ノ
二七條

第三十三條 重罪輕罪ノ豫審ハ公判ニ付セサル以前ニ之ヲ記載スルコトヲ得ヌ裁判官審判ノ議事及傍聽ヲ禁シタル既經ノ辨論ハ之ヲ記載スルコトヲ得ヌ違フ者ハ罰前條ニ同シ

第八八ノ
二七條

第三十四條 陸軍海軍軍令ハ特ニ命令ヲ下シテ軍隊軍艦ノ進退及一般ノ軍事ヲ記載スルコトヲ禁スルコトヲ得其禁ヲ犯ス者ハ三月以上三年以下ノ輕懲罰ニ處シ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情重キ者ハ印刷器ヲ沒收ス

外務卿ハ外交上ノ事件ニ付特ニ命令ヲ下シテ記載ヲ禁スルコトヲ得其禁ヲ犯ス者ハ罰前項ニ同シ

第三十五條 新聞紙ヲ以テ人ヲ欺誑シ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ刑法ノ例ニ依ル其欺誑ニ止ル者ハ本刑ニ二等又ハ三等ヲ減ス

第三十六條 刑罰第二編第一章ノ刑ニ觸ル、者ハ印刷器ヲ沒收ス

第三十七條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ論說ヲ記載シタル者ハ一年以上三年以下ノ輕懲罰ニ處シ百圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其第三十五條ニ觸ルル者ハ重ニ從テ處斷ス

本條ヲ犯ス者ハ其印刷器ヲ沒收ス

第三十八條 成法ヲ誹毀シテ國民法ニ違フノ義ヲ亂ル者及顯ハニ刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論ヲ爲ス者ハ一月以上一年以下ノ輕懲罰ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十九條 撰載ノ文辭圖畫及辯論ヲ寓シタル戲謔ヲ掲載スルコトヲ得ス犯ス者ハ二十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 第二十九條ノ場合ニ於テ被害者ノ私事ニ係ル者ハ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四十一條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四十二條 外國ノ新聞紙及書籍ヲ譯出シ新聞紙ニ記載スル者亦此條例ニ依ル

附則

現今發行ノ新聞紙ハ東京府下ハ此條例發布ノ日ヨリ其他ノ地方ハ到達ノ日ヨリ三十日以内ニ此條例ニ從ヒ願書及保證金ヲ警務廳(東京府ハ警視廳)ニ差出ス可シ若シ期限内ニ差出サハルトキハ准許ノ効ヲ失フ者トス其願書及保證金ヲ差出シタル者ハ引續キ發行スルコトヲ得

○關係法令

五五五 司法省第十號訓令 明治十九年 六月

新聞紙條例第三十三條ニ依リ傳聞ヲ轉シタル既論ノ辯論ハ之ヲ記載スルコトヲ得ストアルハ公判ノ半ヨリ傳聞ヲ轉シタル場合ト雖モ總テ其既論ノ當日ノ辯論ヲ記載スルコトヲ得サル儘ニシテ裁判官傳聞ヲ禁スルノ命令ヲ爲シタル時ヨリ以下ノ辯論ノミヲ指スモノニ非ス右ハ往々疑義ヲ生シ傾向モ有之趣ニ付此旨心得ヘシ

○何指令

五五六 神戸始審裁判所檢事伺 明治十九年 十二月廿六日

新聞紙持主編輯人條例ニ違ヒシ體刑ニ處セラレ上告保釋中尙ホ其新聞ニ署名スルヲ得ルヤ直ク御指令ヲ待ツ

司法省指令 明治十九年 十二月廿八日

新聞持主編輯人上告中新聞ニ署名スルヲ得ルヤノ件伺ノ趣右ハ署名スルヲ得ル儘ト心得ヘシ

○判決例

五五七 明治十九年乙第千十一號

東京府平民 加藤 正平 外一名

新聞紙條例第三十一條ニ(式)ニ依リ宣告セサル公文云々ハ當該官司ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ記載スルコトヲ得ス違フ者ハ二月以上三年以下ノ輕懲罰ニ處シ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス(ト)アリ又同第二十七條ニ(ハ)新聞紙ニ記載シタル事項ニ付官署ヨリ其所ノ訊問ヲ受ケタルトキハ之ヲ證明スヘシ違フ者ハ編輯人罰前條ニ同シ(ト)アリツテ許可ヲ得ス公文ヲ記載シタルト出所ヲ證明セサルトハ正條ヲ異ニスルノミナラス刑ニモ輕重アリ且一方ハ持主編輯人印刷人及筆者譯者ヲ罰シ一方ハ編輯人ノミ罰スル等ノ差異アルニ依ルモ各別ノ所爲ニシテ一個ノ所爲ニアラサルヤ明白タリ故ニ原裁判所於テ東京府廳ノ許可ヲ得ス同廳ノ起草ニ係ル公文タルノ情ヲ知テ記載シタル點ニ付テハ假持主兼印刷人ト編輯人ノミヲ各別ニ處罰シタルハ相當ノ疑義ニシテ事實ノ理由ニ於ケルモ決シテ離斷アリト云フヲ得ス

明治二十年一月二十七日

五五八 明治二十年乙第百七十四號

鳥取縣平民 安田 善代 職

凡ソ官署ト關係シ何レノ官署ト特指セサル公文ニ在テハ本廳ノ官署ト解釋スヘキモノナルヲ以テ鳥取縣署者ハ即

シノ部

九百十七

新聞紙條例第二十六條第二十七條ノ官署ニ違背ナルモノトス而シテ新聞紙條例第二十六條第二十七條等ハ取締
注ニシテ警察官ハ其取締ヲ爲スノ職權ヲ有スルモノナルヲ以テ其新聞紙ニ記載シタル事項ノ自他ヲ問ハス警察官
其職權ヲ以テ新聞紙編輯所ニ臨ミ原稿保存ノ如何原稿出所ノ如何ヲ訊問スル固ヨリ當然ニシテ編輯人ハ之ヲ拒ム
ヲ得サルモノナリ

明治二十年二月二十八日

五五九 明治二十年乙第八百三十一號

大阪府平民

首藤 文雄

外三名

明治十六年第十二號布告並新聞紙條例第三十三條ニ重罪輕罪云々裁判官審判ノ議事及傍聽ヲ禁シタル條既ハ
ハ之ヲ記載スルヲ得ストアルノ律意ハ裁判官カ被告事件ノ模様ニ因リ又ハ被告人ノ辯論中治安ニ妨害アリト認メ
タル時ハ其職權ヲ以テ公判ノ傍聽ヲ禁止スルモノニ付即チ裁判官カ治安ニ妨害アリト認メタル事項ヲ新
聞紙上ニ記載スルヲ得サルノ精神ナレハ時ニ其禁止後ノ事柄及禁止ヲ命シタル時ノ一言一句ノミニ限ラス其前ノ
辨論ニテモ共ニ密著シテ裁判官カ治安ニ妨害アリト認メタル事項ナルニ於テハ新聞紙上之ヲ掲載スルヲ得サルモ
ノナリ然レモ裁判官カ傍聽ヲ禁シ治安ニ妨害アリト認メタル事項ノ外ハ假令一席中ニ接續シタル辨論ニテモ新聞
紙上ニ記載スルカ如キハ前第三十三條ノ制裁スヘキ限リニアラストス今本案事件ニ付原判文ヲ檢スルニ其前段ニ
於テ被告文雄五郎ノ兩名ハ明治廿年九月七日發覺セシ大阪日報第五百四十八號附錄第二期臨時重罪裁判所公判
傍聽筆記三同月六日稍遲示ノ辨論ハ中途ニ在テ裁判長ヨリ傍聽禁止ノ旨渡ヲ爲シタルモノナルニ其禁止ノ旨渡迄
ノ陳述ヲ記載シ經三重岡ハ浪雜新聞第三百八號附錄前大阪臨時重罪裁判所公判傍聽筆記ニ明治二十年九月六日右
示ノ辨論ハ傍聽禁止セラレタルモノナルニ禁止ニ到ル迄ノ陳述ヲ記載シトアリテ後段ニ至リ右新聞紙附錄ノ文
意ヲ臨時重罪裁判當日ノ公判始末書ノ按語ニ對照スレハ多少減却セシ文意アリト雖モ到底禁止ニ到ル所ハ接續云

々トノミ記載シテ果シテ裁判官カ治安ニ妨害アリト認メ傍聽ヲ禁止シタル事項ヲ記載セシモノナル乎將ク其事項ニ
接續ストノ文同ハ未タ治安ニ妨害アリト認メサル以前ノ事項ヲ兩新聞紙ニ掲載セルニ過サル乎ハ原判文上ニ分明
ナラス抑モ此等ノ事實ハ本案有罪無罪ノ點ヲ分別スルニ最モ必要ノ事實ナルニ今其理由ノ明示ヲ缺キタルハ即治
罪法第三百四條ニ違背セル不法ノ裁判ニシテ上告未項既肯ノ如ク破毀ノ原由アリト認メタルヲ以テ他ノ論點ニ對
シ逐一説明ヲ要ス破毀スヘキモノト判定ス因テ治罪法第四百二十八條ニ則リ原裁判官渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ適
法ノ審判ヲ受ケシムル爲メ名古屋控訴院ニ移スモノナリ

明治二十一年一月二十八日

五六〇 明治十九年乙第一九六號

三重縣士族

大西 重寛

原裁判官於テ被告人カ准許ヲ得テ發行スル作新日報明治十九年五月四日第一號ヲ刷行シナカラ之ヲ安濃津始審
裁判所檢事局ニ納付セサルノ事實アリト認メタルハ至ク其判文冒頭ニ明示シタル證據ニ心證ヲ資リ判定シタルモ
ノナレハ此判定タル他人ノ得テ味ヲ容ルハ得サルモノトス何トナレハ治罪法第四百十六條第二項ニ規定スルカ
如ク事實ノ有無ヲ判定スルハ承審判官ノ特有ナルニ其職權上爲シタル事實ノ判定ナルヲ以テナリ又新聞紙
條例第十三條ニ新聞紙ハ其刷行毎ニ云々本管始審裁判所檢事局ニ各一部ヲ納ムヘントアルヲ以テ之ヲ刷行シタル
時直ニ納付セサルヲ得サルモノナレハ若シ之レニ背キ納付セサル以上ハ其罪タル直ニ組成スルモノトス故ニ原裁
判官於テ被告人カ發覺シタル新聞紙ヲ納付セサル事實ヲ認メテ右第十三條ニ背キタルモノトシタルハ不法ニ非サ
ルヲ以テ假令被告人ハ後日之ヲ納付シタルモ一旦組成シタル罪ノ消滅スヘキノ理アラサレハ原裁判官於テ前掲ノ
如ク處斷シタルハ相當ニシテ不法ノ裁判ト云フヲ得ス因テ上告論旨總テ其効ナキモノトス

明治十九年十二月十一日

五六二 明治十九年之第千二百二十七號

島根縣士族 小貝信義
同縣 士族 岡田利景

新聞紙條例第三十一條ニ依リ宣布セサル公文トアリ而シテ原裁判官ノ認定シタル事實ニ據ルニ公文即チ島根縣學務課長石井信敬ヨリ各郡長ヘ宛發シタル云々トアリ抑學務課長ノ職務ヲ以テ郡長ニ對シ發シタル所ノ文書ハ法律ノ所謂公文ナリ又式ニ依リ宣布スルトハ其管下ノ人民一般者クハ區戶長又ハ特定ノ者ニ對シ布達スルヲ云フモノニシテ學務課長ヨリ郡長ニ宛テ發シタル迄ノ公文ハ法律上宣布シタルモノト云フヲ得サルモノトス以上辨明スル如ク新聞紙條例第三十一條式ニ依リ宣布セサル公文ニ適當ナル島根縣學務課長石井信敬ヨリ各郡長ヘ宛タル文書ヲ當該官司ノ許可ヲ得ヌ山陰新聞第六百五十六號雜報欄内ニ記載シタルハ該第三十一條ノ違犯ニシテ同條及ヒ第十八條ニ依リ處斷シタルハ原裁判官ノ認定シタル事實ニ適當ナルモノニテ法律ノ錯誤ニアラス
明治十九年十二月二十七日

五六二 明治二十一年乙第一四五號

島取縣平民 安田喜代藏
外一名

新聞紙條例第三十一條ニ依リ宣布セサル公文及上書連白請願書云々トアリ之ヲ要スルニ自身一己ノ利害ニ關シ又ハ公共ノ利害ニ關スルトトハ總テ該官司ニ對シ上申スル處ノ書面ノ如キハ該上書中ニ包含スルハ勿論其の上申書ノ寫眞ニ進達後ニ係ルト否トニ關セヌ其モ當該官司ノ許可ヲ得ルニアラサルヨリハ之ヲ新聞紙ニ記載スルコトヲ得サルモノトス今原判文ニ就テ其認定シタル事實ニ依レハ被告人等ニ於テ島取縣會ヨリ內務大臣兩大臣ニ呈呈スル處ノ上申書ナルモノハ概略ヲ當該官司ノ許可ヲ得ヌ島取新聞ニ掲載シタルニ在ルヤ明カナレハ假令停職登記ニシテ未ダ當該官司ヘ進達セサルモノトアリト雖モ已ニ上申書ト定マリタルモノヲ掲載シタル上ハ舊新聞紙條例第三十一條ノ違犯者タル免レ得ヘカラサルモノニ付原裁判官カ同條例ヲ適用處斷シタルハ相當ノ根據ニシテ錯誤ニアラサルハ勿論其他論告スル處ハ原裁判官カ爲シタル事實判定ヲ非難シ徒ニ苦情ヲ唱フルニ過キスシテ一モ適法ノ原由之ナキモノトス
明治二十一年六月二十五日

(八九) 出版條例 明治二十年十二月 勅令第七十六號
出版條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

出版條例
第一條 凡ソ機械會密其他何等ノ方法ヲ以テスルヲ問ハス文書圖書ヲ印刷シテ之ヲ發賣シ又ハ頒布スルヲ出版ト云ヒ其文書ヲ著述シ又ハ編纂シ若クハ圖書ヲ作爲スル者ヲ著作者ト云ヒ發賣頒布ヲ擔當スル者ヲ發行者ト云ヒ印刷ヲ擔當スル者ヲ印刷者ト云フ
第二條 新聞紙又ハ時々ニ發行スル雜誌ヲ除クノ外文書圖書ノ出版ハ總テ此條例ニ依ルヘシ但雜誌ニシテ專ラ學術技藝ニ關スル事項ヲ記載スルモノハ內務大臣ノ許可ヲ得テ此條例ニ依ルコトヲ得
第三條 文書圖書ヲ出版スルトキハ發行ノ日ヨリ到達シ得ヘキ日數ヲ除キ十日前製本三部ヲ添ヘ內務省ヘ届出ヘシ
第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版スルトキハ其官廳ヨリ發行前製本三部ヲ內務省ニ送付スヘシ
第五條 出版届ハ著作者又ハ其相續者及發行者連印ニテ之ヲ差出スヘシ但非賣品ハ著作者ノミニテ届出ルコトヲ得著作者又ハ其相續者ヲ知ルヘカラサルトキハ其由ヲ記シ發行者

四五六七ノ一編
八八九ノ一二三
一三四
三四條
四五六四八九
ノ一二三四
四五六
七ノ一二三四
八ノ一二三四
九ノ一二三四
一〇ノ一二三四
一一ノ一二三四
一二ノ一二三四
一三ノ一二三四
一四ノ一二三四
一五ノ一二三四
一六ノ一二三四
一七ノ一二三四
一八ノ一二三四
一九ノ一二三四
二〇ノ一二三四
二一ノ一二三四
二二ノ一二三四
二三ノ一二三四
二四ノ一二三四
二五ノ一二三四
二六ノ一二三四
二七ノ一二三四
二八ノ一二三四
二九ノ一二三四
三〇ノ一二三四
三一ノ一二三四
三二ノ一二三四
三三ノ一二三四
三四ノ一二三四
三五ノ一二三四
三六ノ一二三四
三七ノ一二三四
三八ノ一二三四
三九ノ一二三四
四〇ノ一二三四
四一ノ一二三四
四二ノ一二三四
四三ノ一二三四
四四ノ一二三四
四五ノ一二三四
四六ノ一二三四
四七ノ一二三四
四八ノ一二三四
四九ノ一二三四
五〇ノ一二三四
五一ノ一二三四
五二ノ一二三四
五三ノ一二三四
五四ノ一二三四
五五ノ一二三四
五六ノ一二三四
五七ノ一二三四
五八ノ一二三四
五九ノ一二三四
六〇ノ一二三四
六一ノ一二三四
六二ノ一二三四
六三ノ一二三四
六四ノ一二三四
六五ノ一二三四
六六ノ一二三四
六七ノ一二三四
六八ノ一二三四
六九ノ一二三四
七〇ノ一二三四
七一ノ一二三四
七二ノ一二三四
七三ノ一二三四
七四ノ一二三四
七五ノ一二三四
七六ノ一二三四
七七ノ一二三四
七八ノ一二三四
七九ノ一二三四
八〇ノ一二三四
八一ノ一二三四
八二ノ一二三四
八三ノ一二三四
八四ノ一二三四
八五ノ一二三四
八六ノ一二三四
八七ノ一二三四
八八ノ一二三四
八九ノ一二三四
九〇ノ一二三四
九一ノ一二三四
九二ノ一二三四
九三ノ一二三四
九四ノ一二三四
九五ノ一二三四
九六ノ一二三四
九七ノ一二三四
九八ノ一二三四
九九ノ一二三四
一〇〇ノ一二三四

シノ部

ヨリ差出スヘシ

四五六七ノ一四
四五八ノ一三
六七一ノ四條

學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ届ハ其學校會社等ヲ代表スル者發行者ト連印シテ之ヲ差出スヘシ

四五六七ノ一八
四五八ノ一五
二二條

第六條 文書圖書ノ發行者ハ文書圖書ノ販賣ヲ以テ營業トスル者ニ限ル但著作又ハ其相續者ハ發行者ヲ兼マルコトヲ得

四五六七ノ二一
四五八ノ一八
九ノ三五二二
條

第七條 文書圖書ヲ印刷スル者ハ其發行ト否トヲ問ハス印刷ノ年月日及印刷者ノ氏名住所ヲ記載シ其發行ニ係ルモノハ發行者ノ氏名住所ヲ併セテ記載スヘシ

四五六四
四五七ノ二五
條

第八條 社則塾則引札諸藝ノ番付普通ノ書式アル諸紙ノ用紙又ハ證書ノ類ハ第三條第六條ニ據ルヲ要セス

四五六四
四五七ノ二五
條

第九條 文書圖書ノ冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル者ハ其都度第三條ノ手續ヲ爲スヘシ但雜誌ノ類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ經テ其手續ヲ省略スルコトヲ得

四五六四
四五七ノ二五
條

第十條 一タヒ出版届ヲ爲シタル文書圖書ノ再版ハ出版届ヲ要セスト雖モ若シ改正増減シ又ハ註解附録縮圖等ヲ加ヘタルモノハ仍ホ第三條ニ依ルヘシ

四五六四
四五七ノ二五
條

第十一條 演說者クハ講義ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲ストキハ演說者若クハ講義者ヲ以テ著作トス但演說者若クハ講義者ノ許諾ヲ經テ出版シタルモノニ關シテハ其演說者若クハ講義者ハ著作ノ責ニ任セス

四五六四
四五七ノ二五
條

他人ノ講義又ハ公然ナラサル演說ハ其講義者又ハ演說者ノ許諾ヲ經ルニ非サレハ其筆記ヲ出版スルコトヲ得ス但本項ニ違フ者ハ版權條例ニ依リ其實ニ任セシム

四五六四
四五七ノ二五
條

第十二條 數人ノ著作若クハ數人ノ講義演說ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲スモノハ編纂者ヲ著作者ト見做スヘシ

四五六四
四五七ノ二五
條

前條第一項ノ但書及第二項ハ本條ニ適用スヘシ

四五六四
四五七ノ二五
條

第十三條 翻譯ハ翻譯者ヲ以テ著作者ト見做スヘシ但翻譯トハ漢文ヲ延譯スルモノヲモ包含ス

四五六四
四五七ノ二五
條

第十四條 學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ハ其出版届ヲナス者ヲ以テ著作者ト見做スヘシ

四五六四
四五七ノ二五
條

第十五條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略ニ拘ラス之ヲ出版スルコトヲ得ス

四五六四
四五七ノ二五
條

第十六條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル文書圖書ヲ出版シタルトキハ内務大臣ニ於テ其發賣頒布ヲ禁シ其刻版及印本ヲ差押コルコトヲ得ス

四五六四
四五七ノ二五
條

第十七條 外國ニ於テ印刷シタル文書圖書ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其文書圖書ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其印本ヲ差押フルコトヲ得

四五六四
四五七ノ二五
條

第十八條 軍事ノ機密ニ關スル事項ヲ記載スル文書圖書ヲ出版スルコトヲ得ス

四五六四
四五七ノ二五
條

第十九條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ付セサル以前ニ於テ之ヲ出版スルコトヲ得ス

四五六四
四五七ノ二五
條

得ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第九百二十四
第二十條 刑事ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ出版スルコトヲ得ス
刑事被告人又ハ刑事ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ出版スルコトヲ得ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十一條 第三條ノ届出ヲ爲サスシテ文書圖書ヲ出版シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十二條 發行者自己ノ氏名住所又ハ印刷者ノ氏名住所又ハ出版ノ年月日ヲ記載セサル文書圖書ヲ發行シタルトキハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ其之ヲ記載スルモ實ヲ以テセサルモハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第六條ヲ犯ス者罰前項ニ同シ

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十三條 印刷者其氏名住所ヲ其印刷スル所ノ文書圖書ニ記載セス若クハ記載スト雖モ實ヲ以テセサルモハ罰前條ニ同シ

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十四條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ文書ヲ出版シタルトキハ著作發行者印刷者共犯ヲ以テ論シ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十五條 猥褻ノ文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

三三三三三三三三

ニ依テ處分ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十七條 本條例ニ依リ出版ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス其發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ發賣頒布スルトキハ發行者又ハ發賣頒布者罰前項ニ同シ但其未タ發賣頒布セサル文書圖書ハ之ヲ沒收ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十八條 第二十四條第二十五條第二十七條ノ場合ニ於テ刻版及印本ハ檢察官ニ於テ之ヲ假ニ差押フルコトヲ得差押フル所ノ刻版及印本ハ裁判ノ確定ヲ待チ無罪ナレハ本主ニ還付シ有罪ナレハ沒收ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第二十九條 前條ノ差押ヲ爲ストキハ製本ノ體裁ニヨリ其差押フヘキ部分ト他ノ部分ト分割シ得ルニ於テハ之ヲ分割スルコトアルヘシ

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第三十條 他人ノ講義演說ヲ筆記若クハ編纂シ又ハ他人ノ著作ヲ編纂シタル文書圖書ヲ出版シ第二十四條第二十五條ヲ犯シタル場合ニ於テ講義者演說者若クハ著作ニシテ其出版ヲ承諾シタルモノナルトキハ筆記者若クハ編纂者ト同シク其罪ヲ論ス

四五六七ノ罰一
三三三三三三三三

第三十一條 文書圖書ヲ出版シ因テ誹毀ノ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ヌ其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第三十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用非ス

シノ部

第三十三條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラレタル文書圖書ヲ
最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ
起算ス

第三十四條 文書圖書ヲ印刷スルトキハ直チニ發賣頒布セスト雖モ其目的發賣頒布ニ在ル
者ハ總テ此條例ニ依ル

●參照

○關係法令

五六三 太政官第二十六號布達 明治十七年十月

式ニ依リ宣布セサル公文及上書建白請願書ヲ記載セル圖書ハ明治十六年六月第二十一
號布告以前ノ出版ニ係ルモノト雖モ再版反刻若クハ之ヲ抄出シテ出版スルモノハ新
聞紙條例第三十一條ニ依ルヘシ

五六四 內務省令第一號 明治二十一年一月二十四日

出版條例版權條例脚本樂譜條例並寫真版權條例ニ關スル願届手續等左ノ通之ヲ定ム
第一條 凡願届書ニ署名スル者ハ各住所ヲ詳記シ實印ヲ捺シ內務大臣宛ニテ差出ス
可シ

第二條 凡文書圖書ヲ印刷スル者ハ出版條例第七條ニ從ヒ其印刷竣功ノ年月日並住

第八九ノ二三
條

所氏名ヲ記載シ其之ヲ發行スル者ハ同條例第三條ニ從ヒ届出ノ年月日並其住所氏
名ヲ記載スヘシ

第三條 出版届ハ第一書式再(三)版届ハ第二書式版權登錄願ハ第三書式寫真版權登
錄願ハ第四書式版權登錄再度下付願ハ第五書式ニ依ル可シ

第四條 專ラ學術技藝ノ雜誌ニシテ出版條例第二條但書ニ從ヒ同條例ニ依ラント欲
スル者並第九條但書ニ依リ届出ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ第六書式ニ依ル可
シ

第五條 版權條例第十一條第二項ニ依リ版權登錄願ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ
第七書式ニ依リ豫メ二回以上出版ノ分隨意取東ネ版權登錄ヲ願出ルコトヲ得

第六條 外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版スル者ハ原書ノ題名著者ノ氏名出版ノ地名及年
號ヲ原字ヲ以テ認メ届書ニ添付ス可シ

第七條 版權登錄料並登錄證再度下付手数料東京ニ在テハ大藏省金庫局其他ノ地方
ニ在テハ國庫金出納本支所ヘ預ケ入レ其預證書ヲ願書ニ添ヘ納付ス可シ

第八條 版權登錄願ヲ許可スルトキハ第八書式寫真版權登錄願ヲ許可スルトキハ第
九書式ノ證書ヲ下付ス可シ但毀損紛失等ニ依リ再度下付スルモノハ本證書ノ謄本
ニ其事由並下付ノ年月日ヲ裏書シ內務省ノ印ヲ捺ス
(書式畧之)

五六五 内務省令第三號 明治二十一年 四月二日

五六七ノ二ニ六條

五六七ノ二ニ六條

第一條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得タル者其免許狀ヲ毀損又ハ紛失シタルハ其事由ヲ記シ證明書ノ下付ヲ内務省ニ願出ルコトヲ得但手数料トシテ金五拾錢ヲ同省ニ納ムヘシ

第二條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得未タ出版セサル圖書ニシテ自今出版ノモノハ其製本ニ何年月日版權免許ト記載シ改正出版條例第三條ニ依リ届出ヲナスト同時ニ舊出版條例第二十條ノ免許料ヲ内務省ニ納ムヘシ

第三條 第一條ノ手数料並第二條ノ免許料ハ本年内務省令第一號第七條ニ從ヒ大藏省金庫局又ハ國庫金出納本支所ノ預證書ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

○伺指令

五六六 内務省伺 明治十七年 八月廿九日

昨十六年六月廿九日第二十二號布告ヲ以テ出版條例御改正相成其罰則第五條ニハ新聞紙條例第三十一條ヲ適用セラレ候處先並即同年同月廿二日二十一號布達ヲ以テ凡ソ官報ニ登載シタルモノハ新聞紙條例ニ依リ記載スルコトヲ得サル者ト雖モ各新聞紙ニ於テ其文ヲ抄録スルコトヲ許サレタリ既ニ新聞紙ニ於テ差許サレ候上ハ出版圖書ト雖モ勿論差許無之儀ト相考候ニ付官報ヨリ抄録シテ出版スルモノハ總テ右布達ニ準シ取扱可然哉

太政官指令 明治十七年 十月二日 伺之通

○舊令

五六七 太政官第百三十五號布告 明治八年 九月三日

明治五年 正文 各省布達出版條例相應シ更ニ別冊ノ通相定候條此旨布告候事

(別冊)

出版條例

五六五

第一條 圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版セントスル者ハ出版ノ日ヨリ到達日數ヲ除キ十日目前ニ内務省ニ届出ヘシ
(十六年第二十一號布告ヲ以テ但書其改正)
 但社則點則引ノ類印刷シテ發賣セサル者ハ此例ニアラス

第二條 圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版スルハ三十年間專賣ノ權ヲ與フヘシ此ノ專賣ノ權ヲ版權ト云フ
 但版權ハ願フト願ハザルトハ本人ノ隨意トス故ニ版權ヲ願フモノハ願書ヲ差出シ免許ヲ請フヘシ其願ハサル者ハ各人一紙ニ出版スルヲ許ス

第三條 出版者版權願トモ草稿ヲ添ルニ及ハスト雖モ時トシテハ草稿ヲ檢査スルコトアルヘシ

第四條 草稿又ハ納本ヲ檢査シテ世治ニ害アルモノト認ムルハ其出版又ハ販賣ヲ禁シ或ハ刻版ヲ毀タシムルコトアルヘシ

第五條 出版者版權願トモ其所在ノ地方廳 本籍又ハ寄居ノ地方廳ヲ經由スヘシ
 但著作出版人其管轄ヲ異ニスルモノハ出版人所在ノ地方廳ヲ經由スヘシ

第六條 圖書ノ時ニ世ニ流布アル者ハ版權ノ年限終ルノ後仍ホ十五年ノ延期ヲ許スコトアルヘシ

第七條 版權免許ノ爲メニ其年限ヲ記セル證書ヲ附與スヘシ年限終ルノ後ハ各人一紙ニ出版スルヲ許ス

第八條 著作權大部ニシテ卒業數年ニ滿リ編ヲ逐ヒ漸次出版スルモノハ毎次ニ版權ヲ與ヘ年限ヲ起算スヘシ

第九條 他人ノ著作權ニ版權ヲ有スルモノヲ續成セント欲スル者ハ原主ニ示談ノ上連印ノ願書ヲ出スヘシ其原主死去セル時ハ相続人ヲ以テ原主ト見做スヘシ

第十條 他人ノ著作權版權ヲ有スルモノヲ校訂シ或ハ節略シ或ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘテ出版スル者モ亦原主ノ

シノ部

四五六五

承諾ヲ得サルヘカラス其出願ノ手續ハ前條ニ依ルヘシ

第十一條 既に版權ヲ有スル自己ノ著作物ヲ改訂シ或ハ節略シ或ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘテ出版スルトキハ更ニ題ヒ出ルニ非サレハ版權ヲ得ヘカラス其製本ノ式ヲ改メ若クハ冊數ヲ分合シテ改版スルニ止リ若クハ舊式ニ依テ再刻スル者ハ版權ヲ存ス

但屆書ヲ出シ製本ヲ納ムルハ各々本條ニ依ルヘシ

第十二條 著譯者死後ニ至リ其相續人遺稿ヲ出版スルトモ得其版權ヲ願フキハ之ヲ與フヘシ

第十三條 版權年限未タ終ラサルノ間ハ版主ノ相續人ニ傳フヘシ

但版權繼承ノ由ヲ相續人ヨリ内務省ヘ届ケ出ヘシ

第十四條 他人ノ著作物ヲ出版スル者ハ必ス著譯者ノ承諾ヲ得ヘシ其版權願書若クハ出版屆書ニハ必ス著譯者ト連印スヘシ

第十五條 版權ヲ得タル者ハ他人其儀章ヲ剽竊スルヲ許サス

但論辨若クハ証明スルタメニ引用スル者ハ此例ニアラス

第十六條 同時若クハ前後ニ偶然同條ノ圖書ヲ著譯シ版權ヲ願フ者二人以上アルキハ共ニ版權ヲ與フヘシ其事情明白ナラサル者ハ事由ヲ檢査シテ後チ之ヲ許シ或ハ許ササルヘシ

第十七條 外國ノ圖書既ニ甲者ノ成譯アリト雖モ乙者又之ヲ譯シ甲者ノ誤譯ヲ正シ又ハ漏漏ヲ補ヒ及ヒ其文意ヲシテ一層明ナラシムルノ確證アルモノ版權ヲ願ヒ出ル時ハ檢査シテ後チ之ヲ許シ或ハ許ササルヘシ

第十八條 著譯ノ圖書同名ノ者アリト雖モ文理不同ナルニ於テハ妨ナシ

但裏題ノ上ニ何某ト記載スヘシ

第十九條 出版ノ圖書ハ内務省ニ於テ目錄ヲ作り時々公布スベシ

第二十條 圖書刊成ノ上ハ製本三部ヲ内務省ヘ納ムヘシ其版權ヲ得ル者ハ外ニ免許料トシテ製本六部ノ定價ヲ納ムヘシ

四五六五

納本セズ及免許料ヲ出サ、ル前ハ免許ヲ許サス

但出版ノ上ニ部定價ノ印ヲ押スヘシ

第二十一條 出版ノ圖書ニハ著譯者ノ住所氏名ヲ記ス著譯者ノ主名ヲ知ルヘカラスル者ハ其由ヲ記スヘシ而シテ何年月日出版成ハ何年月日出版免許ト記シ版主ノ住所氏名ヲ記スヘシ氏名ヲ記セスシテ別號ヲ記スルトモ得ス

版權ヲ相續シ若クハ賣買シ若クハ分版シタルキハ相續人買主及分版ヲ受ケタル者ノ住所氏名ニ改ムヘシ

第二十二條 版權ノ賣買ハ勝手タルヘシ賣買スルキハ雙方連印シテ其由ヲ内務省ヘ届出ヘシ

第二十三條 版權ヲ分テ譲リ若クハ賣リ同一圖書ヲ各自ニ出版スルコト妨ケナシ之ヲ分版ト名ク

但雙方連印シテ届出ルノ前條ノ如シ

第二十四條 版權ヲ相續シ若クハ賣買シ若クハ分版シ及ヒ改版シテ届出サル者ハ其版權ヲ失フヘシ

第二十五條 願書ノ表題ヲ變更シ若クハ納本ノ後ニ新クニ序跋ヲ加フル者ハ其題ヲ届出テ更ニ納本スヘシ若シ届出テヌ又ハ納本セサル者ハ其版權ヲ失フヘシ

第二十六條 免許狀ヲ失フ者ハ其題ヲ届出タル上更ニ之ヲ與フヘシ

但手數料トシテ製本三部ノ定價ヲ納ムヘシ

第二十七條 小説歌謡ヲ出版スル者亦此條例ニ從フヘシ

第二十八條 彫畫ノ類ヲ出版セントスル者ハ出版前ニ内務省ヘ届出ツヘシ(十六年第二十一號) (布告ヲ以テ改正)

但版權ヲ與ヘス

第二十九條 版權免許狀附與ノ後版權賣買成ハ改題等届出ノ上雕形ノ通藏版人免許狀ヘ地方廳印ヲ請フ可シ(九年第十二號布告) (以テ追加)

第三十條 著作物白キニ至テハ更ニ免許狀書換願出ヘシ

但願出ル者ハ手數料トシテ製本三部ノ定價ヲ納ムヘシ

第三十一條 都合ニ因リ版權ヲ要セサル者ヲ以テ免許狀返納スル者ハ其手數料トシテ金三十錢ヲ納ムヘシ

但收納方ハ免狀下同様タルヘレ(九年第八十一號布告)ヲ以テ但書其追加)

四五六八

第一條 內務省ハ屆ケヌシテ圖書ヲ出版シ及ヒ版權免狀ヲ得スシテ免狀ノ名ヲ冒ス者若クハ納本セス及ヒ免狀料ヲ出サスレテ發賣スル者又ハ出版發賣ヲ禁止セラレタル圖書ヲ出版發賣シタル者ハ其刻版印本及ヒ賣得金ヲ沒收ス(十六年第二十一號)布告ヲ以テ改正

第二條 凡ソ偽版ヲ作リ或ハ書中ノ字句及ヒ繪圖ノ模倣ヲ小變シ若クハ小加シテ其表題ヲ改メ其他他人ノ版權ヲ侵シテ出版スル者ハ罰金三十圓以上三百圓以下ヲ科シ其刻版印本及ヒ賣得金ハ沒收シテ版主ニ給付ス

第三條 第一條及ヒ第二條ヲ犯スノ圖書タルコトヲ知テ之ヲ發賣スル者ハ罰金五圓以上百圓以下ヲ科ス其第二條ヲ犯スノ圖書タルコトヲ知テ發賣スル者ハ現存ノ圖書及ヒ賣得金ヲ沒收シテ版主ニ給付ス

第四條 無名書クハ版主ノ住所ヲ記サルノ圖書ヲ出版シ若クハ發賣スル者並ニ變名偽名シ若クハ住所ヲ偽ソテ圖書ヲ出版シ若クハ住所ヲ知テ發賣スル者ハ禁獄十日以上六月以下ヲ科ス

四五六八

但沒收ノ法ハ第一條ニ依ル

第五條 凡ソ著譯ノ圖書新聞紙條例第三十一條第三十二條第三十三條第三十四條第三十七條第三十八條第三十九條ノ罪ヲ犯シタル者ハ著譯者出版者共犯ヲ以テ論シ該條例ニ依テ罰ヲ科ス

但印刷器ヲ沒收スルハ第七條第二項ノ場合ニ限ル(十六年第二十一號)布告ヲ以テ改正

四五六八

第六條 (十六年第二十一號)布告ヲ以テ削除

第七條 法外圖書規則ノ罪ヲ受レハ即時刑版及ヒ現存ノ印本ヲ勾收セシメ論決スルニ至テ官ニ沒ス

第八條 既ニ版權免狀ヲ得ルト雖モ出版ノ上犯則ニ逃ル者ハ仍ホ本條ニ依リ罪ヲ科ス

附則 一此條例發行ノ日ヨリ出版ニ關スル從前ノ布告布達等一切取消シ該條例從前出版ノ圖書ハ此條例發行ノ日ヨリ四ヶ

月ヲ限リ此條例ニ準據シ更ニ願出ツヘク右限内願出サル者ハ總テ版權無之儀ト心得ヘシ

一從前出版ノ圖書ト雖モ版權願出ツルニ於テハ免狀料上納スヘシ

但製本ハ納ムルニ及ハス

一自今院署使廳府縣ニ於テ出版スルモノト雖モ布告公文及該廳ニ關スル日誌規則ノ類ヲ除ク外ハ必ス內務省ヘ届出ツヘシ

(書式等)

○判決例

五六一八 明治十九年乙第千二十五號

高知縣士族 熊勢源之助

上告ノ旨趣ハ其活版所ニ委託シテ筆寫ノ勞ニ代ヘシ所ノ書籍ハ同志ノ士ニ頒チテ平素ノ酬答ヲ表セントスルニ在リテ發賣ノ意思ニアラサルヲ以テ出版條例ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラスト云フニアルモ出版條例ハ出版發賣ノ所爲ヲ兼ズルモノ、ミテ制裁スルニアラス出版ノ所爲ノミヲ以テ之ヲ制裁ス可キニ在ルヤ出版條例則第四條ノ法文ニ徴シテ明白ナリ而シテ原裁判官ニ於テ其職權ヲ以テ無名ノ書籍ヲ出版シタリトノ判定ヲ爲シタルモノナレハ該第四條ノ制裁ヲ免カレサルモノニシテ原裁判官ハ濫權ノ錯誤ニ之アラサルモノトス右ノ理由ナルヲ以テ上告ノ旨趣ハ治罪法第四百十條第十項ニ適當ナル原由之アラサルモノトシ治罪法第四百二十七條ニ依リ之ヲ棄却スルモノナリ

明治十九年十二月廿七日

(九〇)寫眞版權條例 明治二十年十二月二十八日 勅令第七十九號

寫眞版權條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

寫眞版權條例

シノ部

四五六九ノ二
二條九ノ一
四五六九ノ四
三條九ノ一
三八條

第一條 凡ソ光線ト藥品トノ作用ニヨリ人物器物景色其他物象ノ眞形ヲ寫シタルモノヲ寫眞ト云ヒ寫眞ヲ發行シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ寫眞版權ト云フ

第二條 寫眞版權ハ寫眞師ニ屬シ寫眞師死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス但他人ノ囑托ニ係ルモノハ寫眞版權ハ囑托者ニ屬シ囑托者死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス

囑托ニ係ル寫眞ノ種版ニシテ現存スルモノハ版權所有者ニ於テ之ヲ寫眞師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノトス

第三條 寫眞版權ノ保護ヲ受ント欲スルモノハ發行前寫眞一枚ニ付見本二葉及六葉ノ定價ヲ添ヘ版權登錄ヲ内務省ニ願出ヘシ但人物ノ寫眞ハ登錄ヲ待スシテ其保護ヲ受ル者トス

第四條 版權登錄ノ寫眞ニハ其保護年限間ハ版權所有者ノ氏名住所版權登錄ノ年月ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登錄ノ効ヲ失フモノトス

第五條 内務省ニ於テハ寫眞版權登錄簿ヲ備ヘ置キ登錄ノ願出アリタルトキハ之ヲ登錄シ登錄證書ヲ下付スヘシ

寫眞版權登錄證書ノ取扱ハ總テ文書圖書ノ版權登錄證書ニ準スルモノトス

第六條 寫眞版權保護ノ年限ハ登錄ノ月ヨリ十年トス

第七條 寫眞版權ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ賣渡シ讓渡スヲ得

第八條 版權ノ保護ヲ受ル寫眞ハ之ヲ覆寫シ若クハ機械又ハ舍密ノ作用ニヨリ多數ヲ増製シ得ヘキ方法ヲ以テ寫眞術ト類似ノ模寫ヲ爲シ及寫眞師ニ於テ本人又ハ其相續者ノ承諾

四五六九ノ三
一〇條九ノ一
四五六九ノ二
三條九ノ一
四五六九ノ七
一〇條九ノ一
四五六九ノ三
一〇條九ノ一

ヲ受スシテ囑托ニ係ル寫眞ヲ増製スルコトヲ得ス

第九條 第三條ノ手續ヲナサスシテ版權登錄ヲ詐稱シタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ニ違フ者ハ版權條例ニ據リ僞版ヲ以テ論シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス及損害賠償ノ責ニ任セシム

損害賠償ノ責ハ其原寫眞ノ版權年限終ルノ後一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス

第十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期限ハ一年トシ其犯罪ト認メラレタル寫眞又ハ模寫物作爲ノ時ヨリ起算シ其發賣セルモノハ最後ニ發賣シタル時ヨリ起算ス

第十二條 此條例ヲ犯シタルモノニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

參照

○舊令

五六九 太政官第九十號布告 明治九年 六月

寫眞條例別紙ノ通稱定條條此旨布告候事

(別紙)

寫眞條例

第一條 凡ソ人物山水其他ノ諸物象ヲ寫シテ專賣ヲ願ヒ出ル者ハ五年間專賣ノ權ヲ與フヘシ之ヲ寫眞版權ト稱ス

但之ヲ願ハサル者ハ別段願出ルニ及ハス

第二條 版權ヲ得タル寫眞ニハ必ズ每葉寫主ノ標號及ヒ定價并ニ版權免許ノ年月ヲ記載スヘシ

四五七〇ノ一
二三四五六
一〇二三四五六
七七八九〇一
二三四五六七八
九〇一二三四五
六七八九〇一二
三四五六七八九
〇一二三四五六
七八九〇一二三四
五

第三條 版権ヲ得タル者ハ寫眞一版ニ付三葉ヲ納メ仍ホ免許料シテ一版ニ付十二葉ノ定價ヲ納ムヘシ之ヲ納メサル前ニ發賣スルヲ許ルサス

第四條 出版條例第七條第十三條第二十一條ノ第二項第二十二條第二十三條第二十四條及第二十六條ハ寫眞版權ニ適用スヘシ

但出版條例第二十六條但書ノ手数料ハ一版ニ付六葉ノ定價ヲ納ムヘシ凡ソ願屆等ノ手續モ總テ出版條例ニ依ルヘシ

第五條 凡ソ圖書ヲ寫眞スル者ハ翻刻出版ノ例ニ依ヒ都テ出版條例ニ依ルヘシ

第六條 第三條ヲ犯シ若クハ情ヲ知テ發賣スル者ハ其現存ノ寫眞ヲ沒收シ壹圓ヨリ少カラズ拾圓ヨリ多カラサルノ罰金ヲ科シ仍ホ版權ヲ追奪スヘシ

第七條 他人ノ版権ヲ侵シ寫眞ヲ寫シ又ハ免許ノ名ヲ冒認シ及ヒ之ヲ發賣シ若クハ情ヲ知テ發賣スル者ハ現存ノ寫眞ヲ沒收シ二圓ヨリ少カラズ二十圓ヨリ多カラサルノ罰金ヲ科シ仍ホ原主ノ損害ヲ償ハシム

但原主ヨリ取出ルニアラサルハ受廻テス

(九) 醬油稅則 明治二十一年六月勅令第四十七號

朕醬油稅則改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

醬油稅則

第一條 醬油製造ノ營業ヲ爲サントスル者ハ官廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受ケヘシ但製造人十六歳未満ノ幼年者及瘋癲白痴又ハ精神ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ

第二條 醬油製造人ハ左ノ營業稅及造石稅ヲ納ムヘシ
營業稅 製造場一箇所ニ付一箇年 金五圓

第三條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半分ハ其年一月三十一日限後半分ハ同七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ營業ヲ爲ス者ハ免許證札ヲ受クルトキ其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

造石稅 醬油ハ諸味 一石ニ付 金壹圓
溜ハ製成 一石ニ付 金壹圓

第四條 造石稅ハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ納ムヘシ但廢業スル者ハ其節之ヲ納ムヘシ
第一期 五月三十一日限
第二期 九月三十日限
第三期 翌年一月三十一日限

第五條 醬油ハ之ヲ製成スル前ニ溜ハ之ヲ製成シタル後十日以内ニ管廳ニ申出造石數ノ査定ヲ受ケヘシ

第六條 醬油製造人廢業ノ際査定未済ノ醬油ヲ所持スルトキハ管廳ニ申出造石數ノ査定ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ但其醬油ヲ同業者ニ賣渡讓渡ス場合ニ限り管廳ニ申出檢査ヲ受

四五七〇ノ一
二三四五六
一〇二三四五六
七七八九〇一
二三四五六七八
九〇一二三四五
六七八九〇一二
三四五六七八九
〇一二三四五六
七八九〇一二三四
五

四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇
四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇
四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇
四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇

置キ其買受讓受人ニ於テ第五條ノ査定ヲ受ケ及第四條ノ期限ニ從ヒ造石稅ヲ納ムルコトヲ得

製造場ニ簡所以上ニ於テ醬油製造ヲ爲ス者其一箇所以上ヲ廢シ査定未濟ノ醬油ヲ他ノ製造場ニ移ストキハ管廳ニ申出檢査ヲ受クヘシ

第七條 免許鑑札ハ貸借賣買及讓渡讓受ヲ爲スコトヲ得ス

第八條 醬油製造人ハ同業者ニ非サル者ニ醬油ヲ製造スル爲メニ製造場ヲ貸渡スコトヲ得ス

第九條 醬油製造人ハ製造場ニ關シ修繕等已ムヲ得サル事故ニ因リ管廳ニ届出タル後ニ非サレハ造石數査定未濟ノ醬油ヲ其製造場外ニ移スコトヲ得ス

第十條 醬油製造人ハ造石數査定未濟ノ醬油ヲ賣渡貸渡讓渡又ハ自用スルコトヲ得ス但第六條但書ノ場合ハ此限ニ在ラス

第十一條 造石稅ノ査定ヲ經タル醬油其造石稅納期內ニ天災又ハ避ヘカラサル事故ニ因リ廢棄ニ屬シタルトキハ直ニ管廳ニ申出檢査ヲ受ケ該造石稅ノ免除ヲ請フコトヲ得

第十二條 醬油製造人ハ營業ニ係ル要領ヲ帳簿ニ記載スヘシ

第十三條 外國ニ輸出スル醬油ハ輸出ノ節稅關ノ檢査ヲ受置キ輸入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他證憑ト爲ルヘキ書類ニ該港在留ノ我國領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ輸出港ノ稅關ニ差出シ造石稅ノ下戻ヲ請求スルコトヲ得其下戻ノ歩合ハ大藏大臣定ムル所ニ依ルヘシ但造石稅ノ下戻ヲ受ケタル醬油ヲ本邦ニ輸入スルハ其金額ヲ輸入港稅關ニ還納スヘシ

四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇
四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇
四五七ノ一ノ九
四五七ノ一ノ八
四五七ノ一ノ七
四五七ノ一ノ六
四五七ノ一ノ五
四五七ノ一ノ四
四五七ノ一ノ三
四五七ノ一ノ二
四五七ノ一ノ一
四五七ノ一ノ〇

第十四條 醬油製造人ノ製造スル醬油ハ他ノ依託ヲ受ケ又ハ自家用料ニ供スル者ト雖モ總テ此稅則ニ從フヘシ

第十五條 醬油製造人ハ製造場外ニ於テ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス

第十六條 醬油請買ヲ爲ス者ハ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス其同居者亦同シ

第十七條 自家用料ノ爲製造シタル醬油ハ之ヲ賣渡スコトヲ得ス

第十八條 醬油製造人ノ製造場倉庫其他ノ場所醬油仕込高並仕込ニ屬スル原品及營業ニ關スル帳簿ハ當該官吏之ヲ檢査スルコトアルヘシ但當該官吏ハ其證票ヲ携帶スヘシ

第十九條 當該官吏ニ於テ此稅則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但當該官吏ハ其證票ヲ携帶スヘシ

第二十條 免許鑑札ヲ受ケシテ醬油製造ノ營業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及容器製造器械ヲ沒收ス

第二十一條 醬油製造人ニシテ醬油ヲ隱蔽シタル者ハ其石數ニ相當スル造石稅三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及容器ヲ沒收ス

第二十二條 第五條第六條ノ査定ヲ受ケサル者第八條第九條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及通稅ヲ謀ル爲メ帳簿ノ記載ヲ詐リタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ第十五條ヲ犯シタル者ハ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及容器製造器械ヲ沒收ス

第二十三條 第七條ヲ犯シタル者第六條ノ檢査ヲ受ケサル者及帳簿ノ記載ヲ怠リタル者ハ

條考

四五七ノ二
四五三六條

四五七ノ三
條考

四五七ノ三
條考

四五七ノ三
條考

四五七ノ三
條考

二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 此稅則ヲ犯シ沒收スヘキ物品ニシテ既ニ之ヲ賣渡讓渡又ハ消糜シタルトキハ其代金ヲ追徴ス

第二十四條 此稅則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重數罪併發ノ例ヲ用ヒス

第二十五條 醬油製造人ノ家屬雇人ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其製造人ヲ處罰ス

醬油製造人十六歳未満ノ幼年者及瘋癲白痴又ハ瘡啞ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其後見人ヲ處罰ス

第二十六條 此稅則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十七條 此稅則ハ明治二十二年九月一日ヨリ施行ス

附則

第二十八條 北海道沖繩縣及東京府管下小笠原島伊豆七島ニハ當分此稅則ヲ施行セス但此稅則施行ノ地ニ輸送スル醬油ヲ製造スル者ハ此稅則ニ從フヘシ

第二十九條 此稅則施行以前ニ免許ヲ受ケタル醬油製造人ニシテ第一條但書ニ該當スル者ハ後見人ヲ立テ三月以内ニ管廳ニ届出ヘシ

●參照

○關係法令

五七〇 大藏省令第九號 明治二十一年八月三日

本年六月勅令第四十七號醬油稅則施行細則左ノ通相定ム

醬油稅則施行細則

第一條 稅則第一條ニ從ヒ製造免許ヲ受ケントスルモノハ其製造場ノ倉庫又ハ建物ノ棟數ニ拘ハラヌ都テ其一區域ヲ以テ一箇所トシ之レニ關スル地所建物ノ位置及坪數ヲ圖面ニ製シ願書ニ添ヘ管廳ニ差出スヘシ但一區域外ノ倉庫建物ト雖モ檢査濟ノ醬油又ハ製造用諸器械ヲ藏置スルニ止マルモノハ管廳ノ許可ヲ受ケ製造場ノ附屬ト爲スコトヲ得

第二條 二人以上資方ヲ合シ組合營業ヲ爲サントスルモノハ其組合員ノ連名ヲ以テ願出テ會社ヲ設ケ營業ヲ爲スモノハ社則ヲ添ヘ其願取ノ名ヲ以テ願出ヘシ

第三條 免許鑑札ヲ受ケタルトキハ十日以内ニ醬油製造用器械ノ種類員數目錄ヲ所管租稅檢査員派出所ニ届出ヘシ

第四條 第一條及同條但書ノ倉庫建物第三條ノ製造用器械ニ増減變換ヲ生シタルトキハ其時々所管租稅檢査員派出所ニ届出ヘシ

第五條 醬油製造人ハ毎年一月中其年仕込並査定ヲ受クヘキ見込石數並其製造方法ヲ所管租稅檢査員派出所ニ届出ヘシ但前年ノ製造方法ニ據ルモノハ其旨ヲ届出ヘシ

新々ニ免許鑑札ヲ受ケタル者ハ其翌日ヨリ十五日以内ニ前項ノ届出ヲ爲スヘシ

第六條 醬油製造人不在又ハ事故アルトキハ代人ヲ置キ稅則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨

シノ部

九百四十一

九百四十

參看

四五七〇
ノ二四條
參看

第七條 醬油製造人他ヨリ醬油ヲ買入タルトキハ其石數年月日買入先キヲ帖簿ニ記載シ置クヘシ

第八條 醬油製造用ノ容器ハ使用以前管廳ニ申出検査ヲ受クヘシ

四五七〇
ノ三九
二二二
四二二
七一ノ一
四條參看

前項ノ容器ハ左ニ掲クル方法ニ據リ其容積ヲ量リ租稅検査員派出所ニ申出検査ヲ受クヘシ但容器ニハ番號及管廳ノ烙印ヲ施スモノトス

丈量法

口徑(口頭ヨリ三寸下リタル箇所)胴徑(口底徑ノ中央)底徑(底板面ノ箇所)軌レモ内側ニテ縱横 \oplus 圖ノ如ク度リ此縱横徑ヲ和シテ之ヲ除ス深サハ其桶ノ前後左右中心等軌レモ底面ヨリ口徑マタノ間ヲ丈量シ之ヲ和シ五ヲ以テ之ヲ除ス但尺度ハ都テ曲尺ヲ用ヒ分位ニ止メ厘位以下切捨トス

算則

口徑下胴徑ノ和ヲ自乘シ甲トス

胴徑下底徑ノ和ヲ自乘シ乙トス

口徑下底徑ノ和ハ胴徑ヲ乘シ丙トス

甲乙ノ和ヨリ丙ヲ減シ殘數ニ深サ及ヒ〇、〇四〇三、八四四(乘率ノ一位ヲ石位トシ丈量尺度ハ分位ニ止メ尺位ヲ一位トス)ヲ乘シニテ之ヲ除シ其容積ヲ得
容器中殘類其他異樣ノ容器ハ總テ前項ニ準シ量定スヘシ其準シ難キモノハ便宜適

四五七〇
ノ八二
二條參看

實ノ方法ニ依リ量定スルモノトス

第九條 石數査定ノ際其入實容器測定ノ全量ニ滿タサル端數ハ左ノ算則ヲ以テ査定スヘシ

入實胴徑ヨリ以上ニアルトキハ其容積面ノ直徑ヲ底徑ト假定ス(此底徑ヲ求ムルニハ口徑ヨリ胴徑ヲ減シ空積ノ深サヲ乘シ二倍シ全深ニテ除シ之ヲ口徑ヨリ減シテ假定ノ底徑トス)

假定ノ底徑ト口徑トノ和ヲ自乘シ甲トス

假定ノ底徑ト口徑トヲ相乘シ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ空積ノ深サ及ヒ〇、〇四〇三、八四四(乘率ノ一位ヲ石位トシ丈量尺度ハ分位ニ止メ尺位ヲ一位トス)以下準之ヲ乘シ其得ル石數ヲ容器帳簿記載ノ石數ヨリ減シ現在ノ石數ヲ得ル

入實胴徑ヨリ以下ニ在ルトキハ其容積面ノ直徑ヲ口徑ト假定ス(此口徑ヲ求ムルニハ入實胴徑ニアルモノハ其胴徑ヲ假定ノ口徑トシ入實胴徑ニ滿タサルモノハ胴徑ヨリ底徑ヲ減シ現在ノ深サヲ乘シ二倍シ全深ニテ除シ之ニ底徑ヲ加ヘテ假定ノ口徑トス)

假定ノ口徑ト底徑トノ和ヲ自乘シ甲トス

假定ノ口徑ト底徑トヲ相乘シ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ現在ノ深サ及ヒ〇、〇四〇三、八四四ヲ乘シ現在ノ石數ヲ得ル

シノ部

第十條 醬油製造人廢業シタルトキハ直ニ管廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘシ

第十一條 改名代替リ若クハ鑑札ヲ失却毀損シ又ハ住所製造場ヲ移轉シタルトキハ左ノ期限内ニ鑑札ノ再渡又ハ書換ヲ請フヘシ
一 代替書換ハ 六十日間
一 其他ノ書換再渡ハ 十日間

第十二條 製造場ヲ他府縣ヘ移轉セントスルモノハ免許鑑札ヲ添ヘ管廳ニ申出添書ヲ受ケ二十日以内之ヲ移轉地ノ管廳ニ差出シ鑑札ノ書換ヲ請フヘシ

第十三條 稅則第六條第二項ノ場合ニ於テ査定濟ニ係ル造石稅ハ稅則第四條ノ納期ニ重リ之ヲ納ムルコトヲ得

第十四條 稅則第十二條ニ依リ造石稅ノ免除ヲ請フ者ハ其實況及廢棄石數等ヲ詳記シ所管租稅檢査員派出所ニ申出ヘシ
前項ノ場合ニ於テハ當該官吏二名以上現場ニ臨檢シ事實相違ナシト視認スルトキハ該造石稅免除ノ手續ヲ爲スヘシ

第十五條 造石數査定未濟ノ醬油漏溢其他ノ事故ニ依リ減量若クハ廢棄シタルトキハ直ニ所管租稅檢査員派出所ニ届出ヘシ

第十六條 醬油製造人ハ左ノ帳簿ヲ調製スヘシ
醬油製造原品買入帳
醬油製造帳

醬油仕込帳
醬油賣揚帳

第十七條 稅則及ヒ此細則ニ掲グル帳簿ハ附込濟翌年ヨリ三箇年間保存スヘシ

第十八條 稅則第十三條ニ依リ外國輸出醬油ノ檢査ヲ受ケントスル者ハ其製造地名、名稱、石數、箇數輸入地名、積込船名等ヲ記シタル書面ヲ稅關ニ差出シ其現品ノ檢査ヲ請ヒ檢査濟證明書ヲ受クヘシ

第十九條 造石稅ノ下戻ヲ請フニハ外國ニ輸入セシ證憑書類ニ當初輸出ノ際受ケタル所ノ證明書ヲ添ヘ稅關ニ申出ヘシ

第二十條 輸出醬油造石稅下戻ノ歩合ハ其製造セシ府縣管内ニ於テ前一箇年中諸味一石ヨリ製成シタル平均歩合ニ據リ其石數ヲ算定スルモノトス

第二十一條 稅則第十三條但書ノ場合ニ於テハ其製造地名、石數、箇數及當初下戻ヲ受ケタル年月日出港名ヲ記シタル書面ヲ稅關ニ差出シ現品ノ檢査ヲ受クヘシ

第二十二條 稅則及此細則ニ於テ石數ノ合位稅金ノ厘位ニ滿タサルモノハ切捨トス

第二十三條 稅則第二十九條ノ手續ヲ履行セサルトキハ營業免許ノ効ヲ失フモノトス

第二十四條 第一條但書ノ許可ヲ受ケサル者及第八條第一項第十五條ニ違犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ第三條第四條第五條第六條第七條第十條第十一條第十二條第十六條第十七條ニ違犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ罰金ニ處ス

シノ部

科料ニ處ス

第二十五條 此細則ニ關スル帖簿記載方其他書式等ノ手續ハ府縣知事之ヲ定ム

○舊令

五七一 大政官第十號布告 明治十八年五月

轉油規則別紙ノ通制定ス明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但東京府管轄伊豆七島小笠原島函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分ノヲ施行セズ

(別紙)

轉油規則

第一條 凡ソ轉油ヲ製造シテ營業セシト欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受クヘシ

第二條 免許ヲ受ケタル者ハ左ノ通營業稅及ヒ造石稅ヲ納ムヘシ

營業稅 製造場一箇所ニ付一箇年金五圓

造石稅 製造高壹石ニ付金壹圓

第三條 免許證札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシトキハ管廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第四條 轉油製造人應業スルトキハ管廳ニ届出免許證札ヲ選納スヘシ

第五條 免許證札ハ貸借買賣及ヒ讓渡譲渡ヲ爲スコトヲ得ズ

第六條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半年分ハ其年一月三十一日限後半年分ハ同ク七月三十一日限之ヲ納ムヘシ

第七條 造石稅ハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ納ムヘシ但應業スル者ハ其節之ヲ納ムヘシ

第一期 五月三十一日限

第二期 一月一日ヨリ四月中檢査滿石數ニ係ル稅額

第三期 九月三十日限

五月一日ヨリ八月中檢査滿石數ニ係ル稅額

第三期 翌年一月三十一日限

九月一日ヨリ十二月中檢査滿石數ニ係ル稅額

第八條 轉油ハ製造ノ後五日以内ニ管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ

第九條 應業ノ際未製成ノ轉油ヲ所持スル者ハ其節管廳ニ届出檢査ヲ受ケ其石數ニ就キ納稅スヘシ但之ヲ同業者ニ賣渡シ又ハ二箇所以上ニ於テ製造スル者其一箇所以上ヲ廢シ尙ホ存スル所ノ製造場ニ之ヲ移ス者ハ其旨届出

製成ノ上其製成者ニ於テ第八條ニ從ヒ檢査ヲ受クヘシ

第十條 檢査未滿ノ轉油ト檢査既滿ノ轉油トヲ混和スル者ハ其混和ノ日ヨリ五日以内ニ其旨管廳ニ届出更ニ總石數ヲ以テ檢査ヲ受ケ納稅スヘシ

第十一條 檢査既滿ノ轉油其造石稅納付期內ニ非常ノ損害ニ罹リテ廢棄ニ屬シ若クハ腐敗シタルトキハ直ニ管廳ニ

申出檢査ヲ受ケ該造石稅ノ免除ヲ請フコトヲ得

第十二條 外國ニ輸出スル轉油ハ輸出ノ節稅關ニ於テ檢査ヲ受ケ稅關入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他ノ證憑ト爲

ルハキ證憑ニ在留領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ當初輸出ノ稅關ニ提出シ其造石稅ニ相當スル金額ノ下戻ヲ請フコトヲ

得但造石稅ノ下戻ヲ受ケタル轉油ヲ再輸入シタルトキハ更ニ其金額ヲ納ムヘシ

第十三條 轉油製造人ハ左ノ帳簿ヲ製スヘシ

轉油製造原品買入帳

轉油仕込帳

轉油費上帳

第十四條 轉油製造用ノ容器ハ使用以前管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ

第十五條 轉油用ノ器類ニハ主任官ノ封緘ヲ受ケ置用スルトキハ其旨申出開封ヲ請フヘシ但過誤等ニテ封緘ヲ

毀損シタルトキハ直ニ管廳ニ届出更ニ封緘ヲ請フヘシ

第十六條 醬油製造人ハ毎年一月三十一日迄ニ其年製造見込ノ石數並ニ其製造方法ヲ管轄ニ届出ヘシ新ニ開業セシ者ハ免許ヲ受ケタル翌日ヨリ十五日以内ニ之ヲ届出ヘシ但見込石數ノ増減並ニ製造方法ノ變換ハ其時々届出ヘシ

第十七條 醬油製造ニ屬スル倉庫庫屋并ニ諸器械ハ營業免許ヲ受ケタルトキ直ニ之ヲ管轄ニ届出ヘシ但増減ハ其時々届出ヘシ

第十八條 醬油製造人ハ他ノ委託ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ同業者ニ非サル者ニ醬油ヲ製造スル爲メ製造場ヲ貸スコトヲ許サス

第十九條 醬油製造人ハ自家用料ニ充ル醬油ト雖モ此規則ニ從ヒ檢査ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ

第二十條 醬油卸賣又ハ小賣ヲ以テ營業トスル者ハ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス

第二十一條 醬油營業人ニ非スシテ自家用料ノ醬油ヲ製造スル者ハ同居ノ家族雇人一人ニ付一箇年壹斗五升ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十二條 醬油製造人ノ醬油仕込高並ニ仕込ニ屬スル豆麥其他ノ原品及ヒ營業ニ關スル諸帳簿ハ主任官隨時之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第二十三條 主任官ニ於テ此規則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但主任官タルノ證據ヲ得テハヘシ

第二十四條 第一條ニ違ヒ免許證札ヲ受ケシテ醬油ヲ製造シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ醬油及ヒ製造器械ヲ沒收ス既ニ賣捌キタル者ハ其代金ヲ追徵ス

第二十五條 第三條ニ違ヒ卸賣人小賣人ニ於テ醬油ヲ製造シタル者亦本條ニ據リ處分ス

第二十六條 醬油ヲ隱蔽シタル者ハ製成ト未製成トニ拘ハラズ其石數ニ相當スル造石稅三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及ヒ容器ヲ沒收ス既ニ賣捌キタル者ハ其代金ヲ追徵ス但檢査既済ノ醬油ト檢査未済ノ醬油トヲ混和シテ隱蔽シタル者ハ其石數ニ就テ論ス

第二十六條 第八條第九條第十條ノ檢査ヲ受ケシテ醬油ヲ賣捌貨渡證又ハ自用シタル者ハ其造石稅ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ仍ホ其代金ヲ追徵ス

第二十七條 第十八條ニ違ヒ他ノ委託ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ製造場ヲ貸シタル者又ハ第二十一條ノ制限ヲ超ヘテ醬油ヲ製造シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其醬油及ヒ容器ヲ沒收ス

第二十八條 第五條ニ違ヒ免許證札ヲ賣買賃借及ヒ讓渡證シタル者第十三條ニ違ヒ帳簿ヲ調製セス若クハ帳簿ノ登記ヲ詐シタル者第十四條ニ違ヒ檢査ヲ受ケシテ容器ヲ使用シタル者又ハ第十五條ニ違ヒ開封ヲ爲シタル者ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第三條第四條第八條第九條第十條第十五條但書第十六條又ハ第十七條ノ届出ヲ怠リタル者ハ一圓以上二圓九十五錢以下ノ料科ニ處ス

第三十條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不倫罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三十一條 醬油製造人ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタルトキハ其營業者ヲ處罰ス

○關係法令

【五七二】大藏省第二十二號達 明治十八年五月

本年五月第拾號ヲ以テ醬油稅則公布相成候ニ付右稅則取扱心得書別冊ニ之ヲ通定ム

(別冊)

醬油稅則取扱心得書

第一款 營業免許

第一項 免許證札ハ豫メ授與スヘキ員數ヲ見積リ收稅長ヨリ主稅官長ニ宛テ之ヲ請求スヘシ

第二項 免許證札記載方ハ第一號雛形ニ倣フヘシ

第三項 製造場ハ倉庫又ハ建物ノ棟數ニ拘ラス都テ其一區域ヲ以テ一ヶ所トシ免許證札ヲ授與スヘシ但一區域外ノ倉庫建物ト雖檢査済ノ醬油又ハ製造用諸器械ヲ設置スルニ止ルモノハ製造場ノ附屬トスルコトヲ

得レ

第四項 二人以上資力ヲ合シ組合營業ヲ爲サントスルモノハ其組合員ノ連名ヲ以テ顯出シメ會社ヲ設ケ營業ヲ爲スモノハ社則ヲ添ヘ其頭取ノ名ヲ以テ顯出シムヘシ

但免許證札面ニハ誰外何人ト記シ又ハ頭取ノ名ヲ記載スヘシ

第五項 營業者不在又ハ事故アルトハ代人ヲ置キ稅則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシ其代人ハ營業熟知ノモノヲ選定シテ委任狀ヲ附與セシメ其人ノ名ヲ届出シムヘシ

但幼少其他事故アリテ後見人ヲ置クトハ委任狀ヲ附與スルノ限ニアラスト雖モ後見人事故アリテ代人ヲ置クトハ本項ニ據リ後見人ヨリ委任狀ヲ附與セシムヘシ

第六項 製造場ヲ他管下ニ移轉スル者ハ免許證札ヲ添ヘテ所在管廳ニ出願セシメ所在管廳ハ移轉管廳ヘ添翰ヲ作リ之ヲ下渡シ移轉管廳ハ其添翰ニ據リ書換證札ノ下渡方ヲ爲スヘシ

第七項 稅則第十七條ノ屠畜ニハ諸建物ノ構造繪圖面圖書及諸器械ノ員數目錄ヲ添ヘシムヘシ但賣買證與貸借新規修繕破毀等ノ増減モ亦同シ

第二款 諸器械調査

第八項 稅則第十四條將油製造用桶類ノ新製又ハ修繕ヲ届出ルトキハ其時々主任官員出張シテ番號ヲ掲記シ且左ニ掲クル所ノ丈量法及算則ニ據リ詳細ニ調査ヲ遂ケ左ノ雛形ニ倣ヒ木札ヲ製シ管廳ノ烙印ヲ施シテ桶ノ前面ニ釘付スヘシ

但桶面ニ掲載スヘキ番號ハ木札ヲ釘付スヘキ右側ノ上部ニ記スヘシ

(雛形略ス)

口徑口頭ヨリ三寸附徑ノ口底徑ノ底板面ハ孰レモ内側ニテ縱橫 \oplus 圖ノ如ク度リ此縱橫徑ヲ和シ之ヲ二ニテ除シ以テ定ム深サハ其桶ノ前後左右中心等點レモ底面ヨリ口徑マテノ間ヲ丈量シ之ヲ和シ五ニテ除シ以テ定ムヘシ但尺度ハ孰レモ曲尺ヲ用ヒ寸位ニ止メ厘以下切捨ツヘシ

第一項 九ノ一
第二項 八ノ一
第三項 七ノ一
第四項 六ノ一
第五項 五ノ一
第六項 四ノ一
第七項 三ノ一
第八項 二ノ一
第九項 一ノ一
第十項 九ノ一
第十一項 八ノ一
第十二項 七ノ一
第十三項 六ノ一
第十四項 五ノ一
第十五項 四ノ一
第十六項 三ノ一
第十七項 二ノ一
第十八項 一ノ一
第十九項 九ノ一
第二十項 八ノ一
第二十一項 七ノ一
第二十二項 六ノ一
第二十三項 五ノ一
第二十四項 四ノ一
第二十五項 三ノ一
第二十六項 二ノ一
第二十七項 一ノ一
第二十八項 九ノ一
第二十九項 八ノ一
第三十項 七ノ一
第三十一項 六ノ一
第三十二項 五ノ一
第三十三項 四ノ一
第三十四項 三ノ一
第三十五項 二ノ一
第三十六項 一ノ一

算則

口徑下附徑ノ和ヲ自乘シ甲トス

附徑下底徑ノ和ヲ自乘シ乙トス

口徑下底徑ノ和ハ附徑ヲ乘シ丙トス

甲乙ノ和ヨリ丙ヲ減シ殘數ニ深サ及ヒ〇〇四〇三八四四 乘率ノ一位ヲ石位トシ丈量尺度ヲ乘シ之ヲ二ニテ除シ其容量ヲ得ル

但石數ハ合位ニ止メ以下切捨ツヘシ

第九項 桶類容量ハ總テ桶類ニ準シ之ヲ查定スヘシ其準シカタクモノハ便宜適費ノ方法ヲ以テ之ヲ查定スヘシ但番號石數等ハ木札ニ記載シ之ヲ正面ニ附シ置カシムヘシ

第十項 桶類ノ番號ハ倉庫ノ數ニ拘ハラズ總テ製造場一ヶ所毎ニ起號シ其總數ニ應シテ順次ヲ定ムヘシ但桶類ノ外諸器械ハ番號ヲ附スルニ及ハスト雖管廳ノ烙印ヲ捺シ得ルモノハ之ニ烙印スヘシ

第十一項 粕桶水桶等ノ類ニシテ全ク醬油ヲ容レサル分ハ丈量ニ及ハスト雖番號ヲ記載シ之レニ烙印スヘシ但製造場内ニ於テ醬油ヲ容ル、桶類類ハ都テ丈量ノ調査ヲ受ケシムヘシ

第十二項 調査済ノ桶類類賣買證與貸借又ハ返却等ヲ届出タルトキハ其賣買證與同業者ニ係ルモノハ主任官員出張ノ上其番號ヲ書換其非營業者ニ係ルモノ及破解ニ屬スルモノハ桶面ノ木札ヲ除却シ但一時借受タルモノハ假番號ヲ記載スヘシ

第三款 器械封緘

第十三項 稅則第十五條器械ノ封緘ハ管廳ニ於テ豫メ一定ノ方法ヲ相立テ捺リ器械ハ槽ノ樋口并男柱ノ孔ヘ封緘ヲ爲スヘシ

第十四項 前項封緘用紙ハ管廳ノ印章ヲ捺シタルモノヲ用ヒ且封緘ノ都度其請書ヲ差出サシムヘシ

第十五項 捺リ器械ノ開封ヲ請フトキハ醒成熟ノ形狀ト其量數ノ多寡トヲ檢査シ開封ノ日數ヲ豫定シテ許可スヘシ

第一項 九ノ一
第二項 八ノ一
第三項 七ノ一
第四項 六ノ一
第五項 五ノ一
第六項 四ノ一
第七項 三ノ一
第八項 二ノ一
第九項 一ノ一
第十項 九ノ一
第十一項 八ノ一
第十二項 七ノ一
第十三項 六ノ一
第十四項 五ノ一
第十五項 四ノ一
第十六項 三ノ一
第十七項 二ノ一
第十八項 一ノ一
第十九項 九ノ一
第二十項 八ノ一
第二十一項 七ノ一
第二十二項 六ノ一
第二十三項 五ノ一
第二十四項 四ノ一
第二十五項 三ノ一
第二十六項 二ノ一
第二十七項 一ノ一
第二十八項 九ノ一
第二十九項 八ノ一
第三十項 七ノ一
第三十一項 六ノ一
第三十二項 五ノ一
第三十三項 四ノ一
第三十四項 三ノ一
第三十五項 二ノ一
第三十六項 一ノ一

第四款 造石検査

第十六項 造石検査ヲ爲スヘキ樽油ハ桶麵トモ口頭ヨリ三寸ヲ減シ容レ置カシメ毎桶麵トモ記帳ノ石數ニ據リ查定スヘシ

第十七項 前項記帳ノ石數ニ充タサルモノハ其現在入買ノ石數ニ據リ左ノ算則ヲ以テ調査スヘシ
入買明徑ヨリ以上ニアルハ其容積面ノ直徑ヲ底徑ト假定ス此底徑ヲ求ムルニハ口徑ヨリ閉徑ヲ減シ空積ノ深徑トス

假定ノ底徑ト口徑トノ和ヲ自乘シ甲トス
假定ノ底徑ト口徑トヲ相乘シ乙トス
右甲ヨリ乙ヲ減シ空積ノ深サ及ヒ〇・〇四〇三八四四 乘率ノ一位ヲ石位トシ其量尺度ハ分ヲ乘シ得ル數ヲ桶面

記帳ノ石數ヨリ減シ現在ノ石數ヲ得ル
明治十八年十一月大藏省第(七十六號)達ヲ以テ三項改正

第十八項 樽油熱成ノ節ハ前以テ其旨申出シメ之レカ検査ヲ爲スヘシ

第十九項 稅則第八條樽油製成トハ離リ上ケタルトキ又ハ火入ヲ要スルモノハ其火入ヲ爲シタルトキ及ヒ推リ上ケタル樽油(香水瀝水等ヲ混和シ火入ヲ爲シタルトキ)ヲ謂フ溜リハ膠石數ニ據リ製成ノ分合ヲ定メ其石數ヲ検査スヘシ
明治十九年五月大藏省訓令第二十號達ヲ以テ改正

第二十項 製造中他ヨリ樽油ヲ買入ルモノハ時々其石數ヲ届出サセ時宜ニヨリ之ヲ検査スヘシ

第二十一項 稅則第十一條非常ノ損害ニ罹リタル樽油ハ水火燬災并腐敗等入爲ヲ以テ防禦スヘカラサルモノニ限ルモノトス造石稅ノ免除ヲ請フモノハ其實況ヲ詳記シタル書面ヲ差出サシメ直チニ主任官員出張シ詳密ニ検査ヲ遂ケ數ヲ生シタルモノハ數測ノ爲メ減シタル石數其他損害ニ罹リ手入等ヲ爲シタルカ爲メ減却シタルモノハ其石數ニ就キ造石稅ヲ免除スヘシ

第二十二項 樽油製成以前非常ノ損害ニ罹リ又ハ廢棄シ若クハ腐敗シタルトキハ其實況ヲ詳記シタル書面ヲ以テ届

出シメ直チニ主任官員出張シテ詳密ニ検査ヲ爲スヘシ

第二十三項 造石稅納期以前廢棄セントスル者ノ検査済石數ニ係ル造石稅ハ其節之ヲ完納セシムヘシ

第二十四項 營業者ハ製造場一ヶ所毎ニ第十三號確形ニ倣ヒ標札ヲ關製シ其年製造見込ノ石數ヲ書載シテ戶外ニ掲出セシムヘシ
但其石數ヲ増減シタルハ其時々紙札ヲ貼付シ之ヲ更正セシムヘシ

第五款 申渡期限
第二十五項 左ニ掲グル諸表ハ此期限ニ從テ其地ヲ差立主稅局ヘ送付スヘシ

第二號書式 一樽油見込石高及製造場ノ數報告表 毎月調製 翌月十五日限

第三號書式 一樽油検査済石高報告表 全 全

第四號書式 一樽油見込石高及原質旨目報告表 前半期分 七月三十一日限
後半期分 一月三十一日限

第五號書式 一樽油製造營業稅表 全 全

第六號書式 一樽油造石稅表 毎年調製 翌年一月三十一日限

第七號書式 一樽油製造營業免許證札受拂計算表 全 全

第八號書式 一樽油規則事由報告表 全 全

第九號書式
 一 醬油製造石高區分表
 第十號書式
 一 醬油現在石高表
 第十一號書式
 一 醬油運分合表
 第十二號書式
 一 醬油小賣及自家用料製造人員表
 第六款 自家用料醬油
 第二十六項 稅則第二十一條自家用料ノ醬油ヲ製造スル者ノ收ハ豫テ取調置クヘシ
 第二十七項 醬油印 買ヲ應得ス小賣ヲ營業トスル者ハ其旨管廳ニ届出シムヘシ
 第二十八項 自家用料ノ醬油ハ時宜ニヨリ實地検査ヲ爲シ其他不取締之レナキ様取計フヘシ
 (驗形略ス)

○
五七三 太政官第拾四號布達 明治十八年 七月
 本年五月第拾號布告醬油稅則第十二條ニ據リ外國ニ輸出スル醬油ニ對シ造石稅金下戻ノ手續左ノ通相定ム
 第一項 外國輸出ニ係ル醬油ノ稅金下戻ヲ請ントスルトキハ甲號書式ノ願書ニ通テ輸出港稅關ニ差出シ其現品
 ノ検査ヲ經テ検査済ノ證明書ヲ受クヘシ
 第二項 造石稅金ノ下戻ヲ請フニハ乙號書式ノ願書ニ輸入港在留領事ノ捺印ヲ受ケタル陸揚免狀若クハ其他ノ
 書類等不在ノ港ニ於テハ該港稅關ノ通關證及當初輸出港稅關ノ證明書ヲ添ヘ該稅關ヘ差出スヘシ
 第三項 外國ニ輸出シ造石稅金ノ下戻ヲ受ケタル醬油ヲ更ニ輸入スルトキハ丙號書式ノ願書ヲ稅關ニ差出シ現品
 ノ検査ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ
 (書式略ス)

○
五七四 大藏省第六拾七號達 明治十八年 九月
 醬油印ノ付稅關場所等ノ件自今左ノ通り相心得ヘシ
 一 醬油印ノ付稅關スル場所ハ製造場區域外ト雖モ稅則取扱心得書第三項但書ニ準據スヘシ
 二 營業中都合ニ依リ醬油印ヲ營業者ニ賣渡スハ差支ナシ但本支ノ場合ニ於テハ賣渡人ヨリ其趣届出シメ検査員ノ
 證明書ヲ添付シ更ニ買受人ヨリ其地ノ検査員ニ申出検査ヲ受ケシムヘシ

○ 伺指令
五七五 千葉縣伺 明治十八年 六月十一日
 廢業ニ非スレテ未製成ノ醬油ヲ他ニ賣渡スハ苦シカラヌヤ
 大藏省指令 明治十八年 六月十七日
 相成ラヌ

○
五七六 熊本縣伺 明治十八年 六月三日
 醬油製造營業人ニシテ居家ニ推リ器機ヲ設置シ他ノ土藏(別屋敷ナリ)ニ醸造醬ヲ貯藏セルモノアリ右ハ製造所
 ニケ所トスヘキ儀ニ之レアリ候哉
 大藏省指令 明治十八年 六月十五日
 申出ノ通